人間の形

帆摘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人間の形

【Ｎコード】
Ｎ１２７９Ｈ

【作者名】
帆摘

【あらすじ】
２０１１年、日本。様々な環境に中において人々の心が歪んで行っている現在。カウンセラーとしてある一人の精神科医が人が奥底に抱える心にメスを入れる。その果てに見いだすのは光か闇か？人間なら誰しも持っている側面、そして貴方の中にあるもう一人の自分が映し出される？！

序章（前書き）

この作品に出てくる登場人物は全て架空の者であり、実在する人物、背景とは一切関わりがありませんので、ご了承下さい。

序章

創世記：1章27節
「神はご自身のかたちとして人を創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」

渡部　聡：36歳、男性ーー職業　精神科医／カウンセラー　趣味：人間観察

東京都のはずれにある、とある一角のビルの3階にこじんまりとした看板が掲げられている。
「ーーあなたのお悩み、相談をお聞きしますーー」

2001１年、毎日様々な悪いニュースが新聞、テレビを賑わし、少しずつこの国の何かが狂っていく。失業者が溢れ、親が子を殺し、子が親を殺す・・ネットに依存し、人と人との垣根が薄れていく中、人は何を求めて足掻くのだろうか？

事務所兼、応接室で渡部は読んでいた新聞をテーブルの上に掘り投げると、ソファーの上で長い足を組み替えた。医学部を卒業し、アメリカの某大学院でトレーニング兼インターンを受け、第一線の精神科医達とコミュニティーの中で関わって数年。

2007年に帰国した私は東京都はずれにあるビルの一室を借り、悩み相談、俗にいうカウンセラーとして事務所を開いた。この現代において、悩みや憂いを持たない人間など一人もいない。その悩み

が大なり小なり、この屈折した社会の中において人であろうともがいている。

そして、今日も一人・・一筋の光を求めてドアをノックするーーだが光の先に待っているのは必ずしもその人間が求めていた事と一致する訳ではないのだ。

「センセ、お客さんですよ！ほらっ、テーブルの上を片付けて下さい。ーーああ、もう、またこんなに散らかして！」助手兼受付の三村　里美（２８歳）が慌てて散らかった応接室の片付けをしながら、私の方をちらっと睨んだ。

「先日電話のあった、新しいクライアントさんです。若い女性の方ですよ。さっさとそのみっともないシャツを直して下さい。今呼んできますから・・」

そう言ってテーブルの上のゴミをまとめてゴミ箱に投げ入れるとさっさと三村は出て行った。

第一章：カルテ1、縛る女

三村に促されて部屋に入ってきたのは白のタートルネックにラベンダー色のカーディガンを羽織った女性だった。大体２０代の後半だろうか・・？

「あ、あの、、先日電話で予約した内田　咲子です。」

ゆっくりと女性を観察しながら、私は口を開いた。

「はい・・。内田さんですね。今日は、初めまして。私は渡部　聡と言います。どうぞ宜しく。」と手を差し伸べると、女性は少し吃驚した様に私の手を見ていたが、おずおずと手を伸ばし握手する。私は少し微笑んで応接室のソファーに座るように促す。三村君が女性に尋ねる。「紅茶、コーヒー、それともお茶・・どちらが宜しいですか？」

「あ、、すいません。コーヒーを御願いします。」

女性は少し居心地悪そうにあちこちに目線を彷徨わせていたが、そのうち落ち着いてきたのか私に目線を戻す。三村が盆にのせた2客のコーヒーとミルク、砂糖を運んできた。

「どうぞ。ミルクと砂糖はここに置いときますから。」

「ありがとう、三村君。」三村君は私をちらっと一瞥すると軽く礼をして出て行った。せっかくの美人さんなのだから、もう少し愛想が良くても・・・と思うが怖いので口には出さない。

クライアントの女性が口を開いた。「あの、ここでは、何でも相談事を聞いてくれるんですよね？」

「はい。一応それが私の仕事ですから。」短く答えて私は三村君が

たてた濃いブラックのコーヒーをズズッと飲み込んだ。苦い・・・・・。

女性が意を決したように話だした。「私・・・困ってるんです。2ヶ月程前まで付き合っていた彼氏と別れて、今結婚を前提にお付き合いしている男性がいるんですけど、、前の彼氏がしつこく付きまとってくるんです・・・。会社の前で待ち伏せしたり、家の前で何時間も立ってたり、電話も何回も、何回も・・」

私は女性の顔をもう一度じっくり観察する。恋愛相談か・・いや、何か違った匂いがするな。

「はあ・・・それは、困りますねえ。でもそれだったら、悩み相談よりも、警察に行かれた方が宜しいんじゃないですか?」

すると女性の目がまた不安定にきょろきょろと動く。「いえ・・仮にもずっと付き合ってきた人だし、警察に通報するのも・・・。それに別に悪い人って訳では無いんですよ・・」

彼女はそういって口ごもった。

私は問う。「それでは、貴方の望みはその彼氏と別れて、その新しい、婚約者・・・ですか?とうまく往くようになりたい、、とまあそう言う事ですか?」

と、いきなり彼女の顔が明るくなって意気込んだように語る。「そうなんです!今お付き合いしている方は藤堂さんって言うんですけど、新鋭の実業家で、本当に優しくって、私の事を考えてくれて・・いい人なんです。」彼女の顔がほんのりと赤く染まった。

私は何やら奇妙な感覚に陥る。こういう女性を以前にも見た事がある・・そうだ、あれはシカゴでの研修の時だったか・・・?私はゆ

っくりと彼女に問いかけた。
「わかりました。内田さん・・とりあえず、そのストーカーになっているというその男性の事について詳しくお聞かせ願いますか？」

縛る女2

「彼とは、サークルの飲み会で知り合って付き合い始めたんです。あんまり会話とか、弾む方じゃなかったけど、何でも私の事を最優先して、私の言う事は何でも聞いてくれました。でも、彼は友達も少ないし、何かというとすぐ、君のためにしたのにって押しつけがましくて・・それが原因でよく喧嘩もしてました。彼が会社に務め出してから、その傾向が強くなって、うんざりしてきた所だったんです。」

「ほう・・・。」相づちを打ちつつ私は続きを促す。

「そんな時、友人の結婚披露宴で藤堂さんに出会ったんです。彼は経済力もあって、紳士的で優しいし、私の事を愛してると言ってくれて・・結婚を前提にお付き合いしたいって・・だから私、彼に別れようって。。これ以上この関係を続けてもうまく往かないからって・・・。」

ーーふむ・・まあつまりは元カレよりも良い物件の男が見つかったので前の男は打ち捨てるって訳か・・男にとっちゃあ、楽しい話じゃないな・・。渡部は心の中で呟く。ーー

「そしたら、彼、何回も私の所にやってきて泣くんです。私無しじゃ生きて行けない、なんでもお前の言う通りに生きてきた、なんでも君の望む通りにしてきたのに、何故僕を捨てるんだって。なんか、私、気持ち悪くて・・・。」そういって彼女は口ごもった。口元に手をやる彼女の薬指には大きなダイヤモンドが光っている。

ーー泣く男・・か。まあ気持ちもわからんでも無いが、男のほうも

ちょっとアレだな・・

私は彼女に向かって言った。「そうですか、ではもし可能なら私がその男性と一度お話して、貴方を諦めるように説得して見ましょうか・・？」

「可能・・だと思います。きっと彼も何か気が病んでいるんだと思うんです。最近ほら、鬱とかってよく聞くし・・・私から連絡して、彼にここを訪ねるように言います。彼は、、私の言う事ならなんでも聞きますから・・。」

そういうと彼女は小さく礼をして、ブランド物らしいバックを手に出て行った。

ーーあれも、その男に買ってもらったものだろうか・・？彼女一方だけの話を聞いていると振られた女をしつこく付け回すストーカー男だが、、どうも彼女の話は色々と引っかかる所がある。ーー

渡部はタバコに火をつけると深く吸い込み、ゆっくりと煙を吐き出す。ヘビースモーカーと言う訳ではないが、考えごとをする時の一服は頭が冴える。

ーーまずは、その男の話を聞いてからだな・・。できればもう一人、婚約者だという藤堂という男にもあってみたいが・・まあもう少し様子を見てみるか・・・ーー

「センセ、クライアントさん、お帰りになられたんですね。何か調べとく事とかありますか？」三村がコーヒーカップを片付けながら聞いてきた。

「ああ、ありがとう、三村君。まあ、今日の時点では、まだ判断が

つきかねるなあ。そうだ、僕がシカゴに研修で居た頃のファイルをコンピューターから引き出しておいてくれるかい？ちょっと調べたい事があるんだ。」私は立ち上がって背伸びをすると三村君に御願いする。

「分かりました。お昼はどうなさいますか？下の喫茶店に行くか、それとも天丼でも配達頼みますか？」三村が淡々と聞いてきた。

「ああ。もうそんな時間か・・。」時計をみると１２時半を回った所だった。

「それに天丼って・・・私は別に天丼ばかり食べてる訳じゃ・・・う～ん、そうだなあ・・どうだい、三村君、一緒にランチでも・・」

「お断りいたします。片付けなくては行けないファイルがいくつかありますし、私はお弁当を持参してきてますから・・。」ピシャっとした声であっさりと断られた。つれない・・。

私はタバコを灰皿に押し付けると、一人寂しく部屋を出て行く。

「じゃあ、ちょっと出てくるよ。１時間程で戻る。」そういって私は事務所を後にした。

縛る女3

街の商店街にある家族経営の中華「福萬圓」は安くてボリューム満点の中華セットが食べられる私のお気に入りの店だ。少したてつけの悪くなった扉をガラガラと開けると店の中から良い匂いが漂ってくる。

「おや、センセ、いらっしゃい。今日はちょっと遅いお昼だね。仕事かい？」馴染みのおかみさんが厨房から声をかけてくる。

「ああ、今さっきまで、人と会っていたんです。今日は何がおすすめですか？」

「そうだねえ、センセの好きな塩鮭と豚挽肉の蒸し物があるよ。」おやっさんが奥から声をかける。「おいしそうですね～。じゃあ、それ頂きます。」「まいど！」

少し食べ過ぎたか・・満腹になったお腹をさすりつつ、お冷やを飲み干すと私はお金を支払って外にでた。腹ごなしに少し歩くか・・

私はゆっくりと周りを見回しつつ近くの公園を目指し歩き出した。私は幼い頃から、人を観察するのが好きだった。一人っ子で両親が共働きをしていた私はいわゆる鍵っ子だった。とはいえ、両親の留守中は、近所の人の良いおばさん達がおやつをくれたり何だりと面倒をよく見てくれていたし、同じ年頃の友人も近くに住んでいたので、さほど寂しいとは感じていなかった。だが仲良さげに兄弟喧嘩をする近所の子供達を見る度、自分にも兄弟が居たらと、何度か思った事はあったが・・。よく公園に行ってはそういった近所の人達のごく普通の営みを見ているのが好きだったのだ。それが高じて今の様な職業につく事になったのかもしれないが、今でも時間があるとぶらっと街へ出て行き人間ウォッチングを楽しむ。

まあ、あまり趣味が良い・・・とは言えないが、様々な人間を観察するのは面白い。例えば私の斜め前を歩いているカップルだが、十代の半ば、私服を着ているが高校生ぐらいだろうか？夏休みでもないし、この時間帯にこの繁華街を歩いているという事はサボりか・・女のほうは茶髪のシャギーの入った髪を耳にかけ両手を男の左腕に巻き付けて寄りかかる様に歩いている。あれだけピンの高いヒールを履いていては腰に負担がかかるだろうに・・どぎつい化粧をしているが、まだまだ顔は幼い。男の方もやけに脱色して黄色くなった頭をして踏んだら脱げそうなズボンを垂らしながら履いている。将来禿げないか心配だ。携帯片手に大声で喋りながら歩いているカップルをよそ目に一抹の不安を覚えたが、珍しい光景でもないので、視線を外し早足でそのカップルを追い抜かして行く。

公園内のベンチに座ってしばらくぼーっと子供を遊ばせる奥様のグループを見ていたが、何やらこちらを見ながらこそこそと話をしている。不審人物と思われただろうか・・・。昨今人さらいや痴漢強盗など、あちこちで一面を騒がせ、小さな子供を持つ親などは特に過敏になっていると聞く。時計にちらっと目を走らせ、そろそろ戻るか・・と立ち上がった。先ほどまでじろじろとこちらを眺めていた奥様方が明らかにびくっとして目線を反らす。

軽く苦笑し、私はゆっくりと公園を出ると事務所に向かって歩き始めた。そろそろ優秀な助手でもある三村君が資料を出しておいてくれている事だろう。私はぼんやりと空を流れる雲を見つつ考えていた。

見慣れたビルの階段を上り、3階にある事務所の戸を開く。「ただいま～。」

奥のパソコン机で作業をしていた三村君が私の方を振り返り黙って指を指す。ん？なんだ？応接室の方に目をやるとそこにはグレーの

スーツに身を包んだ一人の若い男が座っていた。
「はれ・・・？今日はもう何も予約とか入ってなかったよね？」三村君に確認する。

「はい。ですが、飛び入り・・・というか、朝のクライアント、、内田さんの元彼氏さんだそうです。」小声で三村君が私に言う。
「ええっ？・・どうなってんですか。。まあでも、もう既に来ているものを帰れとは言えませんしね。本当に急ですね・・」そういって私は改めてもう一度応接室に居る男に目を向けた。

縛る女４

私は、洗面所に向かい、手洗いとうがいを済ますと、応接室に座る男のもとへと出向いた。外出からの帰りにはしっかり清潔に・・外にはバイ菌がいっぱい居るんですよ！と三村君は母親のようにうるさいときがある。

こちらに気付いて男が顔を上げる。中肉中背。グレーのスーツの上下に地味なネクタイ。ホワイトカラーのシャツがやけに眩しい。短髪に可も無く不可も無いといった容姿の顔が乗っている。見た目はどこにでも居そうな普通の青年だ。だが、目を合わせた途端、捕食者に餌食にされるウサギのように怯えが走ったのを私は見逃さなかった。

私は努めてにこやかに笑い、立ち上がった彼と対面する。

「え～っと、あなたは、内田さんの元彼という・・。お名前お聞かせ願いますか？」

「本橋です。本橋　亮太・・・。あの・・咲子にここにくるようにと連絡があって・・・」本橋という男はおずおずと答える。

・・この男には自尊心と言う物が無いのか？「内田さんに、言われたからここに来られたのですか・・・？貴方、お仕事されてるんですよね、こんな時間に抜け出して大丈夫なんですか？」自然私の口調に少し剣が入るが、それぐらいは許してほしい。女に言われたからといって、自分の仕事を投げ出してくる男は実際どうかと思う。

本橋がうろたえながらフォローする。「いや、、僕今日は、外回りの営業で・・。その、大丈夫です。ちゃんと仕事はしてますから・・・。」

私はふう、と短く息をはくと言った。「まあ、いいでしょう。確か

に貴方のお仕事の事まで私が心配することも無いですからね。では、せっかくいらして下さった事ですし、お話を伺ってもよろしいですか？」

「は、ハイ・・。でも、あの・・何を話せば良いんですか？」

自分の置かれている状況を理解していないのだろうか。。どうもこの男と話していると調子が狂う。私は口を開く。「そうですね・・。まずは貴方と内田さんの出会いから、現在に至るまでのいきさつをお話願いますか・・？」

村田君が入ってくると、お冷やを二つテーブルの上において出て行った。朝の時の態度と違う所をみると、彼女も突然の訪問者に腹を立てているのだろうか。仕事に熱中している時に邪魔をされるのを嫌う彼女のささやかな復讐？と言った所か。まあ、何にしろ話が長くなりそうなのは、目に見えている。きっとそのうち喉が渇くだろうからちょうどいい。

本橋は握りしめた拳に目を落としつつ、語り始めた。「僕が咲子と出会ったのは、友人に誘われて行ったサークルの飲み会でした。人数合わせに無理矢理連れて行かれたものの、僕はああいった賑やかな集まりは苦手で、、でも場の空気を悪くする訳にも行かないので適当に周りと合わせて話したりしてました。咲子は、取り立てて目立つ美人ってほどでは無かったんですが、よく気がつくタイプで、幹事のフォローをよくこなしていて、なんかしっかりした人だなって気になって、飲み会が終わった後に話しかけてみたんです。

咲子はすごく知識も豊富で、話しているとあっと言う間に時間がたって行く様で、自分でもどんどん彼女に惹かれて行くのが分かりました。それで、その後メルアドの交換をして、何度か合ううちに付き合おうと言う事になりました。

最初は何もかもが新鮮で、彼女の笑う顔が見たくて、色んな雑誌を

調べて、人気のデートスポットに行ったり、高級レストランで食事したり、本当に僕は咲子がいてくれるだけで幸せだったんです。付き合い出して1～2年はそれでも良かったんですが、僕が就職して仕事が忙しくなると、なかなか合う事ができなくなって、、それでも時間を見つけては色々な所に連れて行ったり、プレゼントを上げたりしてました。優先順位が咲子だから、自然と他の友達とも疎遠になってきて、これじゃあ、不味いと思って友達と仕事の帰りに飲みにいったりすると、必ず咲子から電話がかかってきて、むくれられるので、機嫌を直してもらうのが大変で、またそうこうしてる間に他の友達ともうまく行かなくて来てました。

そうすると、今度は、なんで僕に友達が居ないのかって逆切れされて、、友達を優先させようとすると、咲子は目に見えてむくれて機嫌が悪くなるというと、私が悪いっていうの？って怒られて・・僕は咲子を失いたくなかったからなんでも彼女の言う通りにしてきました。」

そこで、一気に話して喉が渇いたのであろう、本橋は水を取り、こくりと飲み下した。

なるほど・・と私は相づちを打つ。「それからどうなったんです？」

縛る女5

「その頃から、咲子の様子がちょっとおかしい事に気がつきました。まあ、僕がそれまであまり咲子の内面に目を向けていなかった・・いや、気付きたくは無かったからなのかもしれませんが、彼女の行動や言動にあまりにも裏表があって、咲子自身はそれに気がついていない。

表面上は華やかで友達がいっぱい居るように見えた咲子ですが、それはすべて表面的なものであって実際には咲子にこそ本当の意味で友達がいない事など一旦気がつくと、次から次に咲子の矛盾した性格に気がついていきました。

ある時にはヒステリックに僕に当たりちらしながら自分の正当性を認めさせようとし、次の日にはころっと、態度を変えて謝ってくる。不自然に愛情を求め、それを言葉や形で証明させたがり、不安定な時には体の関係を自分から強要してくる事が多くありました。そしてひどい時は僕を罵倒しながら、私が悪いのだと泣く始末です。

そんな関係が2年ぐらい続いたでしょうか・・僕もだんだんと自覚無しにおかしくなっていったんだと思います。最初は彼女をなんとかしようと思ってた筈なのに気がつけば僕の方が逆に囚われておかしくなって行く・・・こんな状況から抜け出したいと思う自分と咲子を失いたくない、その為になら彼女を真綿でくるんで、何もかもから守って上げたいと思う自分がいて、どうしようも無いんです。ーーー笑えるでしょう？」と本橋は力なく笑った。

私は、やはり・・と今日の朝感じた違和感の正体を突き止めつつあった。

「本橋さん、それは確かに良くない傾向ですね。“共依存”という言葉を知っていますか？そういった関係はお互いに取って何も良い

ものを生み出しませんよ。そうですね・・もう少しお話しをお聞かせ願えますか？他にもまだ色々とそういう関係に陥った理由と原因があるはずだと思うのですが。」

本橋は小さく頷くと続きを話始めた。「彼女に嫌われないようにと、僕はなんでも彼女の望みを聞いていました。相変わらず、何度も喧嘩したりする事もありましたが、僕は、彼女を守る為に、彼女の望み通りにして、安心させてあげるのが一番だと思っていたんです。ですが、そうこうしてるうちに咲子は私から少しずつ距離を置くようになってきました。仕事で何か嫌な事があった時や、むしゃくしゃしている時、何か下心のある時だけ僕に連絡を寄越すようになって、それから暫くして、ある日いきなり別れ話を切り出されたんです。自分には好きな人が出来たから別れたいって。

その時は本当にむかついて、頭に血が上って怒鳴り散らしました。今まで自分の都合の良いように僕を使っておいて、用が無くなったら切り捨てるのかと。その時、咲子は僕のそんな姿を初めて見たからでしょうか、すごく震えて何度もごめんなさいと謝ってきました。僕も咲子にあんな風に怒鳴った自分が恥ずかしくて、情けなくて咲子に謝りにいったんです。でもなんて言っていいのかわからなくなって、・・・僕は咲子を失ったら生きて行けない、僕には彼女が必要なんだと何度も訴えました。格好わるいとか、そう言う事も頭の中からさっぱり抜けていて・・・。でもその反面、諦めようと思って僕が暫く連絡をしないでいると、咲子から電話やメールがくるんです。結局僕も諦めきれなくて・・・」

本橋は小さく嗚咽を漏らしながら泣き始めた。

う～ん・・私は男を慰めるのはあまり趣味ではないんだが・・。しかし、この話から推測するに本橋さんの方は今なら、ちゃんとしたカウンセリングを受ける事でまだ立ち直る事ができるだろうと思う。

彼は自分の状況をまだ理性を持って把握している部分がある。ストーカー行為は行き過ぎだと思うが、それは彼が共依存の関係に陥ってしまっているのが大本の原因だろう。だが、実際に問題があるのは彼女の方・・。私が彼女と話していて気がついた違和感・・まだはっきりと断言する事は出来ないが、彼女はアダルトチルドレンではないか・・と。

縛る女6

私はとりあえず、本橋さんを慰める様に肩をぽんぽんと軽くたたく。
「あなたはよくやっていらしたと思いますよ、本橋さん。ですが、もうそろそろ、そういった関係から卒業しませんか？貴方の人生は、本来ならばそうやって人に束縛されるものではなかったはずですよ。内田さんが貴方から離れて行かれたのは、ある意味貴方にとってラッキーな事だと思います。一度、頭を冷やして、周りをよく見回して下さい。あなたには、もっと素敵な出会いがまっていると思います。」

嗚咽を漏らしながら聞いていた本橋は顔を上げてキッと私を見つめ言った。
「そんな事はありません！僕は咲子に縛られているなんて思ってないです。彼女には僕が必要なんです！だって、今でも咲子は僕を必要としてくれている・・・僕を愛してくれてるんだ！」

私は彼の瞳をじっと見つめ返し言った。「本当に・・・本当にあなたはそう言い切れますか？貴方と内田さんの関係が普通でない事はご自分が一番良く知っていらっしゃるのではないですか？彼女が自分よりも条件の良い他の男の元へ去り、普段は連絡もないのに、自分の都合の良い時だけ貴方を利用する・・・端から聞いていてもおかしいですよ。それが貴方の言う「愛」のあるべき形ですか？本当に貴方はそんな関係を望んでいるのですか？」

「違う！咲子はあいつにだまされてるんだ！だから僕は、咲子の目を覚ましてやろうと・・・」本橋の声がいっそう大きく部屋の中にこだました。

「目を覚まさないと行けないのは貴方の方です、本橋さん。落ち着いて考えてみて下さい。貴方は彼女からの呪縛に縛られてます。」

「違う！違う、違う！僕は咲子を愛してる・・・咲子を幸せにできるのは僕だけだ。」また本橋の声に嗚咽が混じる。

私は、ふうーと軽く息を吐き出すと彼が落ち着くのを待つ。「・・・・では、言い方を変えましょう、貴方は何を望んでいるんですか？彼女とよりを戻したい？内田さんの幸せは貴方と共にいる事だと？」

「そ、そうだ！僕なら、あいつ以上の事を何でも咲子にしてやれる！」本橋が答える。

「貴方の考える愛情とは、なんでもかんでも、彼女のしたい様にしてあげる事なんですか？彼女が、貴方に死ねと言えば、死ぬのですか？誰かを傷つけろと言われればその通りにするんですか？！それだったら、貴方の行動は矛盾している事になりますよね、本橋さん。なんでも、彼女の言う通りに・・・？それなら、何故今なお、貴方は彼女に付きまとっているんです？彼女は、貴方にはっきりと、別れたい、もう付きまとわないでくれと言われたのでしょう・・？」

「それは・・・でも、それは咲子の本心じゃない！、きっとあいつに言わされているんだ！」

「あいつとは、内田さんの婚約者ですか？」

「そうだ！あんな奴、咲子にちょっと大きなダイヤモンドを買ってやっていい気になりやがって・・咲子だって一時的に付き合ってやってるだけだ。すぐに目が覚める！」

思った以上に重症ですね・・・この方も・・・。ここまで妄信的になれるのはある意味すごい事ですが、、。私はコップの水をこくり

と飲み、唇をつかの間潤す。
「本橋さん、あなたの愛は自分を相手に押し付ける事ですか？相手の同意を求めず、ただ一方的に自分の気持ちを押しつける・・・。彼女の望み通りにする事によって自分の中に満足感を見いだし、自分が必要とされていると、安心する・・・。でもね、本橋さん、本当の愛とはそういうものではないですよ？確かに愛の中には、相手を無条件に受け入れる事もあります。でも、それは、見返りを求めないものです。一見あなたは、彼女に対してそのように振る舞っているかの様に見えますが、それは、本当に彼女への愛から来ているものでしょうか？

私には、自己愛にしか見えません。あなたの彼女への執着心は自分を愛してもらいたい事の裏返しですよ。人間誰しも、少なからず自分が大切、自分を愛して欲しいという欲望をもっています。それは大切な事です。自分を愛する事の出来ない人間は本当の意味で他の人を愛する事はできないでしょう・・でも何事も行き過ぎは毒になります。」
私はゆっくりと相手の反応をまつ間、時計にさっと目を走らせる。彼と話し出してから2時間が過ぎようとしていた。

縛る女7

もうこんな時間か・・・クライアントと話をしていると時間はあっという間に過ぎて行く。顔を上げると本橋の視線ともろにぶつかった。

「自己愛・・・ですか・・そうかもしれませんね・・」自嘲気味な笑みを見せる。

また暫くの間、お互いに一言も話さない奇妙な間が二人の間に鎮座した。私は穏やかに語りかける。「どうでしょう、もう一度、そうですね、例えば、1週間でも内田さんとまったく接触せず、過ごしてゆっくり考えてみられてはどうですか？もちろん、メールも電話もすべて止めて、彼女と出会う前の貴方の事を思い出してみて下さい。それまで、週末はどうされてました？例えば、友達と一緒に遊びに行かれたり・・？」

「・・・昔は、キャンプが好きでよく友達何人かと連れ添って山に行ってたものです。釣りだってあんなに好きだったのに、いつの頃からか、まったく行かなくなりましたね・・・確かに僕は咲子の事に精一杯で自分や周りが見えていなかったように思います。」

「そうですね、本橋さん、とりあえず、1週間だけでも、私が言ったようにしてみて貰えませんか？そして、1週間後にもう一度私のところにいらしてください。」

「分かりました・・・いきなり押し掛けて長々とお話を聞いて頂いて申し訳ありませんでした。」そういって本橋は立ち上がり、深々と礼をした。

まだ、社会的通念はあるんですね・・まあ、そうでないと、このご

時世ただでさえ大変だというのに会社でやっていくのは難しい。仕事に関してはやり手の方なのかもしれませんね。下手に真面目そうですし、いや不器用と言うべきか・・・？私は、にっこりと微笑むと、彼を入り口へ案内しつつ横目で三村君の様子を伺う。彼女はちらりとこちらの方を見ると立ち上がろうとする。私は目で彼女を制すると、そのまま、本橋さんに、もう一度挨拶をした。
「本当に失礼致しました。」パタンと音がして本橋がでていった。

三村君が私の方を軽く睨んで口を開く。「センセ、いつも言ってますが、ボランティアじゃないんですよ？いきなり押し掛けてきて何時間も話をして、言いたい事だけ言って出て行くなんて・・・」とぶつぶつ文句を言い始める。
私はモゴモゴと返答する・・「いや、まあ・・・そうだけど、でもこれだって仕事の一環なんだし、そんな怖い顔しなくても・・ね？」
「何言ってんですか、センセがそんなだから毎月毎月赤字になっちゃうんですよ！もうちょっと経営の事も考えてください！事務所の維持費だって馬鹿にならないんですから。」
それを言われると私もつらいのだ。なんせカウンセラーと言う仕事は聞いていくらの世界だが、内容に反して、儲かるかと言われればはっきりいって空しい。うまく経営をしているところもいっぱいあるのだろうが、つい私はお金の事は二の次になってしまうのだ。

「それよりも、三村君、今朝頼んでおいた資料なんだけど・・・。」
慌てて私は話をそらす。
「話をすり替えないで下さい・・。まあ、良いですけど・・・もうデータは引き出してあります。ファイルナンバー　５２３番です。」
「さすがだね、三村君、ありがとう。」もちろん感謝の言葉は忘れてはいけないのだ。
三村君はふいっと窓の外を見ながら「いいえ。」と呟いた。照れているのだろうか？何はともあれ、とりあえず、ファイルに目を通し

ておこう。このファイルは私がシカゴにいたときに得た宝ともいえるデータである。様々な症例や事例、特徴が詳しく書かれており、中には個人情報や機密事項も含まれているので、門外不出のデータなのだが、これらの記録は私が仕事をしていく上でとても大切なものだ。デスクの前に座り私は、ファイルをクリックした。
画面に、データファイルが映し出された。その中に入っている1枚の写真に私は目を留めた。これだ・・・。ジェシカ　ミッドフォード２４歳（偽名）、美しいスタイルと顔立ちを持つ、イギリス系アメリカ人だった。私は目を閉じてその時の情景を思い出す。そう、彼女がクリニックを訪れたのは初夏の暑い日だった。

縛る女8

颯爽とオフィスに入ってきた金髪の彼女は胸元の大きく開いたタイトな赤いミニのワンピースを着こなし、派手な化粧をしている。つんと安物の香水の匂いが私の鼻先をかすめた。
彼女は私を見ると顔をしかめて言葉を並べ立てた。
「あなたがドクターなの？それとも助手？あなたチャイニーズ系？思ったより背が高いのね・・アジア人って皆背が低いと思っていたけど・・」
失礼な事を次から次に並べ立てる彼女を制して私は努めてにこやかに言い返す。「いいえ、私は日本人です。ミス　ジェシカ・ミッドフォードさんですね？初めまして。私はサトシ　ワタナベです。このクリニックで見習いの医師をしています。トシと呼んで下さい。」そういって私は彼女に手を差し出した。挨拶はアメリカ社会では基本だ。しっかりと手を握る。

「ふん・・そんなにひどい発音じゃないわね。」と彼女が言った。
「・・そうですか？ありがとうございます。では、早速ですがミス　ミッドフォード、今日貴方がこちらに来られた経緯をお聞かせ願いますか・・？」
彼女は椅子に座ると挑発するように足を組み替え、私をじろっと睨んだ。
「何だ・・知っているんじゃないの？」
「大まかには聞いていますが、一応あなたの口から事の詳細を聞きたいので・・お話願えますか？」
「・・・前に付き合ってた奴が私の事をコート（裁判所）に訴えやがったのよ。私がおかしいってね。それで、判決が出て、私がここ

に来る羽目になったって訳、クレイジーなのはあいつの方だっていうのに、ふざけてるわ！」

「ミス　ミッドフォード、何がおかしいと訴えられたのです？」

「知らないわよ！私の事おかしいってあいつが・・」そういうと彼女は不安そうに爪をかじり始めた。いつも爪をかんでいるのだろうか・・？洋服と同じ赤いマニキュアで彩られた爪は深爪になっていてかじれそうもないように見えるが彼女はおかまい無しだ。

「あの・・ミッドフォードさん？あまり爪をお噛みになると出血してしまいますよ？」

すると彼女は爪を噛むのを止めて私を見ていった。「ほっといてよ・・それよりも、私、いつまでここにいれば良い訳？私忙しいのよ。ボーイフレンドを外で待たせてあるの、さっさと終わらせてくれない？」

『ミッドフォードさん、ご存知だとは思いますが、貴方はコートから週に1回1時間ずつのカウンセリングを6ヶ月間の間受けるように指示されているはずです。貴方がこの部屋に入ってきてからまだ5分も立ってませんよ？もう少しリラックスして私と話しませんか？」

「分かってるわよ。ちゃんと話をすればいいんでしょ。で、何が聞きたいって？」

「ですから、あなたが、訴えられた原因です。どうしてその様な事になったのですか？」

彼女はイライラしながら、また長い足を組み替える。私はできるだけ彼女の目を見ながら話す事に努めた。

「別に大した事はしていないわ、ただ、あいつが私と別れて出て行

くなんて言うから・・あいつが寝ている間にベットにくくり付けて暫くの間放置しただけよ？私は悪くないわ、あいつが全部悪いの！」

「ですがミッドフォードさん、彼は3日間の間手足をくくり付けられて放置され、脱水症状を起こして危ない状況だったのです。あなたは危うく殺人罪として起訴されるところだったんですよ、それを分かっていますか？」

「それは・・ちょっとは悪かったって思ってるわ、裁判も色々と大変だったし・・・」彼女は口ごもった。

「確かに裁判では、彼が貴方に暴力を奮っていた事もあり、情状酌量されたから、あなたはこうしていられる訳です。ですが、どんな理由があるにしろ、貴方のやった事はほめられた事ではありませんよ。これから半年の間、しっかりと自分自身を見つめ直して今度は健全なお付き合いができるようになさって下さい。」

「あなたって・・・説教臭いのね。それで彼女はいるの？」ふふんと彼女は鼻を鳴らして私に言った。

私も努めて冷静に返事をする。「私の事はどうでも良いですよ。ところでミッドフォードさん、あなたのバックグラウンド、ご家族の事について聞かせてもらえますか？あなたがどこでどんな風に育ってきたのか・・・」

「自分の事は何も教えないくせに、私の事ばかりって不公平じゃない？まあ、いいわよ。どうせ他に話す事もないし教えてあげるわ。」

「よろしくお願いします。」そういって私は改めて彼女と向き合った。

縛る女9

彼女は話始めた。「私が生まれ育ったのはテキサス州のテイラーという小さな町よ。本当につまらない町だったわ。老人が多くて・・私の両親も私が7歳ぐらいまで一緒にいたけど、物心ついた頃からよく喧嘩してたわ。父親はアル中で、しょっちゅう仕事を辞めてその度に一騒動あったけど、そのうち父親が出て行って、その後母は私を連れて二度目の結婚をしたわ。新しい父親は町で自営業を営んでいて、経済的には結構裕福だったわ。あっちも離婚歴ありで、子供が二人、ステップブラザーとシスターができて一気に3人兄妹ってわけ。」

「なるほど、一人っ子からいきなり三人兄妹になったのですね。兄妹達とは仲は良かったですか？」私は尋ねる。

「そうねえ、別に良くも悪くもなかったと思うわよ。でも笑っちゃうのがその後よ、私の母親ね、メアリーっていうんだけど、私が14になった頃だったかしら・・子供が三人もいる生活に嫌気がさしたとか言っちゃって、私を置いて出て行ったのよ。その後は行方知れず、どこで何をしてるんだか・・・。」

「え、では、ミッドフォードさんはどうなさったんですか？」

「高校を出るまでは母の二度目の結婚相手が面倒見てくれたわ。自分の子供と一緒にね。父親も子供だけ押し付けられて離婚されてさ・・・気の毒よね。これでもステップファーザーには感謝してるのよ。あんなロクデナシの親達から生まれた、血の繋がりのない私を育ててくれたんだから・・・。」

「そうですか・・・。高校を卒業してからはどうされたんです？」
「さすがに大学まで行かせてもらおうなんて思ってなかったわ。小さな町に嫌気もさしてたしね。だからその時に付き合ってた男の家に転がり込んだの。丁度彼がカンザスの大学に行ってアパートを借りてたからね。それまで私、テキサス以外の州って行った事なかったのよ。だから丁度良いと思ってね・・・でも彼ともそんなに長く続かなかったわ。彼は大学で新しい彼女を作って、私もバイト先で出会った男と付き合いだしたもの。

それから、何人かの男と付き合ったけど、みんな長く持たないの。どうしてかしらね・・でも男なんて皆一緒よ。私がちょっと誘えばすぐに落ちるの、面白いぐらいにね・・・。」そういって彼女は声を上げて笑った。

その後何度かカウンセリングを続けるうちに分かってきた事が幾つかあった。彼女が好きになる男のタイプ、嗜好、関心のある事柄から嫌いなものまで・・そして一番重要なポイントは彼女の行動の原点となっているもの。それは「愛情の欠落」から来ているものだと私は判断した。

そう、何故か彼女の付き合う相手は彼女自身がロクデナシだとののしる自分の両親と似たタイプである事、彼女が「捨てられる」というキーワードと連携して自我をコントロール出来なくなり、相手を束縛しようとする事など、週に一度、クリニックに来て話を聞く内に様々な問題が見えてきた。

彼女自身は気付いていないが、彼女の本当の心はまだ子供の頃の、欲しくても両親や周りから得られなかった愛情を必死に求めようとする子供のようだ。それも、貪欲に過剰に求めようとするあまり、様々なトラブルを起こしている。なるほど、聞いてみれば、彼女の

血のつながりのない父親はそれでも、それなりに彼女を愛していたのだろう、自分の子供として、他の子供達と分け隔てなく・・それでも彼女が感じた疎外感と埋められない孤独はファーストフードのように手軽で、後腐れのない相手ばかりを選び、体の関係を通してしか得られない一時の安心感や目で見える物を与えられる事で偽りの満足を得て自分の心に蓋をしてきたのだ。

彼女と付き合ってきた男達も最初は良いと思っていても、過剰に求められる愛情、またはその裏返しの束縛に嫌気がさし、別れを切り出し去って行く。本当の意味でのコミュニケーションを伴わない上辺だけの関係は最初から長く続くものではない。同じ様な関係を何度も繰り返してそのうち、今回彼女が起こした事件へと発展していったのだ。

私は暫く彼女の話を聞いて後、いくつかのアドバイスを彼女に与えた。

縛る女１０

まず最初に私は彼女に尋ねた。
「あなたの義理の父に、今まで何らかの感謝の意を示した、もしくは告げた事はありますか？」
少し考えて彼女は答えた。「あまり無かったと思うわ・・・。なんて言って良いかわからないし、それに今更そんな事・・照れくさいわよ。大体父さん達だって、きっと私の事なんて忘れてるわよ。血の繋がりもない娘の事なんて・・・もう家を出てから7年間・・一度も連絡してないのよ？」
「何かひとつでも良いですから、あなたがお義父さんに対して感謝している事を、伝えてみませんか？口で言うのが恥ずかしかったら手紙やポストカードでも良いです。どうです？」

「う・・ん・・わかったわ、でも期待しないで？」私は渋る彼女を勇気づけると、彼女は一度家に連絡を入れてみると言って帰って行った。

それから2週間後、彼女はオフィスに入ってくるなり興奮して私に告げた。「父から返事が来たわ、いつも私がどうしているか心配しているって。今度他の兄妹達も一緒に里帰りして父の誕生日を祝う事になったの！テキサスに帰る前にアーカンサスの義妹の家によって誕生日プレゼントを一緒に選ぶのよ。」彼女は十代の少女のようにとても嬉しそうだった。

それからまた頃合いを見計らって私は新たなアドバイスを彼女に与えた。彼女に必要な事は、まず家族関係の修復から・・・血の繋がりがあろうと無かろうと、彼女にとっての家族は彼らなのだ。以前より家族とコミュニケーションを取るようになった彼女は少しずつ

落ち着きを取り戻し始めていた。以前ほど派手に色んな男と交遊する事がなくなり、昼間仕事をしながら、夜間の大学にも通い始めた。

「最近、調子良さそうですね、ミッドフォードさん、何か変わった事はありましたか？」

「そうね、なんだか最近良い事ばかり続いて嘘みたいなの。以前喧嘩別れしたボーイフレンドのジェイムズと仲直りしてまた付き合い出したのよ、それに私仕事先でマネージャーを任されたの。最近の私の仕事ぶりがとても良いからって。」

家族からの愛情をもう一度確認し、受け止めた彼女は以前よりも表情が生き生きとしてよく笑うようになった。自分を受け入れてくれる存在を得た安心感により、ゆとりが生まれてきたのだろう。人間が変わるきっかけは何だろうか・・？どんな人生を歩んで来た人でも、些細なきっかけ一つで変わって行く事ができる。人とはそんな可能性を秘めたものなのだ。

「では、ミッドフォードさん、次はあなたの周りにいる人達に対しても今度は出来るだけ、感謝の言葉を繰り返し語ってみて下さい。どんな小さな事でも構いません。家族だけでなく、笑顔であなたのパートナー、仕事の同僚、そして近所の人達にも挨拶して下さい。」

ミス　ミッドフォードはおかしそうに笑いながら私に言った。「あなたって本当に、おかしい事ばかり言うのね。でも私、あなたを信頼しているわ、ドクター・トシ、あなたがそう言うならやってみるわ。」

彼女の素晴らしいところは、私の言葉を素直に受け入れ行動に移した事だ。よくクリニックを訪れる人達の約半分は、医者のアドバイスを聞かず、自分勝手に解釈し、自分に都合の良い事や、したい事だけを聞くものが多い。特にインテリジェンス層の人間はプライド

や見栄などが邪魔をして余計にその傾向が強い。ミス　ミッドフォードは最初は渋々ながら、私のアドバイスや話をよく聞き、それを着実に行動に移して行った。

半年間のクリニック通いが終わる頃には、彼女は見違えるようになっていた。今までに見られた心身の不安定さはなりを潜め、代わりによく笑い、人を思いやる事のできる性質へと変わっていったのだ。彼女に必要だったのは、鬱病の薬などではなく、無条件の愛情とその確信。それに共なう安らぎ、安心感。そしてそれらを得るためには、彼女自身が自分の中にある空虚に気付いて、そこから一歩を踏み出す事些細な事でも周りにある事に感謝し、彼女自身が変わっていったからこそ、今ある状況にたどり付けたのだ。

私はファイルから目を離し、しばしの間目をつぶっていた。アダルトチルドレンと一口にいっても、それは人によってもちろん似ている症状は多くあれども簡単に克服出来る問題ではない。一番厄介なのは、クライアント自身が気付かなければならないのだが、それが一番難しい。例え、そうだと認めたところで、自分のせいではないと責任転嫁したり、現実から目を背けようとすれば、根本的な解決にはならない。私自身、多くの症例を見てきたが、自分の中にある弱さや屈折した感情をまず理解し、前向きに治そうとする姿勢がなければ難しい・・彼女、内田咲子はどうだろうか・・？

縛る女１１

もちろん彼女を病気だと決めつけるのは早計だ。彼女のような女性は少なからず沢山いる。病名を付けるにも、もちろん総合的な判断が必要である。だが私はこういう仕事をしていてどうかとも思うのだが、訪れるクライアントに簡単に病名を伝える事はできるだけ避けている。総合的な要素を含めて判断してから後、それを伝える。

なぜそうするのか・・という理由は幾つかあるのだが、精神病という名の下に自分に陶酔するものや、ちゃんと向き合えば解決できる事柄を薬で逃げるのを防ぐため、自分の事を精神病だといって病院にやってくる人の中で本当にそうなのか、それとも甘えや他のものからきているのかを診断するためにはかなりの経験が必要だ。もちろん出来るだけ誤診は避けたいし、こういった心の問題は特にデリケートな配慮が必要になってくる。

夕暮れの日差しがブラインドを隔てた隙間から入り込み、部屋を照らし出していた。

「今日はそろそろ帰るか・・・。」私は立ち上がって背伸びをした。僕のクリニック兼事務所は5時に閉める事にしている。もちろん、何か緊急があれば、事務所の電話から私の携帯にかかってくるようになっているのだが、こういう仕事をしていると、実際のところ電話での相談は２４時間昼夜を問わずかかってくる。

アメリカにいた頃も、クリニックは5時に閉まり、同僚の医者たちは日課の申し送りが終わるといそいそと家に帰っていった。余計なお世話だと何度か思ったが、よく同僚達に言われたものだ。「なんだ、トシ、まだ独身なのか？誰かステディな子はいないのかい？僕たちはこういう仕事をしているからこそ、家族との交わりが大切な

んだよ。」
実際彼らは確かに忙しい中にあっても家族を大切にしているようだった。家族が集まるサンクスギビングデーやクリスマスなどの休日には、必ず私にも声をかけてくれた。ターキー（七面鳥）の焼ける匂いにクランベリーソース・・今となっては懐かしい思い出だ。

ふいにカツン　カツンと音がした。三村君のヒールの音だ。彼女の歩き方には独特の癖があり、ヒールを履いていると特によく響くのだ。サンダルを履いていたらきっとぺたぺたと音がなるに違いないと一人ほくそ笑む。
「何を笑ってるんですか？センセ。向こうの応接室は掃除してきました。こちらもさっさと片付けてしまうので、そこどいて下さい。あ！またコンピューターの上でポテチ食べましたね？！あれだけカスをばらまくから止めてくれって言ってるのに・・・」
確かに私の専用のM@Cのキーボードには先ほどまでファイルを見ながら食べていたお菓子のかすが散らばっていた。

ああ・・・また三村君にしかられてしまった。1週間の内で三村君にしかられる回数は結構多い。また目くじらを立てて掃除を始める彼女を見て私は小さく息を吐いた。
「いいよ、三村君、私が片付けておくから、君はもう帰りたまえ。」
「何いってんですか。センセに掃除を任せたらまた明日私の仕事が増えるだけです。すぐに終わりますから大人しく其処で座っておいてください。」
「ハイ・・。」やはり触らぬ神にたたり無しだ。私のデスクの周りを綺麗に拭き取り、掃除を終えた彼女が清々しい顔で帰ってきた。
「じゃ、センセ、また明日。そうそう、寄り道しないでちゃんと帰るんですよ？！」
どうも母親か学校の先生を思い出してしまう。三村君はカツカツと

ヒールの音を高らかに鳴らしながら出て行った。私も帰るとするか。ブラインドを閉め、電気を消し、事務所に鍵をかけると、私は外へでる。三村君・・・は待ってるはずはないか。肩を軽くすくめて私は駅に向かって歩き出した。

縛る女１２

それから3日後の深夜１２時頃、枕もとに置いてある携帯がなった。幾度目かのリング音で私は起き出し、携帯を取った。事務所から送られてくる緊急用のコールだった。
誰からだろう？　「もしもし・・？」
「ーーー。」何も返答がない。悪戯電話だろうか？「もしもし？渡部ですが、どなたですか？」私はもう一度携帯に向かって問いかける。
「ーーーあ、あの、、本橋です。」
「本橋さん？いったいどうなさったんですか・・・？」
「あ、あの、それが、先ほど咲子から何度も電話があって、僕、先生に言われた通り、電話を取らないようにしてたんです。メールも何通も入ってきて・・・・それでもできるだけ返信しないようにって・・そしたら、咲子のメールにもし今直ぐ来れないんなら死んでやるって書いてきて。僕、どうしていいか分からなくて・・・先生、僕どうすれば良いんですか？！」

私は目をこすると、時計の針を確認する。１２時２０分を少し回ったところだった。「おちついて下さい、本橋さん、今どこにいますか？」
「咲子のアパートに行こうと思って、今車を出したところです。」
確か内田さんのお宅は僕が住んでいる場所より、三駅向こうだったはず・・私は初回、彼女が来た時に書いてもらった住所を思い出す。
「本橋さん、行き道に私を拾って行って下さい。住所は・・・。」
手早く住所を伝えると、携帯を切って、ベット脇のランプを付ける。
顔を洗い、服を切ると、鍵を閉めて外へでた。初夏とは言え、まだ深夜は肌寒い。暫く待ってると、本橋の車がやってきた。私は素早

く助手席に乗り込むと、彼は車を発車させた。
「すみません、先生・・・こんな遅くに・・・。」
「気にしないで下さい。それよりも、内田さんからのこういった電話やメールは初めてですか？」私はシートベルトを閉めながら本橋に尋ねる。

「いえ・・実は今までも何度か・・・。」
「そのお話は、先週お聞きしていませんでしたね。」私は確認する。
「は、はい・・・。最近はあまりなかったですから・・・。」
「・・・理由はご存知ですか？彼女のアパートにつくまでの間、今まであった事を話して下さい。」

本橋は車の運転をしながら話だした。「大概は、狂言なんです・・・。なにか会社で嫌な事があったり、精神的に落ち込んでたりすると、今までにも何回か自殺するって騒ぎ立てた事があって、でもそうすると僕が大体すぐに駆けつけて、色々と話を聞いてやったりすると落ち着いてましたが、実際に1回だけ手首を切って救急車で運ばれた事もあるから・・・今回ももしそうだったらと思って。」

「つまり、精神的にストレスを受けた時にこういう事があるということですね。他に何か原因を知ってますか？」

「いえ、、新しい男性と付き合いだしてからの事はあまり僕も知らないんです。たまに会ってくれてもいつも比較ばかりされてましたし・・・。あ、でも昔、よく理由は知らないんですけど、咲子が一人暮らしを始めた頃、両親と大喧嘩して、その時も親の前で死んでやるってロープ持ち出して、必死で止めた事がありました。」

「そうですか・・・。」私は腕を組んだまましばらく無言で考える。その間も車はスムーズに走っていた。

「もうそろそろつきます。」本橋の声でハッと顔を上げる。
「あそこに見えるアパートです。」
言われた方向に目を向けると『ブルーハイツ　中野』と書かれた看板が見えた。車を路肩に駐車させると私は本橋の後をついて階段を駆け上がる。「3階の右端の部屋です！」そういって本橋は一足早く部屋にたどりつくとドアを激しくノックした。

万が一・・・ということもある。この際近所迷惑は考えてられない。
「開いてる！」そういって本橋はドアを開けた。

縛る女１３

「咲子！」「内田さん！」二人同時に声を上げて室内に入った。最初に目に飛び込んで来たのは雑多とした部屋の中に横たわる彼女の姿・・と部屋に充満する酒の匂いだった。

「咲子、咲子？」本橋さんが内田さんを揺さぶる。

「ちょっと待って下さい。」私は本橋さんを押しとどめ、彼女の腕をとって脈拍を確認し目蓋を押し広げたりしながら体の異常をチェックする。

「・・大丈夫です。お酒の飲み過ぎで爆睡しているだけですね。この分じゃ明日の朝まで目覚めませんよ。とりあえず、換気に窓を開けて下さい。ひどい匂いだ。」本橋は頷くとそのまま彼女を横たえたまま窓を開けに行く。

実際部屋の中はひどい状態だった。１ＬＤＫの部屋をぐるっと見回す。およそ淑女の部屋とは思えない有様である。台所には買ってきた総菜などが食べ散らかしたまま置いてあり、床にはかなりの数のビール瓶やワインボトルが転がっている。

部屋にはよくわからないが、ブランド品らしきバックや洋服が積み上げられてある。収納べたなのか、ただ単にずぼらなのかは判断がつかない。私は、ベットから薄手の毛布を引き出すと彼女の体の上にかけてやった。何と言っても夜はまだ肌寒い。風邪を引いたら大変だ。

本橋が戻ってくると、ペタリと床に座り込んだ。「良かった・・・咲子・・。」

「あなたに電話やメールをしていた時から飲んでたんでしょうね、この量を見ると・・下手したら急性アルコール中毒ですよ。でもま

あ、無事で良かったです。」時計を見るとそろそろ午前2時前だ。安心したら急にあくびがでてきた。

「すみません、先生。こんな事にまで巻き込んでしまって・・・。」本橋が申し訳なさそうに頭を下げた。

「気にしないでくださいと言ったでしょう。自慢にはなりませんが、こういう状況には慣れているので大丈夫ですよ。それよりも、あなたの方は大丈夫ですか？」本橋の顔には疲労の色が伺える。改めてまじまじと見ると睡眠が足りていないのか目の下にも真っ黒なクマを作っている。

「ぼ・・僕は大丈夫です。心配をおかけしてすみません。」

それにしても・・と私はもう一度部屋の中を見回す。「なんというか、ひどい有様ですね。いつもこんな感じなんですか？」

「咲子は掃除が苦手なんです。最初僕たちが付き合い始めた頃に来た時はそれでも綺麗にしてましたけどね・・。」

小さなテレビが置いてある棚の上には写真立てが一つおいてあった。本橋ではない別の男と腕を組んで寄り添っている写真だ。これが彼女が言っていた藤堂という男だろうか。短く刈りそろえた髪に日焼けした人の良さそうな好青年に見える。体つきも良さそうだ。藤堂という人は彼女のこういった一面を知っているのだろうか・・？こういった女性達は人目を気にするタイプも多く、外面は普通以上に取り繕っているものも多い。

よっぽどでなければ、この部屋に一歩踏み入れただけで、引いてしまうだろう。まあ、人が尋ねてくる時にはちゃんとしているのかも知れないが・・・。

テーブルの上にはアロマセラピーの蝋燭や小物といった女性らしいものも沢山置かれている。だが本橋の前で、彼女は自分を取り繕っ

ているようには見えない。他の男と結婚するつもりなのに、本橋の事は自分をぶつけられる相手として確保しときたいのか・・・。最初に彼女にあって話をした時に、警察に通報しては？と進めた時の彼女の微妙な反応の意味が分かった。届けられるはずがない・・・実際に彼を縛り付けているのは内田咲子の方だ。

彼女とはじっくりと話をしてみる必要がありそうだ。本橋さん以上に・・・。

「先生、送っていきます。」手早く散らかった酒瓶などを片付けて本橋が言った。窓を閉め、玄関までくると、鍵はどうするのか・・と思ったが合鍵のある場所を知っていると彼が鍵を取り出し、戸締まりしてまた鍵を元の場所に戻した。

益々不可解な状況だ。普通ならば、ストーカー被害を受けているという女性が、合鍵の場所も変えずにおいておくはずがない。彼女の言動と行動にはあまりにも不一致な点が多すぎる。

が、もしこれが本当にある種の”病気”の場合、いくら常人が理の叶った事を説明しようが、相手には一向に話が通じない事も珍しくない。自分を常人だと思い込んでいる人間にその『異常性』を認識させるのはそれこそ神業だ。まあ、だからこそ病気なのだろうが・・・。

結局自分のアパートについたのは午前3時頃、私はもう一度つかの間の睡眠を取るためベットに潜り込んだ。

縛る女１４

朝、私はいつも通り7時に目覚めると大きなあくびをしながらキッチンへ行って、コーヒーメーカーのスイッチを押す。朝食はなくとも朝一杯のコーヒーは欠かせない。
眠い目をこすりつつ、洗面所へ向かい、軽くシャワーを浴びた。テーブルに座って朝刊を広げ、コーヒーを一口飲む。香ばしい匂いが鼻孔をくすぐる。

一通りニュース欄に目を通すと昨日・・（厳密には今日だが）の出来事に思いを巡らす。
さて・・どうしたものかな。もともとの依頼は内田咲子からのもので、内容は、付きまとう元彼をどうにかしてもらいたいと言う事だった。最初は自分の専門からは多少ずれていると思い、断ろうかとも思ったのだが、実際に彼女に会って話をしている内、職業上の感とでもいうのだろうか、どうもひっかかりを覚えて仕方がなかったのだが、やはり的中してしまった。
彼女の依頼自体を遂行するならば、本橋とあって幾度かカウンセリングを施していけば、まだ完全に共依存に陥っていない彼ならもう一度ちゃんとした元の生活に戻れるはずだ。そういう意味であれば、依頼自体はそう遠くなく解決するだろう。

しかし問題は彼女・・・依頼主の話は１００％信用しない、もといできないこともあるといった経験上の事であるが、何かしら問題が発生している場合、一方だけの主張、言い訳を聞くのではなく、相手側にも事情聴取をする事が多い。人間関係の問題はそれが誤解にしろ、必ずどちらにも何かしら問題があるものだ。
色々なピースを集めて行くと思わぬ現実に到達することは珍しい事

ではない。このまま、上手く本橋さんが綺麗さっぱり彼女から手を引けば、彼女はどうするだろうか？暫くは大丈夫かもしれない。うまく新しい男を手玉にとってやっていくだろう。何か問題が起らない限りには・・。
私は洋服を着替えて、もう一度歯を磨くとアパートを出て駅に向かった。駅までは、徒歩7分ほど、そこから電車で、３０分、事務所はそこからさらに歩いて１０分だ。
アメリカにいた頃は車での通勤だった。自然運動量が減るので、その頃借りていたアパートの筋トレルームで毎日朝晩４５分の運動をこなしていた。

改札口をでると前方に見知った姿をみとめる。三村君だった。私は早足で彼女の側まで追いつくと彼女に声をかけた。「三村君！」
ゆっくりと振り返った彼女は上下グレーのスーツに身を包み、後ろで髪をひとまとめに括っている。地味で隙のない装いだがそれでも何故か彼女にはしっくりきている。
「おはようございます。センセ。」少し立ち止まって軽く会釈をすると、またすたすたと歩き出した。相変わらずカツン、カツンとヒールの音を響かせて歩いている。私も彼女の歩幅に合わせて一緒に歩き出す。
私は歩きながら今朝方の事を彼女に簡単に説明した。
「そうでしたか・・。それでセンセはどうなさるおつもりなんですか？」三村君が聞いてくる。
「本橋さんの方は、ちゃんと依頼通り、このままカウンセリングを続けていこうと思ってるよ。彼は本当のところ被害者だからね・・。今の内にちゃんとしておいてあげないと可哀想だ。だが、問題はクライアントだな。これからどう出てくるか・・・それによって対応を考えるよ。」
「そうですね。今のところ、それがベストだと私も思います。」事

務所へつくと鍵を開け中に入る。毎朝、私と三村君はその日やるべき事や、新規クライアント、そして現在関わっているクライアントについてなど必要な事を話し合う。
「じゃあ、今日直接会うのは、この４名だね。他に何か変わった事は？」
「今のところ、特にありません。こちらの新規クライアントのファイルに目を通しておいてください。」三村君が、何冊かのファイルを私に手渡した。事前に電話でクライアントと話した内容と彼女が簡単にバックグラウンド調査をした事柄などがファイリングされている。
「分かった、じゃあ、しばらく一人にしてくれ。」そういうと私は奥へ続くドアへと歩いて行った。

縛る女１５

その日は時間が経つのがやけに早かった。午前中に二人のクライアントと会い、軽く昼食を済ませた後、急に眠気が襲ってきた。多少仮眠を取ると頭が冴えるかもしれない。私は隣の部屋へドア越しに顔を出すと三村君に３０分程仮眠を取る胸を伝えた。
彼女が頷く。「では、３０分後に起こしますね。その頃にコーヒーを入れておきますから・・。」
ありがたい。三村くんのコーヒーはかなり苦いが抜群に目が覚める。普段ならミルクを入れないと後で胃が痛くなってしまうのだが・・・。応接室のソファーに足を伸ばして横になるとすぐに深い眠りについた。

「・・・センセ、起きて下さい。センセ・・・」
「ん・・・」
「センセ、またお客さんが来てます。大丈夫ですか？起きて下さい。」
「ふわぁ・・客・・って誰？」あくびを噛み殺しつつ身を起こす。
「内田咲子さんです。昨晩のお詫びにと菓子詰めを持っていらしてますが・・」
三村君の言葉に一気に目が覚める。「内田さんが？」私は手早く衣服の乱れをなおすとテーブルの上に置いてある眼鏡をかけた。普段はコンタクトの方が多いのだが、今日は朝から目が疲れていたので眼鏡にしたのだ。

用意が整うと、内田咲子が部屋に入ってきた。彼女は三村君に促されて、ソファーに腰掛けた。下を向いているので表情はよくわからない。
内田がおずおずと口を開いた。「あの・・・昨晩は・・みっともな

いところをお見せしてしまって・・・申し訳ありませんでした。これ、つまらないものですが、受け取って下さい。」と彼女は私に某有名菓子店の袋を差し出した。私が昨晩一緒に彼女のアパートに赴いた事を本橋さんから聞いたのだろう。ばつの悪そうな表情だ。私は彼女を警戒させないように出来るだけ穏やかに言った。「いえ、気になさらないで下さい。それよりも体の方は大丈夫ですか？昨晩、かなり飲まれていた様ですが・・。」

うつむき加減の彼女の顔がパッと赤くなる。「いえ、本当にもう・・大丈夫ですから。」酒は強い方なのだろう、しかしあれだけ飲んだらいくら強くても悪酔いしそうだ。

「何か・・あったんですか？私で宜しければご相談に乗りますよ？」彼女は驚いたように顔を上げた、が、尚気まずそうに、目をしばたかせている。私に何と答えて良いか考えているのだろう。

「先生・・私が嘘をついてた事、もう知っていらっしゃるんでしょう・・？」軽く私を睨むように内田がゆっくりと口を開いた。

「嘘・・・とおっしゃいますと、、どの部分の事を言ってらっしゃるんですか？」

内田咲子はぐっと言葉に詰まる。「・・・。先生にはきっと私の事なんて分かりはしないんでしょうね。」分かる、分からないといった問題でもないが私はあえて何も言わず目線だけで続きを促す。

「だから、、私と亮太の事です。ーーーまさか昨晩、先生が一緒に来られていたなんて思いもしませんでした・・。」

そうでしょうね・・と私は軽く相づちを打つ。「それで内田さん、もう一度依頼の件を確認したいのですが、あなたは本当に本橋さんとすっきりお別れになられたい・・んですよね？」

「・・それはそうですけど・・。でもやっぱり、亮太は私の事を必

要だと言ってくれてるし・・」私は彼女の言葉を遮って聞いた。
「ちょっと待って下さい、内田さん、あなた藤堂さんという男性と結婚を前提にお付き合いされているんですよね？　それなのに、本橋さんもきっぱり捨てられない・・と言うなら立派な二股ですよ。よしんば結婚していたら不倫です。」

「そ、そんなことは言ってないじゃないですか？！私は別に二股なんて・・・」
「かけてないと・・？あなたは最初にここに来られた時におっしゃいましたよね。別れた男性からストーカー被害を受けている、怖い、気持ち悪いと・・。でも実際に本橋さんを縛り付けているのはあなたですよね・・？」

「な、なによ！私が悪いっていうの？！」彼女はヒステリックに叫んだ。
悪いもなにも、彼女が元凶だと思うのだが、そういっては余計に火に油を注ぐだけだ。こういうタイプは是が非でも自分を正当化しようとする。様子をみて落ち着かせてゆっくりと話して行くのがベストだ。
「落ち着いて下さい、内田さん。ただ、私は本当の事が知りたいのです。もう一度、ちゃんとお聞かせ願いますか？あなたの事を。」

「私の事ってどういう意味ですか？何を話せと？」
「そのままの意味です。まずはあなたの事を聞かせて下さい。なんでもいいですよ。好きな食べ物とか、例えば、そのお持ちになっているバックはどこかのブランド品ですよね？それが好きなんですか？」

「エ・・？これ？これは・・・エルメスの。」彼女は戸惑うように答える。

「はあ、それエルメスって言うんですか？そういうのお好きなんですね？昨晩ちらっとお宅を拝見させてもらったときにそういった類いのものがいっぱいあったので、好きなのかと思いまして。女性は皆そういった装飾具が好きなんでしょうね～。ご自分でお買いになったんですか？」

縛る女１６

「これは・・・貰い物です。」内田が答える。
「ほう、そうなんですか。うらやましいですね、そんな高価そうな物を頂けるなんて。さしずめ送り主はお付き合いなさっている藤堂さんですか？」
「別にいいでしょう？誰だって・・・変な詮索しないで下さい。」
「いえいえ、詮索だなんて、純粋な好奇心ですよ。こういう仕事についているぐらいですから、色んな事に興味があるんです。」私は努めて明るく笑う。

「内田さんは、たしかご兄弟が一人いらっしゃいましたよね。お兄さんとは仲は宜しいんですか？」資料によると、内田咲子には２才歳の離れた兄が一人いて、現在も両親と同居をしている。実家からの方が内田の努めている会社に近いぐらいだが、彼女一人アパートを借りて住んでいる。

「別に・・普通よ。」普通とはいったいどういう事を言うのだろう・・・？
「そうですか。内田さん一人だけアパートを借りて住まわれているんですよね。やはり御結婚されたら、今のアパートは引き払うおつもりなんですか？」
「ええ・・彼が都内に新しくマンションを購入したから来月そちらに移る予定なの。」
「では、お仕事も辞めてしまわれるんですか？」
「彼は仕事なんてしなくったって、私が家にいてくれるだけで良いって言ってるの。私も別に続けたい仕事でも何でもないし、ストレスが減って清々するぐらいよ。」

「もったい無いですね。せっかくキャリアを積んで来られたのに・・・。」
内田咲子は先ほどとは打って変わって馬鹿にしたように私を見て言った。「ご存知ないんですか？最近では、共働きしないとやって行けない家庭の方が多いぐらいですよ。藤堂さんは、若くしてベンチャー企業で成功した人です。別に私が働こうが働かまいが関係ありません。今の時代の女性達にとって「働かない」事はステータスなんですよ。」

なるほど、つまり言い換えれば、それはお金が全てだと言っているような物だ。昨日写真で見た人の良さそうな男の顔が脳裏に浮かぶ。なんだか可哀想になってきた・・。
「そうですか、それは羨ましいお話ですね。」と取り合えず話をあわせておく。すると彼女は益々勝ち誇った顔つきで話はじめた。
「ふふ、私が彼を両親と兄に紹介した時の顔、見せて上げたかったわ。いつもいつも、私と兄を比べてきた馬鹿な両親達の顔。都内の高級料亭を借り切って結納したのよ。兄さんなんて藤堂さんを前にへいこらして可笑しかったわ。そりゃそうよね、藤堂さんは兄さんなんかよりよっぽど学歴も収入もあるんだから。」
彼女の口ぶりから、彼女が持っている家族へのコンプレックスが見え隠れする。藤堂という男はよっぽど彼女のコンプレックスを補って余る程のものを持ち合わせているのだろう。確かにそんな彼を彼女が逃すはずはない。まさにカモだ。

「・・それでは尚の事、本橋さんとは、きちんとお別れになった方が宜しいんじゃないですか？昨晩の様な事は双方にとってメリットも何もあった物ではないですしね。」私はさらっと最初の話題を切り出した。

「昨日の事は・・・たまたまよ。ちょっと飲み過ぎて・・・。」

飲み過ぎて、藤堂ではなく、本橋を呼びつけるところが流石というか、何と言うか・・・。片方の男には自分の弱さをさらけ出して縛り付け、もう片方には良い面だけを見せている。

「以前、リストカットされた事があるそうですね・・・本橋さんからお聞きしました。それで昨晩も、本橋さん、血相変えてあなたのところへ向かわれましたよ。」

彼女はびくっと肩を震わすと、片手でもう一方の手首を隠すように握りしめた。

縛る女17

リストカット・・と言う言葉は現代社会の中でよく聞かれる言葉になりつつある。その症例は軽いものから酷いものまで、もちろん理由も様々だ。だが、どちらにしろ自分を傷付ける行為は自分だけでなく周りをも巻き込みながら大きく暗転して行く。昨日彼女が酔って寝ている時に脈拍を確認した際、幾つかの小さな傷と大きめの傷が出来ているのを見た。小さな傷はナイフで傷をつけたというよりも自分の爪痕に近い。随分と完治してきているようだったが、同じところを何度も傷つけたのだろう、何カ所かは深くえぐれていた。

「見た・・・んですか・・」息が荒くなり内田さんの目の焦点があわなくなっている。これ以上プレッシャーを与えるのは良くない。私はそっと彼女の頬に手を添えるとゆっくりと深呼吸するように促す。彼女の額には冷や汗が浮き出ていた。

「すみません・・こんなプレッシャーを与えるつもりはなかったのですが・・。」そういって私は三村君に持ってきてもらった一杯の水を彼女に差し出した。彼女はそれを一口飲むとコップを握りしめたまま呟いた。「最初は・・こんなはずじゃなかった・・・」

「え？」

「私が何をしても両親たちは私の事を見てくれなかった・・・いつも兄の事ばかり。私がいくら勉強を頑張ろうと、賞を貰おうと、あの人達の関心は私には向けられなかった・・・。何かというと兄ばかりを優先し、兄の言う事ならなんでも聞くのに私の事は・・っ・・・だから最初に傷をつけてみたわ。そうしたらちょっとは私の事を見てくれるかもしれない。でも、、みっともない真似をするな

と怒られた。

あの家に私の居場所なんて最初からなかったのよ。じゃあ、出て行けばいい。私は大学を出て直ぐにアパートを借りた。今度は何の当てつけだって怒鳴られたわ。兄のする事なら何でも賛成するのにね・・。亮介とであったのもそんな頃だった。私が欲しかったもの、全て与えてくれたわ。最初は幸せだった・・でも、満足出来ない・・・・。あいつじゃダメだった。亮介では、あの両親に・・・・っ」

内田咲子の両目からは涙がとどめなく溢れていた。私は彼女が握りしめていたコップをテーブルの上に置き、替わりにハンカチをそっと彼女の手に握らせる。彼女に最初に感じた違和感とファイルの人物が重なった・・・やはりこの子も得られない愛情、埋められない心をを求めてもがいていたのだ。こういう症状をもつ者の大きな特徴のひとつとして家庭の不和、家庭で何か問題が生じている事があげられる。もちろん全てとは言い切れないが、子供時代に負った傷は大人になってからも尚引きずる事が多く、生活習慣や様々な面に影響を及ぼして行く。またその様な子供は、自分が親になってからも、同様に負の連鎖を繰り返して行く事態へと繋がって行く。

こういった負の連鎖を断ち切らない限りは彼女自身もずっと苦しんで行く事になるのだ。私はもう一度改めて、クライアントと向き合いながらカウンセリングをはじめた。

ー彼女は何をしても家族に認められない自分、そして両親から愛される兄にコンプレックスを抱いている。最初は本橋亮介と付き合う事によって、自分が得られなかった愛情を過剰に得ようとしたが、それは只の身代わりであって、彼女の持つ痛みへの根本的な解決にはなっていない。自分自身を傷つけたその日、彼女は初めて家族からの関心を得た。だが、傷が治って帰ってきた彼女にかけられた言

葉は只一つ、家名を傷つけるな、兄の足手まといになる様な事をするなとの一言だった。

それを機に、尚本橋への異常とも言える束縛が強まる。もっと自分を見て欲しい、自分だけを愛して欲しい。本橋との負の共存を断ち切れず、だがもっと自分を満足させる事のできる新たな相手へとターゲットを定めた。それが藤堂だ。彼は彼女がもつコンプレックスを一時的に払拭させるだけのものを持っていた。

彼女の自尊心を満足させるだけのお金と経歴。そして彼女は虐げられていた家族への対抗心とともにそれを全面に打ち出した。もっと自分を見て欲しい、認めて欲しい。自分の兄よりも高学歴で収入のある男を連れて行けば家族は今度こそ自分を認めてくれるのではないか・・と。

だが、それも結局無駄だった。彼女が酒を浴びる程飲み、意識をなくしたその日、内田咲子はそれを悟ったのだ。

縛る女１８

本橋さんと、内田さんのカウンセリングを別々に初めて１週間が経った。
私は内田咲子の実家を訪れた。彼女がこういった状況になった原因は少なからず家庭にある。一度両親にも話を聞いてみなければならない。事前に彼女の母親には来訪する旨伝えてもらって、私は彼女が生まれ育った町へと訪れた。都内出身の彼女の実家はそう遠くはない。
初めて降りた駅で地図を片手に歩いて行く。強い日差しの中、新緑がきらきらと輝いて美しい。内田咲子の実家は閑静な住宅地の中にあった。ゆるやかな坂を上りきると、一軒の家へたどり着いた。なかなか立派な門構えだ。大理石に『内田』と掘られた表札がかかっている。こじんまりしているがよく手入れの行き届いた庭を観察しながら私はインターフォンを押した。
「・・・どちら様でしょうか？」
「〇〇クリニックの渡部と申します。内田咲子さんからお聞きしていると存じますが・・」
「少々お待ち下さい。今参ります。」暫くすると玄関から薄手のカーディガンを羽織った線の細みの女性が出てきて、門を開いた。５０歳半ば・・いや６０歳手前と言ったとこか。彼女が内田さんの母親だろうか。目元が少し彼女に似ている様な気がする。
彼女の後をついて、玄関に上がると、スリッパを出してくれる。こちらへどうぞ・・と応接間へ通された。内田さんから私の事をどのように聞いているのだろうかと考える。
「お紅茶で宜しいかしら？」と女性が聞いてきた。
「あ、いえ、おかまいなく・・。あの、内田咲子さんのお母様ですよね？」と私は尋ねた。

やや間を置いて彼女が答えた。「ええ、そうです。内田美津子と申します。」そういって彼女少し頭を下げると応接間を出ていった。戻ってくるまでの間、私は応接間を見渡す。綺麗に整理整頓してある棚の上には幾つものトロフィーに賞状、また写真が飾られてある。成人式の時の物だろうか、内田咲子が映っている写真が一枚と、他は全て兄らしき男性の物だ。一枚だけ家族４人で映っている写真があった。口元をきりっと引き締めた彼女の父親らしき男性と着物を着た内田美津子、そして二人の子供。外国でよく見かける家族写真とは違い、何か重苦しい雰囲気を醸し出している。特に無表情な内田咲子の目が印象的だった。

すでに用意してあったのであろう、紅茶とケーキを持ってくるとカチャリと私の前に置いた。

「すいません、本当にお気使いなく・・。」そういって私は革張りのカウチに腰を据えた内田美津子に目線をあわせた。

だが、彼女の方は私から目線を反らせたまま、おずおずと切り出した。「咲子から・・カウンセリングを受けていると聞きましたが、、どういった経緯であの子はクリニックに通う事になったのでしょうか・・。」

「お母様には、心当たりはありませんか・・？」努めて穏やかに私は問う。

「・・・以前に一度手首を切って自殺未遂を起こした事がありましたけど・・あの子は昔からよく分からない子供だったんです。本当に難しい子で何が気に入らないのか・・いつも反抗的な態度で、私も主人も手を焼いてましたのよ。」

「ほう、そうなんですか？それはいつ頃から？」

「さあ・・どうだったかしら、、そう言えばあまり記憶にないわね。でも高校生になる頃には既に扱いづらくなっていたと思いますわ。いつもお兄ちゃんに難癖つけて・・・」

「そういえば、お兄さんがいらっしゃるそうですね。どんな息子さんなんですか？」
途端に彼女は見るからに機嫌良く話し始める。「ええもう、本当に良い子なんですのよ。今年３２歳になるんですけど、一流証券会社に努めてまして、将来も有望だって皆様からいつも褒めて頂いてますの、それに・・・。」長くなりそうな、彼女の話をうまく切り替えて、重ねて問う。
「咲子さんも、ご立派な会社に勤めていらっしゃいますよね。キャリアを積んで来られたみたいですし・・結婚なさったらお辞めになるそうですが・・。」

「ああ、咲子もお兄ちゃんに張り合うみたいに女だてら家をでて仕事していたみたいだけど、結局結婚して辞めるなら最初からやらなければ良かったのよ。」
「いえ・・ご立派だと思いますが・・。」
「そうですか？先生はお若いからご存知ではないかとは思いますが、私どもの若い時分には女は家の肥やしと言われてまいりました・・。娘は嫁にでていってしまえば他家の物ですから。」

「・・・それは娘さんを粗末に扱って良いという理由にはなりませんよ？」
内田美津子はキッと私を睨みつけた。
「失礼な事を仰らないで下さい。私たちがあの子にどれだけお金をかけたと思うんですか？幼い頃より、しつけはもちろん、様々な習い事だってさせてましたし、あの子が良い結婚相手に巡り会えたのも、私たちの努力があってこそですのよ？」

「お金さえ与えておけば、他はどうでも良い・・とそう仰っているのですか？幾らお金を与えて教育を受けさせようと、そこに愛情がなければ意味がありません。子供はあなたの所有物ではないんです

よ?ちゃんと意思をもってるんです。なるほど、あなたの話をお聞きする限り、彼女がこの家でどんな思いをされてきたのかが分かりますね。」

日本の旧家や田舎には多いのだが、いわゆる男尊女卑、自分達ではそう思っていないところがまたタチが悪いのだが、必要以上に息子を溺愛し女子を卑下する風習はこの現代社会においてまだまだ根深く息づいている。跡継ぎを生まないといけないとプレッシャーを感じる女性や息子を溺愛するあまり、マザコンを作り出す女性も多い。

縛る女１９

私はなおも続けて彼女に問う。「あなたは一度でも彼女の立場に立って考えた事がありますか？咲子さんの事を難しい、扱いにくい子供だったとおっしゃいましたね？同じ腹から生まれても子供は一人一人違うんです。それを少し自分の意に添わない子だったから扱いにくいと言うならば、それはあなたの傲慢です。それに、それは本当に反抗だったのですか？彼女はあなた方にもっと自分自身を見てもらいたいと足掻いていたのではなかったのでしょうか・・。犬や猫でも主人からの愛情を得られなければ信頼関係は崩壊し、弱って行きます。家族なら尚の事もっとお互いに歩みよるべきではないのですか？」

内田美津子はぐっと言葉に詰まる。「・・・私どもの育て方が悪かったと仰りたいのですか？」

「はっきりと言わせてもらえば、育て方、というよりも偏った愛情が今の彼女を作り出したと言う事です。細かく言えば、もっと色々とありますが・・一つ、お聞きしたい、あなたはご自分の娘さんの事を本当に愛していらっしゃるんですか？」

内田美津子はじっと下を見つめたまま何も答えなかった。彼女なりに何か考えているのかもしれないが、自分の生んだ娘を愛していると即答出来ない母親の姿に私は多少なりとも失望を覚えた。もし、息子の事を聞いたのなら彼女はどう答えただろうか？

しばらくの後、重い沈黙を破って彼女が口を開いた。「私は・・・あの娘の事を疎ましいと思った事はありません。それが答えにはなりませんか・・・？私は私なりにあの子の為を思ってやってきたのです。」

今の言葉を内田咲子が聞いたら何と思うだろうか。だが内田美津子の言葉に嘘は感じられなかった。しかしだからといってこのままでは、何も変わらない。両親にも、まずは意識改革をしてもらわなければならない。最初は幾つかの課題を与えて、夫婦でよく話し合ってもらおう。まずはそれからだ。幾つかの事を頭に浮かべる。一度崩れた関係を修復するには時間がかかる。もう一度お互いにお互いを受け入れる準備をしなければならない。

私はもう一度彼女に念を押した。言葉を飾らず言いたい事をはっきりと伝える。

「いいですか、内田さん。死んでから、後悔するのであれば意味がないです。あなたの娘さんの精神は随分とぼろぼろになっています。今までに起こした自殺未遂が、未遂ですんだ事を喜ぶべきですね。もし本当に彼女が死んでいたら、殺したのはあなた方の様なものです。

もちろん、あなたが仰る様な厳しさやしつけも子供にとって必要不可欠なものです。それがなければ、とんだ大馬鹿ものになるでしょうからね。しかし、それも愛情があってこそのものです。

もっと彼女を知ろうとして下さい。彼女が何を考え、本当は心から何を求めていたのかを。

まずは、ご主人ともしっかり話し合って下さい。家の格式や、外聞、恥など人の命に比べたら何になりますか？あの状態の娘をほっておく事のできるあなた方のほうがよっぽど恥ですよ。」

内田美津子は急におろおろと自信をなくしたように私に問いかける。

「あの、、、娘は、、咲子はそんなに酷い状態なのですか？」

実際はカウンセリングを初めて少し落ち着いて来たが、まだ根本の

解決には至っていないので幾らでも繰り返す恐れがある。私はその事を彼女に伝え、とりあえず、まずは夫婦で話し合うようにと繰り返した。父親のほうの価値観も、内田美津子を見ていると大体把握できる。だが、彼もまた、娘を愛しているのだと思いたい。

時計の時間を見ると、私は冷めた紅茶を一気に飲み干し、内田美津子に礼を言う。私は彼らが恐れずにこの問題に取りかかってくれる事を望みつつ、家を後にした。

残された内田美津子はふらりとリビングの応接室に戻ってくると、手つかずのままのケーキにフォークを突き刺した。何度も何度も・・・。そうしてぼろぼろになったケーキを眺めて声にならない嗚咽を漏らした。

そして3日後、内田夫婦は私の事務所を訪れた。

縛る女２０

「どうぞ」と三村君が湯のみに入った日本茶と近くの商店で購入したであろう茶菓子を二人の前に置いた。今日は苦いコーヒーではないようだ。「どうも・・」と夫妻が答える。三村君が部屋から出て行くとき、ちらりと私の方を見る。私はかすかに頷いた。

内田夫妻の来訪は私にとっても少し予想外だった。そのうち、もう一度こちらから出向こうと思っていた矢先だったのだ。私は目の前に座る内田美津子のご主人を観察する。以前、居間で見た写真より老けた印象を与える。

「あらためて、初めまして。私は渡部聡と言います。」私は以前内田咲子にしたように、握手の手を差し出す。やや戸惑ったように内田氏が私の手を握り返した。

「内田雅俊です・・。今日は、その、咲子の事について色々とお話を伺いたいと思い、足を運んだ次第です。」

それはそうだろう。内田氏は〇〇重工の重役として働いていると聞いている。平日の昼日中にここを訪れたということは、もちろん仕事を休んで来たということになる。

「こちらにおいで下さったと言う事はーー奥様と咲子さんの事についてお話なされたのですね？」

「う、うむ・・・。」内田氏が頷く。

「そうですか。私は一度ご家族全員で、話し合って頂きたいと思っているのです。今の家族関係のままであれば、現在はよくともそう遠くない将来に咲子さんはダメになってしまいますから・・。」

「しかし、話すといっても、なにを話して良いのか・・・。」

「内田さん、失礼ですが、お嬢さんと最後にまともな会話をされた

のはいつですか？いつ、どこで、どういった話をされたか、覚えていらっしゃいますか？奥様もです。思い出して下さい。彼女といったいどんな事をお話になられました？」

はっとしたように内田氏は考え込んだ。婦人もご主人に寄り添って、不安げな顔をしている。この二人・・夫婦仲はそう悪そうには見えないが・・どうなのだろうか。

言いずらそうに内田氏が口を開く。「最後に・・話をしたのは、咲子が家を出て行く前の日だ。」私は少し驚いたようにいう。「それは、随分と昔の話ですね。いったい何年前の話ですか？」

「・・・咲子が大学に入る頃だった。いきなり家を出て行くと言い出して、儂は・・・いったい何の不満があるのだと怒鳴りつけた。だが、あいつは目に涙を浮かべてはいたが、お父さんには分からないとヒステリックに叫びよって、言い合いになった。儂は・・・あいつの将来の事も考えて、家から通えと言ったのだが、、」

「待って下さい、なぜ咲子さんの将来を考えて、家から通うようにと言われたのです？」

「それは・・、今は違って来ているかもしれんが、昔は女子が一人暮らしをしているというと、男を引き込む為だとか、あばずれだと言われたもんだ。儂らは咲子を生まれた時から厳しく育ててきたのだ、あの娘をそんなふしだらに言われたくはない・・と思った。」

「なるほど・・その理由は咲子さんに話されましたか？」

「いや、結局儂も頭に血が上ってかーっとなり、あいつも嫌そうな顔ですぐに部屋に引きこもりおったから・・な。」

「奥様はその時、どうなされていたのです？」今度は内田美津子に聞いて見る。

「・・・何も、しておりませんでした。」

「つまり、咲子さんに対して何もフォローをしなかったのですね？

ご主人がお怒りになられた理由をあなたは知っていた訳ですよね。娘さんに、ご主人がお怒りになられた理由を話そうとは思わなかったのでしょうか？」

「・・・・私は、、。」

「先生、妻を責めんで頂きたい。こいつには昔から、子育てを一任して任せて来ました。儂の仕事が忙しかった事もあるが、儂は、こいつが育児ノイローゼになった事も知っておったが、何も口を挟めんかった。確かに咲子は隆と比べて扱いずらい子でした。隆は幼い頃からはしこくて、一をいえば壱拾を知る様な子でした。初めて出来た息子が出来の良い子で、儂も美津子も鼻が高かったものです。それから暫くして、咲子が生まれました。

赤子の頃はとても可愛かった。愛想も良くて儂の手をこうしてよく握っておった・・・。咲子が1歳ぐらいになる頃だったか、ちょっとづつ美津子の様子がおかしいのに気がつきました。いわゆる育児ノイローゼと言うやつでしょう。隆も大きくなったとはいえ、まだまだ手のかかる年で、その頃から儂の仕事も忙しくなり、結局のところ、全てを美津子に任せっぱなしでした。

縛る女２１

それでも、まだ幼い頃はよかったのですが、大きくなるにつれ、女の子ですから口もよく廻って来ます。第一次反抗期と言う奴でしょうか、隆は、そういったものがまったくなかったものですから、余計に妻を苛立たせる事になったんだと思います。
女の子は口でしつけるものだと、幼い頃から咲子には厳しく言って来ました。小さな頃は活発な子でしたが、年を得るにつれ、だんだんと大人しくなっていったのを儂はずっとあれが大人になってきたからだと思っとりました。」

その後、しばらく話を聞いてわかった事は、夫である内田氏が仕事で家を空ける事が多かった事、そして妻の美津子の愛情が寂しさ故か、自分の息子である隆に一極集中してしまい、咲子はほとんどかまってもらえなかった状況にあった事、たまに家に帰る父親とはほとんど会話らしきものもなかった事、つまり咲子が家出に近い状態で出て行くまで、この家族はまったく娘とコミュニケーションを取らずに来たと言う事だ。
昔とは違い、今の社会において、家族とまともなコミュニケーションが取れていない家庭はどのくらいあるだろうか。その理由は様々だが、子供たちが大きくなってから、悔やむ親もたくさんいるだろう。こういった内田家に置けるシチュエーションはさほど珍しくもなくなってきてしまった事に日本の行く末を考える。

あらかた話しを聞いた後で、私は内田夫妻に、もう一度関係を取り戻すための覚悟と決心があるのかと問いただした。壊れたものを元に戻すのは時間がかかる。それでも続いて行くかもしれない連鎖を止める為には双方の協力が必要だ。そう、内田咲子の方にも。
三村君には、彼女に電話してもらい今日、夫妻がここを訪れている

事を話してもらっている。
前回、私が内田咲子と話をした際、私は彼女の心にある憎しみを溶かす為には、まず自分が相手を許すようにと言った。もちろん彼女は即反論を返して来た。

私が被害者なのに、私をこんな風にしたのは親なのに、どうして許す必要があるの？、どうして許せるのかと。確かに、彼女がこうなった大本の原因は家庭にある。しかし、同時に彼女は立派な大人だ。自分の陥った結果をことごとく他人の所為にしていてはいつまでたっても、彼女自身が成長できない。恋人や物、アルコールなどへの執着をやめるには心の安定が必要だが、それを得る為には、まず彼女が許す心を持つ事が必要だと私は判断した。

「最初は私が言ったから、あなたがそう思わなくても、心が追いついてないと思っても、ご両親を許してください。何度も何度もあなたが許す事できっとあなたの心も軽くなっていくはずです。」最後まで難しい顔で許せないと叫んでいた彼女だったが、最後には努力してみると言って帰った。

内田夫妻には宿題を出した。１００項目ぐらいに渡って、様々な質問がなされている。自分自身の事から始まって、娘の好物は何か、家族で行った思い出の旅行は？、自分の子供の事を実際にどれだけ知っているのかと同時に家族として過ごした「良い」思い出を引き出してもらうためである。

実は内田咲子の方にもまったく同じ宿題をしてもらっている。親の年齢、趣味、どんな食べ物が好きなのか、印象に残った事などだ。興味深いのは、意外に彼女は自分の両親の事を良く見ていた。ほとんどコミュニケーションを取っていなかったにも関わらず、後日封筒に入れて送られて来た内田夫妻の解答と見比べて私は感心した。

ー質問項目53、あなたが一番嬉しかった事を書いて下さい。成人式の時、お母さんが着付けをしてくれた事。

以前内田邸で見た、あの写真の事だろうと、内田咲子の晴れ姿を思い出す。家族がまた寄り添うきっかけになるのは、こんな小さな事かもしれない。私は静かに微笑んだ。

私は内田咲子に書いてもらった宿題アンケートを、後日来訪した内田夫妻に見せた。１００項目に及ぶアンケートの解答を読んだ夫妻は涙した。

それから1週間後、私はもう一度内田邸を訪れる事になった。今度は内田咲子と一緒に。二人で長い坂道を歩く間、奇妙な感覚が私を襲う。いつか私が結婚するときも、こうやって二人で一緒に歩き、挨拶しに行く事になるんだろうか。そう考えた自分がおかしくて私は小さく吹き出した。そんな私を内田咲子が不思議そうに眺めている。少し引きつった笑顔が彼女の緊張を表していた。結納の時は都内の料亭だったというから、実家に戻るのはかなり久しぶりなのだろう。今日は兄も含めて家族全員が揃っている。

縛る女２１（後書き）

あと２～３話ほどで、第一カルテ終了です。第二は男の人が主役？になります。

縛る女２２

ーーピンポーンーー
快活にベルの音が鳴り響く。今回はインターフォンで確認するまでもなく、ドアが開かれ、若い男性がこちらに向かって歩いて来た。

「兄さん・・・。」と内田咲子が呟いた。
確かに、写真で見た事のある顔と一致する。ではこれが、内田隆か。彼は私たち二人を面白そうに一瞥すると、やおら咲子に向かって声をかけた。「この家でお前に会うのは久しぶりだな、咲子。お前はこの家を出てからは嫌って寄り付こうともしなかったからな・・・。まあ、上がれよ。お前の部屋も親父が手を付けずにそのままにしてあるんだ。」

「お父さんが・・？そう・・なの？」
私たちは彼の後をついて、以前訪れた応接間へと導かれる。其処には内田咲子の家族ともう一人見知らぬ男性・・・いや、何処かで見た事がある・・。誰だ？突如隣で息を飲む音が聞こえた。
「藤・・堂・・さん・・・」
内田咲子のつぶやきにはっとする。そうだ、何処かで見たと思えば、彼女の部屋で仲良さげに腕を組んで映っていた写真の男性、藤堂氏だった。
「何故・・？」唖然とした顔で呟く彼女に、兄の隆の声が響いた。
「俺が呼んだんだ。」
ちらっと隣を様子見る。彼女が混乱しているのが見えた。彼女の兄、隆はいったい何を考えているのだろうか。

「藤堂さんも、将来俺たちの家族になる・・かもしれないんだ。もし、お前が本当に彼と結婚するならば、俺たちの家族の事もちゃん

と知っておいてもらわなければならない。お前には内緒で藤堂さんと合い、今回の席に呼んだんだ。」
なるほど・・・確かにそれは一理ある。だが、まだ彼女の中では、元彼の本橋さんとの決着もまだついていない。少し性急すぎるのではないかと危ぶむ。

藤堂氏が口を開いた。「咲子さん。お兄さんからはある程度の事情は聞いています。ショックでなかった・・といえば嘘になるけど、これからの僕たちの将来の事もきちんと考えた上で、今日此処に来させてもらったんだ。渡部さん・・でしたか、、突然のことで驚かれたかと思いますが、よろしくお願い致します。」
藤堂氏と目があった。彼は私に向かってゆっくりと頭を下げた。なるほど・・もったいないぐらいの良い男だ。誠実そうで好感が持てる。

「いえ、こちらこそ・・・。よろしくお願いします。藤堂さん。」
内田咲子はまだ硬直したように突っ立ったままだ。そんな彼女をいたわるように母親がおずおずと肩に手を回す。内田咲子の小さな肩がびくっと震えた。今までそういったスキンシップを一切してこなかったのだ、無理も無い。
彼女は脅えた様な目で母親を見る。その視線に何か感じるものがあったのか、内田美津子はゆっくりと目を閉じた。
「ここで、こうやって皆突っ立っていても仕方が無い。どうぞこちらに来て座って下さい。さあ、、咲子も・・。」

一家の主人でもある内田氏が皆を座らせた。奥さんがお茶のカップを運んで来た。
椅子に座ったところで、藤堂氏が口を開く。「先生には、咲子や妻の事で、色々と世話になっています。お恥ずかしい事だが、先生が仰られた通り、私たちは一つの家族としてのあり方を間違ってきた

と感じています。咲子が・・・こんな状態になったのも、儂らの責任です。
藤堂さんにも、本当に申し訳なく思っとります。」そういって内田氏と美津子は私たちに頭を下げた。

内田咲子は何か信じられない物を見るかのように目の前にいる両親を眺めていた。
「・・いまさらっ、いまさら何だって言うのよ！ずっと私の事なんて見ていなかったくせに！私が何をしようが、私の事なんてっ・・・つッ・・」涙と共に嗚咽が混じる。私は暫く彼女が言いたい事をそのまま言わせておく。家族は受け止めなければいけない。これは彼女が長年心に溜めて来た思いなのだ。

内田の家族はそれぞれ悲痛な面持ちで自分達の家族、そして妹の罵倒を受け止めていた。藤堂氏は気遣わしげに、内田咲子の背中をなぜている。兄から事情を聞いたと言っていた。という事は両親から兄へ、兄から藤堂氏へと本橋さんの事も聞いているのだろう。よほど彼女を愛しているのか、それとも・・・。

「もうその辺で気が済んだのではないですか、咲子さん。」私は子供のように泣きじゃくる彼女にゆっくりと声をかける。

縛る女２３

長い間言えなかった事を聞いてもらえた為か、涙に濡れた彼女の顔は意外にすっきりとしていた。

「咲子、すまなかったな・・・。謝って貰って許せる事ではないかもしれんが、これはわかっておいてくれ、儂らは何もお前を疎んでいた訳ではない・・。儂も長い間、お前と話をしていなかった分、お前になんといって言葉をかけてやれば良いのかわからんかった。忙しさにかまけてお前の気持ちを考えてやる事もできなかった・・・。」

「咲子、覚えてるか・・・小さい頃、田舎で二人で一緒に蛍を取りに行って帰りに迷子になったよな。お前ずっと俺の手を握りしめて不安そうに泣いていた。お前の事、ずっと守ってやらなきゃと思っていたのに、いつの間にかそんな頃の記憶も忘れて、お前に辛い思いをさせてしまった。おふくろがお前につらく当っているのも知ってて見ぬふりをしてきたんだ。お前が一度自殺騒ぎを起こして家を出て行ってから、俺はすごく後悔したよ。だからお前が藤堂さんを連れて来た時は本当に良かったと思ったんだ。俺たちが出来なかった分、この人はお前の事を幸せにしてくれるだろうって・・他人任せで格好悪いけどな。

親父達からお前の病気の事聞いて正直焦ったよ。お前をそんな風にしてしまったのは俺たちの責任だが、それでお前がやっと掴もうとした幸せを手放す事になったらどうしようかと・・・。」

内田隆の言葉を藤堂氏が引き継いだ。

「お兄さんは僕のところにやって来て土下座されたんだよ・・・。ずっと隠しておく事は出来ないし、かといって咲子がこうなったの

には全て自分達の責任だと仰ってね。僕も色々と初めて聞かされる真実にどう対応して良いかわからなかった。騙された・・・気分もしたしね。
でも同時に確かに僕が君の本質までちゃんと見ようとしていなかった事も事実だ。君の上辺だけを見て君の心の奥底にあるものを見ようとはしなかった。いや・・・見たくなかったのかもしれないが。
今回、此処に来る事は僕もすごく悩んだよ。

婚約を取りやめるという事も考えたけど・・・君の事をちゃんと見ていなかったのは僕の責任でもあるからね。」藤堂氏はゆっくりと噛み締めるように内田咲子に言い聞かす。

「差し出がましいとは思いますが、藤堂さんは咲子さんとの事を白紙に戻そうと考えていらっしゃるのですか、それとも・・？」私は藤堂氏に問いかける。

「其処のところを、実は先生にお聞きしたいと思っていたのです。咲子を前にこんな事をいうのも何ですが、、咲子はなおるんですか？アダルトチルドレンやそういった依存症の事は僕なりに少し調べてみました。一口には言えない難しいものなんですよね・・・？」

核心をついて来た・・・。確かに藤堂氏にとっては結婚しようと思っていた女性の思わぬ姿を知らされ、悩んだのだろう。だが即、婚約を解消するのではなく、この場にやって来た事は高く評価しよう。誰にでも出来る事ではない。彼程の人間ならば、もっと相応しい相手を得る事は難しくはないだろう。私の返事次第でこの縁は壊れてしまうかもしれない。周りに緊張の糸が張り巡らされているのを感じる。特にひしひしと内田家からの視線を感じた。
内田咲子はずっと下を向いているままだ。この展開について行けてないのかもしれない。少し休ませた方が良いか・・・。

私は内田美津子に目配せをする。彼女ははっと自分の娘に目を留め、そして気がついたように彼女の手を取ると部屋をでていった。バタンと扉が閉まり、階段を上がっていく音がする。彼女の部屋へと連れて行ったのだろう。男性陣は何も言わず大人しく母親に手を引かれていく内田咲子を見ていた。

「そうですね、では本題に入りましょうか・・・・。」私の言葉に緊張が走った。

縛る女２４

「なおるのでしょうか・・・という質問ですが、逆にお聞きしましょう。皆さんはこういった心に負った傷を癒すのは簡単だと思われますか？心の傷は目に見える物ではありません。軽い症状だと思っていても実は酷く傷ついていたりすることは多くあります。
彼女の場合、俗にいうアダルトチルドレンの特徴を備えていると共に、本橋さんとは長く共依存の関係にもありました。一言で言ってしまうのは簡単ですが、こういった問題は１ヶ月入院していればなおるといったものではありません。数年、下手すると何十年も関わって行く事になる覚悟が必要です。

この件に関して、僕は嘘は言いません。簡単になおりますよとは口が裂けても言えないんですよ。こういった問題を抱えている方達と結婚して家庭を築いて行く事はある意味試練です。もしかしたら、良くなるかもしれません、ですが絶対とは言えません。
ですが、咲子さんの場合ご家族がこうやってちゃんと問題に向き合おうとしています。これは大きい事です。アダルトチルドレンになる方達の大半は家庭に問題があった人が多いですが、その多くは、それを認めてしまうのが怖い、または受け入れない家庭がほとんどです。
また実際に自分がそういった障害を持っている事を自覚していない人もたくさんいますからね。

ですが、きっかけは生まれました・・・。彼女の心の中にあるしこりを溶かしていく為には家族の協力が必要です。そして、藤堂さん、もしあなたが本当に彼女を愛しているのならば、それを一緒に見守りサポートして行く事になります。先ほどの答えですが、いつなおるか・・それは誰にもわかりません。彼女は自分の病気を自覚して

いますが、それが形を潜めるまでは、良くなったり悪くなったりを繰り返す事も十分に考えられます。

咲子さんの元彼・・というべきか、まあ本橋さんの事ですが、彼は幸い、カウンセリングを続けている中で随分と解放されつつあります。自分自身をもう一度見つめ直し、もう一度生活を取り戻そうとされています。彼は、こういった環境に置ける被害者ですが、もちろんそれには彼自身の問題もあります。彼自身、咲子さんのもっている負の部分に共鳴し、また引きずられる心の弱さがあった訳ですから・・・しかし、人間は多かれ少なかれ、みんなそういう部分をもっています。しかし、強くなるのも、弱くなるにも、それは私たち自身に委ねられています。」

しばらくの沈黙の後、藤堂氏が口を開いた。「お話はよくわかりました。確かにその通りだと思います。心の問題はそんな簡単なものでは無いですよね。僕も今の咲子とどうやって関係を保っていくのか、正直わかりません・・・。ですが、逃げ出したくもないと思っています。」

「藤堂さん、それは・・・」内田氏がおずおずと尋ねる。
「婚約は、一度白紙に戻します。ですが、僕自身もう一度本当の咲子さんを知るために一から付き合って行こうと思います・・・。」
藤堂が意を決したようにきっぱりという。

本当にいい男だ。これから考えられるであろう苦労をわかって、それを一緒に担おうとしている。内田咲子に男を見る目はあったと言う事か・・・。その後、男達４人で飲み会になった。私はお酒はそうたしなむ方ではないので、適当にあわせておく。

――――――――――――――――――
――――――――

時間を遡り、男達が酒盛りをはじめる前、２階の内田咲子の部屋でも事件は起っていた。
気遣うように娘を２階の元いた自分の部屋に連れて行く。
よろけるように、きちんとベットメーキングされたベットの上に二人で腰を下ろした。
内田美津子は黙って自分の娘を見つめた。
自分とよく似た、目元、口元・・・いつの間にこんなに大きくなっていたのだろうか・・。事実こんな近くでじっくりと娘を観察する事は長い間無かった。
罪悪感・・・それは、ここ数週間、美津子の中に芽生えた苦い苦しみ、そしてそれは子供達がまだ幼かった時、半ノイローゼ気味になりながら子育てをしていた時分の事を思い出す。

家にいなかった夫よりも、ずっと家にいて子供達の面倒を見て来た自分のほうが子供に様々な影響を与えて来たはずだった。私は怖かったのだ・・だんだんと自分に似てくる娘が。
自分の嫌な部分を鏡のように映し出す娘を見るのが嫌で遠ざけていた。美津子の目から大粒の涙が溢れ出した。ずっと握りしめていた娘の手に雫が落ちる。内田咲子は、そんな母親の手をぎゅっと握りしめた。

縛る女２５

「お母さん・・・・？」

「ごめん、ごめんなさい・・・っ、許して・・咲子っ」そういって泣き崩れる母を前に咲子は渡部の言葉を思い出す。「内田さん、許したものがちですよ。あなたが許せない心を持っているうちはずっとそれに縛られたままです。騙されたと思って自分からもう一度歩みよってみませんか？」

ーーこんなに自分の母は小さかっただろうか・・・肩を震わし嗚咽をもらして泣く母の姿を映画でも見ているような気分で見つめる。自分の脳裏にあった母の姿とは異なる姿に憐憫を覚えた。自然に口から言葉がこぼれる

「私も・・・ごめんね・・お母さん・・」二人は互いに抱きしめあったまま無言で涙で頬を濡らした。じんわりと温かいものが咲子の心に広がる。そうか・・許すことでこんなに自分が楽になるのだ。憎しみが自分の心をどんなに苦しめていたのかを痛感する。先生が言っていたのはこういう事・・・？

次の日、飲み明かした男性陣は手を繋いだまま眠りこける母娘の姿を見る事となる。

それから数ヶ月が過ぎた。本橋さんは、もう一度じっくりと内田咲子と話し合い、納得した上で彼女との関係を終わらせた。その後共依存の症状も成りを潜め、精力的に仕事に没頭しているようだ。ついこの間、新しく出来た彼女を連れてオフィスを訪れた。同じ職場で働いているという彼女はおっとりとした感じの良い女性だった。彼の運命の女性は意外と近くにいたという訳だ。しっかりと前を向

いて新しい未来へと動き出そうとしている本橋さんに私はエールを送った。喜ばしい知らせを受けるのもそう遠くはないかもしれない。

藤堂氏は、彼が言った通り、一度婚約を白紙に戻し、もう一度内田咲子と向き合って交際をはじめた。まだまだ、情緒が不安定になる事はあるみたいだが、彼女自身も自分を偽る事を辞め、酒に溺れたり過剰に体の関係を求め安心したりする事は無くなって来ているようだ。

内田咲子とその母美津子は月に1回、続けてカウンセリングを受けるためやってくる。母娘の仲も随分と落ち着いて来た。藤堂氏もたまに定期報告やアドバイスを受けに、顔を出す事がある。彼によると二人で実家の方へもちょくちょくと顔を出しているようだ。

家族の協力と理解あるパートナーを得た彼女を幸せだと思う。もし彼らが将来結婚する事になったとしても、今度はお金や上辺だけの物事に囚われない関係を築いて行って欲しいと心から願う。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

今回、関わった件については、随分と喜ばしい結果に至った方だが、これに似たほとんどのケースの場合、満足のいく結果が得られる場合が少ないのも事実だ。私はデスクの上に足を投げ出し深く椅子に腰掛ける。十年、十五年前と比べても、驚くほどこの国の人間は病んできている・・・そう思わされる。毎年自殺者や精神障害を訴える者達の数は増える一方だ。

私は本棚にあった一冊の聖書を取り出し開いてみる。これはアメリカにいた頃、友人から貰ったものだが、日文と英文が対比してある一冊だった。ぺらっと最初のページをめくる。私の目に飛び込んで来た一節に目を留める。「Ｌｅｔ　ｕｓ　ｍａｋｅ　ｈｕｍａｎ　ｂｅｉｎｇｓ　ｉｎ　ｏｕｒ　ｉｍａｇｅ，　ｍａｋｅ　ｔｈｅｍ

ｒｅｆｌｅｃｔｉｎｇ　ｏｕｒ　ｎａｔｕｒｅ－我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」神はご自身に似せて人間を創られたという。もしそれが本当だとしたら、この私たちが神の望んだ姿だと言うのだろうか・・？神の形・・そして人間の本来あるべき形とはどういったものなのだろうか。私は目を閉じて終わる事の無い思考の海へと身を委ねる。人間は考える葦とはよく言った物だ・・・。

「センセ、コーヒーが入りましたよ。」また三村君が苦いコーヒーを持って部屋に入ってくる。私は聖書を閉じデスクの脇に置くと微笑んで礼をいう。

「ありがとう、三村君・・。」

また今日も新しいクライアントとの１日が始まろうとしていた。

第二章：カルテ2、空

昼過ぎの喫茶店で耳に聞こえてくるのは、サティのピアノ曲と泣く女の声・・・

ああ、もう鬱陶しいな・・俺は窓の外から目線を戻し、目の前で泣き叫ぶ女の顔を見やる。マスカラがはげ落ちたその顔は見られたモンじゃない。もういい加減この状況にも飽きてきた。

「聞いてるの?!健司?!」女がわめく。

「ああ、聞いてるよ・・・、で、何?」言い終わるかと同時に女が俺めがけてグラスに入っていた水をぶっかけた。

「あんった、本当に最低!」声が震えている。女はそそくさとバックを抱えると早足で店をでて行った。ジ・エンド・・つまんねーな本当に・・俺は濡れた髪を掻きあげほおづえをつく。

突如俺の後ろから小さな声が聞こえた。

「冷たい・・・。」首をまわして後ろを見やると、長い黒髪を後ろで一括りにしている地味目の女がかかった水しぶきに眉をひそめている。

慌てて立ち上がり女に頭を下げる。「あっ、すいません・・・かかっちゃいましたか?」

見ればわかるだろうとも言わんばかりに女は俺をうさんくさそうな目で見上げた。ぱっと見た感じでは地味な女だと思ったが、なかなかどうして顔立ちの整った美人だ。

ふうん・・・なかなかいけるかも・・と俺は先ほど別れた女の事などすぐに忘れ、目の前の女に注意を向ける。うりざね顔に切れ長の二重の瞳、すっきりと通った鼻筋に薄い唇。ともすれば嫌みになりがちなほど整った顔に冷ややかな二つの視線が突き刺さる。

「良いです・・もうそろそろ出ようかと思ってましたから、外は暑いし直ぐ乾くでしょう。それに別にコーヒーや紅茶じゃ無かったからシミにもならないでしょうし・・・。」
そういって女は濡れた伝票をもって立ち上がりレジに向かおうとする。俺も慌てて伝票を掴むと彼女の後を追って行く。
「あ、あの、俺支払います！」レジの前に来て支払いをしようとする彼女を押しとどめる。
「・・・・別にあなたに支払ってもらう理由はありませんが・・。」
「いやあ、ほら、水ぶっかけられたのって俺の所為だし、君関係ないのに結構濡れちゃったじゃん？せめてこれくらい払わせてよ。本当はクリーニング代も払わないといけないぐらいなんだしさ。」と言い募る。

「結構です。気にしないで下さい。」と彼女は財布を取り出したが、俺は素早く財布から5千円札を抜いてカウンターに置くと「これ、俺らの分と、あと店汚しちゃった分なんで！」と言って強引に彼女の肩を抱いて店をでる。

「あの、ちょっと！」店をでるとすぐに彼女が俺の手を払いのけ、俺を睨みつけた。
「困ります。別にあなたに払ってもらう理由はありませんから。」
「いいじゃん、俺が悪いんだからさ、ほら、それよりも人が見てるよ。そんな大声出すからさ。」確かに道を歩く通行人らが二人に注目している。濡れ鼠の俺と彼女を見れば何かあったと思うのは不思議ではない。

彼女はふと周りを見渡すと少し下を向いて早足で歩き出した。ヒールの音がカツカツと響く。俺も早足で彼女の後をついて行った。暫く歩いて行くと、彼女がくるっと振り返り、怒ったような顔で俺にくいかかる。

「なんでついてくるんですか！」
「え、なんでって・・そうやって君を怒らしたまま帰らす訳にもいかないしねえ・・・？」
「結構です。私はぜんぜん気にしてませんから！ほっといて下さい！」
「ほっとけと言われてもさ、俺、君に興味あるんだよね・・・お姉さん・・・たぶん俺より年上だよね？」そういって俺は彼女に一歩近づいて彼女の手をとり顔を近づける。自慢じゃないが、俺の容姿は結構いけてる方だと思う。ファッションセンスももちろんだが、持ち前のこの容姿に寄ってくる女は吐いて捨てるほどいる。俺がこうやって顔を近づけると大抵の女は顔を赤くして、落ちるのだ。ナンパなどはほとんどした事もないが、たまに友人に誘われて行った先では１００発１００中だ。

だが女は、余計うさんくさそうに俺を睨んで一言「あんまりしつこいと警察呼びますよ！」と言いやがった。其処まで言われたら仕方がない。俺は彼女の手を離すと肩をすくめて立ち去る・・・フリをして彼女の後をつける。これじゃあ、プチストーカーだなと自分で思いつつ、あるビルの3階へと入って行く彼女をチェックする。
「カウンセリング・・・？あなたの悩みをお聞きします・・ふうん。」俺はにやっと笑ってその場を後にした。

空2

「只今、戻りました。遅くなってすみません・・。」
「ああ、三村君、お帰り・・・あれ？どうしたの、その格好？」いつもはキチンとスーツを着こなし髪も一纏めにしている彼女のスーツは所々水がついて変色しており、髪の毛も心無しかほつれている。しかもかなり機嫌も悪そうだ。

「暑いといっても・・そんなすぐには乾かなかったですね。」三村君はスーツの上着を脱いで椅子の上にかけるとふくれた顔のまま、髪留めをとった。つややかで美しい黒髪が彼女の小さな顔を縁取り一気に鮮やかな印象へと変化する。リンスの匂い・・なのかほんのりと良い匂いが私のところまで漂ってくる。
「お昼を食べに行った喫茶店で水をかけられたんです。その後は変な男に付け回されるし・・・本当にさんざんです。」

「えっ？水をかけられたって、どういう・・それにつけられた？」私は吃驚して座っていた椅子から立ち上がり三村君デスクに寄って行く。
彼女はため息をついて先ほど起った出来事を話した。

「なるほど、それで、、水に濡れてしまった訳ですか・・。それにしても最近の若者は大胆ですね。どんな感じの男性だったのですか？」私は続きを催促するように問いただす。
「センセ・・・面白がってませんか？」
「えっ・・いや、そんな事は無いですよ・・・。はは、、でも私もちょっと見たかったなって気はしますけど。」正直どういった状況下で水をかぶる事になったのか興味はある。
じろりと三村君は私を睨む。「まったく、本当にセンセは・・・。

でもどんな男だったか・・・そうですねえ・・・。」三村君もなんだかんだ言って答えてくれる。

「今時の子供ですよ、大学生ぐらいの・・。ちゃらちゃらした感じで、こう、髪の毛が立ってて・・やたらと接近してくるんです。すごく強引なんですよ。それに男物の香水付け過ぎですよ、あの人！きっと水をかけた女の人も香水の匂いが臭くて消臭しようとしたのかしら・・」

「っぷ、はははは！」三村君のジェスチャー付きの説明と天然思考につい吹き出してしまう。

「何がおかしいんですか、センセ・・・？」

「いや、、ごめん、なんでもない。三村君その二人の話は聞いてなかったのかい？」

「読書していたんです。キリのいい所まで読んで、事務所にもどろうとした時に水が飛んで来たんですよ。最低！って怒鳴ってたからよっぽど臭かったんですね～。」

ああ、なるほど・・。三村君は一度何かに集中すると他の雑音はまったく気にならなくなるらしいのだ。天然過ぎる推理力は、精神科医としては向いていないかもしれないが、彼女のマネージメント能力には目を見張るものがある。

「で、結局彼が強引にお昼を支払って三村君の後をついて来た・・と？」

「そうです。こっちには支払ってもらう理由なんてないのに、勝手に払ってついて来たんです。腹が立つでしょう？！」

「いやあ・・でも水がかかったのは確かに彼の所為でもあるみたいだし、お昼代ぐらいは妥当名のでは・・？」

「嫌ですよ！見ず知らずの変な男に払ってもらうなんて。」今時珍

しく、こういうところはかっちりしている。たまに私と一緒にお昼を食べにいって、僕が支払うといっても必ずきっちり半分支払う彼女だ、見ず知らずの男に振り回されるのは嫌なのだろう。

「まあまあ、もう二度とあう事もないでしょうし、今日は午後からのクライアントさんは少ないので早めに帰っても良いですよ。ゆっくり休んで下さい。」

なおもぶつぶつと文句言いたそうな三村君だったが、時計を確認すると慌てて仕事に取りかかった。いつもは冷静な三村君の違った様子を見れたのは楽しかったが、まさか、これが私たち二人の日常を覆すきっかけになるとはその時は思いもしなかったのだ。

空3

よく晴れた夏晴れの朝だった。私は定刻通りに家をでるといつも通りラッシュに湧く電車に飛び乗った。いくら込み合っているとはいえ、冷房が効いていて涼しい。朝のこの時間帯は学生も多いのだが、今は夏休み前だ。休みが始まれば、この車両も少しはましになるだろうか・・。

ガタンとカーブに差し掛かり電車がひと際大きく揺れた時、私は一人の学生に目を向けた。

何やら難しい顔をしている。つり革を握るサラリーマンらの間で揺られながら百面相しているのだ。余りにもその表情が気になって私はゆっくりと人ごみを縫ってその少女の近くへと移動する。

ーーー痴漢か・・？いやそういう雰囲気でもなさそうだ。彼女の周りにいる人達は皆片手はつり革を握っているし、片手には鞄をしっかりと握っているか、携帯メールを打っている人もいる。

もう少しと移動したところで私は彼女の百面相の理由を知った。

小柄な彼女は手を挙げる男達の丁度脇の下にすっぽりとおさまる感じで立っていたのだが、不幸にもその辺り一帯、汗とわきがの匂いが充満しているのだ。よほど体臭の濃い人がいると見える。彼女は彼らの脇の下で、匂いに堪えつつ百面相をしていたのだろう。

理由がわかって来たところで、少しラッシュがましになる。この駅で随分の人達が降りていった。彼女は小さく息をはくと避けるように場所を移動していった。

電車で通勤をしていると、毎日様々な光景に出会う。それが何ともいえず面白いのだ。

目当ての駅についと、事務所までゆっくりと歩いていく。階段を上り3階の見知った事務所の扉を開くと、既に三村君が来ていてファ

イルの整理をしていた。
「おはよう、三村君、今日は早いね。」
彼女はこちらを振り向いて笑う。「昨日、早く帰らせてもらいましたから・・・それに朝早めのほうが人が少なくて良いんです。」なるほど、彼女もラッシュが苦手と言う訳か。
「そうか、しかし、今日も雲一つないいいお天気だな。こりゃ、昼間は暑くなりそうだ。そうだ、昼飯に久しぶりに「福萬圓」の冷やし中華を食べに行かないか？あそこのはいけるぞ？」
三村君がおかしそうに笑う。「センセ、朝からもうお昼の話ですか？う～ん、そうですね。でも二人一緒に事務所を空けると不味いですよ。出前を取ったらどうですか？」
「ああ、なるほど、うん、その手があったか。じゃあ、昼に冷やし中華２つ出前って事で。」私はニコニコしながら応接室件、私の仕事場でもある部屋に入って行った。
大抵昼は二人別々に取る事が多いので、今日は珍しい。今はこんなに晴れているがそのうち雨でも降り出すのではないかと空を見やったがもちろんそんな兆候はなかった。

今日の午前中はクライアントがいないので、ファイルの整理や学会の論文を読む事に集中する。そうしているとあっという間に時間が経つのだ。１１時半を廻った頃に三村君が、私の部屋のドアをノックする。「センセ、そろそろお昼の中華オーダーしますよ。」
「ああ、宜しく頼む。」そういってまた私は愛用のＭ@Ｃに目を落とした。

しばらくたってから、事務所の扉がノックされる音が聞こえる。あれ・・もう来たのか。早いな。そんなことをつらつらと頭の中で考えていた矢先、三村君の声が脳裏に響いた。
「なんであなたが、ここにいるんですか？！」三村君があんな大声

を出すのは珍しい。私は読みかけの論文ファイルを開いたまま、急ぎ隣の部屋の扉を開いた。

ドアを開いて唖然と立っている三村くんと、見慣れない男性が立っている。

「えっと・・・三村君・・・？その方は・・・？」私の言葉にはっとしたのか、三村君が私のそばに駆け寄ってくる。

「センセ、あの人ですよ！昨日話した香水男！」

ああ・・・あれが・・・と私はまじまじと、その男を見つめる。ストリートカジュアル系ファッションとでも言うのだろうか、一目みて質のよさそうな白いシャツと穴の開いたジーンズを着た男が立っている。やたらと胸元が開いているのは暑いからなのか、それとも仕様なのかはわからないが・・・。

男は長めの髪をかきあげながら近くまで寄ってくるとにやっと笑う。

「昨日はどうも～。」

空4

「な、なんであなたが此処にいるんですか?!もしかして、昨日つけてたんですか?!」
三村君が私の後ろに隠れるようにしながら男を睨みつける。当の男性は飄々とした態度で私たちのところまでやってきた。
「酷いなあ・・俺ストーカー扱いですか?たまたま行く方向が同じだっただけで・・、君が嫌がるから仕方なく距離空けてついて行ってたけど、俺の大学、この先にあるからさ。
まあ・・前を歩いてた君がこのビルに入るのは嫌々ながら目についただけで、別につけていた訳じゃ無いっすよ・・・。それに結構この道通るのに、こんなところがあるなんて知らなかったしな・・。ここって、心療内科のクリニックなんでしょ。あんたがここの先生?」そういって男は私の方を挑発的に見やった。

「はい、そうです。渡部と言います。えっと・・、それではあなたが昨日三村君が水をかぶる原因になったという・・お名前は何と仰るんですか?」

男は少し目を見開いて、またにやりと笑う。
「ああ、昨日の話、聞いてたんですか・・。まあ、話が早いか。俺は和田健司って言います。昨日はそちらの彼女にとんだ迷惑をかけてしまって、申し訳無かったです。」小さく頭を下げる。

「学生さんでしたか。この先の大学と言うと、○○大学ですか?それで和田さん、今日はどういったご用件で・・・?」

「俺の事は健司でいいっすよ。ーーいや、もう二人してそんな不審者みるような目つきしないでくださいよ~。信用ないなあ・・・。

ほらこれ、学生証。一応医学部の学生なんすよ、これでも。まあ、この年になると色々悩む事も多くて～・・で、できれば、ちょっとカウンセリングとかって興味あって、どんなもんなのかな・・ってね。」

「それは・・・つまり個人カウンセリングを受けたいと言う事ですか？」私は、受け取った学生証を彼に返しつつ聞き返す。

「そうそう、そんな感じ！ま、俺も色々あってさ～、そのカウンセリングっての受けてみたいんだよね・・。」

「そう・・ですか・・・。ですがうちは個人カウンセリングについては、じっくりとお話を伺うためにも、完全予約制となっています。三村君に予約をしてもらって後日改めて・・ということになりますが、いかがでしょうか。」

「ああ、全然問題ないっすよ。で、君三村さんって言うんだ？下の名前は何っての？」

三村君はまだ暫くはうさんくさそうに和田健司を見ていたが、仕方なく、案内などの用紙を持って来て彼に手渡す。

「これが、当クリニックの案内と問診表です。目を通して記入してください。それから、職務外の質問は一切受け付けませんので。」

「へえ、それで、三村さんって彼氏とかっているの？」

「ですから！関係のない質問はしないで下さい！」

つれないな～などとつぶやきながら橋本はクリニックの問診表を埋めて行く。

「はい、出来た！じゃあさ、とりあえず明日の3時ってことで・・・これから、よ・ろ・し・く、先生！」橋本は問診表を三村君に手渡すと私の方を振り向き軽く手を挙げる。そして、三村君にウインクをして出口の方へ向かって歩いて行く・・と同時にノック音が聞こ

えた。
「こんにちは～、福萬圓です。冷やし中華２皿お持ちしました～！」
「へえ、冷やし中華かあ、うまそうだな。」出前を持って来た福萬圓の店員が取り出した皿をじっと見やる。
「えっと、２人前で１４００円になります。」
三村君の威嚇するような視線に気がついたのか、和田は苦笑しながら、「それじゃ、明日！」と言うと、今度は自分でドアを開けて出て行った。暫く彼を見送っていたが、私は鞄の中から財布を取り出し、千円札を二枚引き抜いて手渡す。
「あ、１４００円ですね、すいません。」
「あ、じゃあ、これ６００円、おつりです。」
私がお金を支払うと、後でお皿取りにきますのでといって出前は去って行った。

「はい、どうぞ、三村君。」そういって私は、冷やし中華を一つ彼女に手渡す。受け取った三村君は何かもの言いたげに私を見ている。もう一方の方が良かったのだろうか・・？
「・・・センセ、本当にあの男の人のカウンセリングするんですか？」
「あの男って、和田さんですか？そうですね、本人の希望がありますし、こちらも断る理由がありませんからねえ。後で私の方に彼の問診表を持って来て下さい。１時半からの電話カウンセリングが終わった後に目を通しますから。」
三村君はきっちりと私に７００円を手渡すと、ため息をついて背を向けた。どうやら機嫌をそこねてしまったらしい。

空5

冷やし中華はおいしかった。色とりどりに載せられた具を麺と一緒につつきながら食べてしまう。食べ終わった皿は後で取りにくると言っていたか・・・
私は皿を片付けると、三村君がファイリングした、先ほどの男性、和田健司のファイルを持ってくる。よっぽどあの手のタイプが苦手だったのだろう、あれからずっと彼女の機嫌は悪い。
せっかく、冷やし中華を一緒に食べようと思っていたが、結局自分のデスクで一人で食べる事になってしまった。台風の目の様な彼がちょっと恨めしい。

さて、ファイルを開いて見ると彼の書いた問診表がトップにある。意外に丁寧な字で書き込んである。書く自体などでも、その人の人なりが伺える。彼の場合見た目とは裏腹に細かく、綺麗な字だった。ふむ・・〇〇大学の医学部か・・・。確かに頭は良さそうだ。なかなかに偏差値の高い良い大学である。来訪理由については・・・、一言だけ書かれている。「空」そら・・？嫌違うな、からだ・・。空っぽと言う意味か？
これは、何か私に挑戦でもして来ているのだろうか・・。それともこれが彼自身を表す言葉なのか。私は色々と想像をかき立てる。

家族構成は、両親と弟が一人、そして祖母が同居、ふむ、二世帯住宅か・・・気になる点だな。他にも、いくつか気になる点やチェックポイントを上げて、私はファイルを閉じる。なかなか面白い人物のようだ・・。私は彼の挑発的な目線を思い出して苦笑した。
――――――――――――――――――――
――――――――――――
次の日の午後、３時きっかりに彼はやってきた。

「こんにちわ～」入ってくるなり、いそいそと三村君の側に近づくと大きな箱を取り出して手渡す。
「何ですか・・・これ？」三村君が怪訝な顔で問う。
彼はニコニコしながら言った。「Ａｌｉｃｅ　Ｍａｉｄ'ｓ　のケーキ。そこのケーキ結構美味いんだよ。元彼女がよくそこを待ち合わせ場所に使ってたんだけどさ、良かったら食べてよ。」
三村君の表情が少し柔らかくなる。実は彼女は大の甘党だった。
「でも、、」
「いいから、いいから！２種類ずつ４個のケーキが入ってるから、気に入ると良いんだけど。」
「ありがとうございます。」そう言うと彼女はケーキの箱を受け取り、一度それを脇に置くと、彼を伴って隣の応接室のドアをノックする。
「センセ、和田さんが来られました。」
「ああ、こんにちは、待ってたよ。さあ、入って！」私は彼を招き入れる。応接間には3人がけのソファーが一つと椅子が2客、そして奥には私の本棚と仕事机がある。部屋に入ると彼はぐるっと視線を巡らし、面白そうに言う。
「へえ、結構良い感じだね。この部屋の感じ、落ち着くよ。」
「それは、ありがとう。」応接室のインテリアは壁紙に至るまでプロに頼んで仕上げてもらっている。話す方も、聞く方もやはりおちついた空間が望ましい。只の白い部屋で机と椅子だけしかおいていなかったら、警察の事情聴取のようだ。
彼は一人がけの椅子に腰を下ろしたので、私も反対側の椅子に座る。三村君が、紅茶とケーキをトレイに入れて持って来た。あれだけ昨日は機嫌が悪かったというのにどういう風の吹き回しだろうか・・。
「三村君、このケーキは・・？」
「あの・・和田さんが持って来てくれたんです。」ばつが悪いのか目を伏せ気味にそそくさとでていく。なるほど、彼がこのケーキを

持って来たのか。なかなかおいしそうなケーキだが、食べ物でつろうとするとはなかなか着眼点が良い。

「このケーキ、和田さんが持って来てくれたのですか？ありがとうございます。とてもおいしそうですね。」
「ああ、気にしなくていいっすよ。この間の詫びも兼ねてますから。」詫び・・ということは彼女に対してということなのだろう。
「そうですか・・では遠慮なく頂きますね。ところで、さっそく本題に入りたいのですが、和田さんは日常、どういった生活をされてますか？」
「どうって・・別に、ふつーにバイトしたり、講義受けたり、女と遊んだりとかかな。」
「それだけですか？」
「他に何があるんだよ？」
「そうですね・・和田さんは医学部にお通いになっているそうですが、将来は何の医者になるつもりですか？」

「さあ・・・。」
「さあ・・・ですか。」
「別に入りたくて入った訳じゃねーし、どうせうちの病院継げって言われてんだからチョイスなんてねーしな。」
「ご実家は病院ですか・・。内科ですか？」
「いや、産婦人科・・・。」
「はあ、それはとても忙しそうですね・・。」今の時代、医者の人数が減っている日本だが、産婦人科医はもっと少ない。お産に間に合わずたらい回しにされてと言う話は少なからず聞く。
だが、実家が産婦人科を経営しているというと、かなり金持ちのぼんぼんと言う事だろう。

空6

「ところでさ、俺の問診表見た？」にんまりと和田が笑う。
「拝見させてもらいましたよ。空・・でしたか？」
「そう。あんたの目からみて、俺ってどう見える？教えてよ・・先生」

「そうですね・・・まだこうだ、と言えるぐらいにあなたの事を知りえてはいませんが、ファイル、そしてあなた自身を見た私の感想を述べさせてもらうと、まず、自信家・・それらはあなたの生まれ育った背景、頭脳、そして外見などの混合で成り立っているように見えます。外面的には苦労知らずの坊々・・ですが家庭環境には少々複雑なものを感じますね。
要領は良いほうじゃないですか？軽口を叩いてますが相手の事をよく見ていますね。なかなか気配りもできるみたいですが。」といってちらっと彼の持って来たケーキに目を向ける。

「あー・・それから、とてもつまらなそうですね。なんだか全ての事に対してなげやりなイメージを感じます。ああ、でも三村君に対しては結構興味新々といった感じでしょうか・・違いますか？」

和田は暫くの間、一言も発する事無く私を睨みつける様な目で見ていたがぷっと吹き出して笑い出した。
「ははははは！もう・・・最高だよ・・先生。カウンセラーとかってどんなものかと思ってたけど、ホント面白いね。先生も・・彼女も。俺、半分は冷やかしついでに来たんだけど、結構ビンゴだったな～。俺ってさ、昔っから要領良く何でもできちゃう子供だった訳・・。親の望む通りに進学校いってさ、医学部に入った。金はあるし、このルックスで読者モデルなんかもやっちゃって、いくらでも女が寄

ってくる・・何でも望むものは手に入るのに、いつも空っぽのままなんだ。
何をやってもつまんね～。一昨日別れた女も鬱陶しいとは思うけど未練もなければ愛情も無かったな・・ヤラセてくれる女なんて吐いて捨てる程いるしな。でも先生の言った通り、三村さんだっけ・・？あの女にはちょっと興味あるかも・・ガード固いよね・・あーゆー女落としてみてえ。別れ話以外であんなに女に拒否られるのってまじ新鮮かも・・」

「・・・恋愛はゲームではありませんよ。そんな悪趣味な事にうちの三村君を巻き込まないで下さいね。」と私は釘を刺す。
「あれ・・先生って独身だっけ？彼女の事好きなの？」と和田が身を乗り出して聞いてくる。
「私の事はどうでもいいですよ。それに人の恋愛沙汰に首を突っ込むより、あなたには学ばなくてはいけないもっと必要な事がいっぱいあるでしょう？」
「ああー、もうそんな説教臭いこと言わないでよ。それよりもさ、せっかく金払ってんだからもっと面白い話でもしようぜ・・・そうだな、俺の事はどうでもいいけど、先生の事聞かせてよ。なんでこんな仕事してんの？」

私は彼と話をしながら、ある人物との接点を覚える。かつて関わった事のある彼とよく似たタイプの男性の姿を思い出す。
「私がこの仕事を始めた理由ですか？一概にはこれと言ったものはありませんがきっかけはありましたよ。聞きたいですか・・・？」
「・・・聞かせてよ、そのきっかけってやつを。」

私は一口紅茶を口に含むとゆっくりと飲み干し、彼の目を見つめて微笑んだ。日本人は目と目を合わせて話す事に慣れていない人が多い。案の定、彼も私から目を背けた。

「わかりました、ではお話しましょうか・・・。あれは・・私が高校に入学して間もない頃でしたか、僕の通っていた高校は都内でも有名な進学校で、生徒たちはほとんどが小学校からのエスカレーターでした。高校から編入してきた私の様なタイプは珍しかったのだと思いますが、ある日、声をかけて来た男子生徒がいたんです。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「よう、お前渡部だっけ？他の学校からの新入生だよな？」

私は声をかけて来た男子生徒をまじまじと見つめる・・えっと、この人は確か・・。

「斉藤だよ。斉藤隆文。お前と同じ1年A組の。」私の表情を読み取ったように、彼は笑って自己紹介してきた。

「ああ、そうでした。斉藤君・・どうかしたんですか？」

「お前・・変わった奴だな。先輩とかならともかく別に同級生にまで敬語を使わなくてもいいと思うぞ？」

「・・何か気に触りましたか？私は昔からこういう喋り方なので今更言葉遣いを変えるというのも結構難しいんですが、あまり気にしないで頂けると助かります。」

しばらく呆れたように彼は私をみていたが、そのうち仕方ないといった様子で首をすくめた。

「ま、いいけどさ。お前が色んな意味で目立ってる理由がわかったよ・・。」

「？？私が目立っているんですか？」

「か〜、これだから自覚の無い奴は！超めだってるっつーの。お前が入学してきてから、女達が騒いでるだろうが！その嫌みな足の長さとか・・まったく。」

何が問題なのかまったくわからない・・・私は首を傾げて目の前の男を凝視した。

空7

「まあ、ともかくさ、よろしくな。俺、先生からお前の事、面倒見てやれって言われてんだよ。外からの転入生なんて珍しいしな・・。」

「そうなんですか？それはありがとうございます。よろしくお願いします。」斉藤は照れくさそうに私の肩を叩いた。斉藤は後で知った事だが、クラスだけでなく、学校でも有名人だった。頭脳明晰、スポーツ万能、明るく場を盛り上げるタイプで本当に人気者だったのは彼の方だと思う。何とはなしに気が合ったのか、それからはよく二人でつるむようになった。

日が経つにつれ私も様々な友達ができたが、斉藤とはそれ以上の時間を一緒に過ごしていた。

「俺さ・・お前といるとなんか安心する・・つーか、安らぐ感じがするんだよな。」ある日の午後、図書室の一角で斉藤が私に向かって言った。

「・・・安心ですか？」私は読んでいた本を片手に小さく首をかしげる。

「別に、なんでもねーよ。気にすんな。」そういって斉藤はごまかすように笑い飛ばす。思えばそれが最初に感じた違和感・・引っかかり。

その後も暫くの間は何事もなく、平和な日々が過ぎて行った。そして、二年目の2学期を迎える頃、彼は突如学校から姿を消した。

2学期が始まって1週間が過ぎた頃だったか、放課後、担任に呼び出された。個人面談室の扉を開くと其処には担任の工藤ともう一人女の人が座っていた。誰だろう・・でもなんだか誰かと似ている気がする。

私が椅子に座ると担任が口を開いた。
「渡部、お前確か斉藤と仲良くしていたよな。」
「はい。」
「その・・・お前知らないか？あいつが何か悩んでいたとか・・・。」
何故そんな事を私に聞くのだろうか。斉藤君と仲良がよいとはいえ、彼はずっと小学校からのエスカレーター式の学校に通っているのだ。なにも私でなくても、もっと彼のことをずっとよく知る人がいるのではないか・・と私は考えていた。
「正直わかりません。何かあったんですか？」
担任の工藤はため息をはくと、ちらりと隣の女性を見やった。
「こちらは、斉藤のお母さんだ。」
「斉藤君の・・・？」私はじっとその女性を見る。心無しか青白くうつむいた顔をみて納得する。さっき感じた親近感はこれだったのか。
「実はな・・・ここだけの話なんだが・・・斉藤は今行方不明なんだよ。今日で1週間になる。」
思いも寄らない言葉に私は吃驚する。斉藤が行方不明・・？
「それで・・・、警察には連絡したのですか？」私が問う。
「いや、それは、まだ色々と事情があって連絡はしていないらしいんだが・・・」と担任が言いよどむ。子供が一週間も行方不明なのに警察に届け出ないとはどんな親だ？私は視線を斉藤の母親に戻した。

斉藤の母がおずおずと口を開く。「心当たりは全て探しました。以前にも、一度こうやってふらっと家から出て行った事があったんです。その時は3日ほどで帰って来ましたが、その時は誘拐でもされたのかと警察を呼んで大騒ぎだったんです。結局は違ったのですが・・・。主人の仕事の手前、今大切なプロジェクトを抱えているときなので大騒ぎする訳にも参りません。

それで、隆文と仲の良いあなたにお話を伺いたくて・・・。」

私は疑問に思っていた事を問うてみた。「何故・・僕なのでしょうか？斉藤君はずっとこの学校に通っていて人気者ですよね。私などより、もっと彼に近しい友人がいるのではないですか？」

斉藤の母親は首を振る。「いいえ・・・あの子が学校の事を話したり、友達を連れて来たりということは今まで一度もありませんでした。お恥ずかしい話ですが、私ともほとんど口をきいてくれない状況で・・でも一度、隆文が嬉しそうにあなたの事を話した事がありました。信頼できるいい奴だと・・本当に嬉しそうに・・・。ですからもしかして、隆文の居所も何かご存知なのではと思ったのです。」

私は彼女の思いも寄らない言葉に驚いた。

「・・・わかりました。私も何ができるかわからないですが、あいつの行きそうなところとか、色いろと探ってみます。」

結局その後、暫く3人で今後の事などを話あい、学校やクラスには、斉藤が病欠ということで話を通す事になった。その方が帰って来た時に、余計な心配しなくても良いようにとの配慮だ。

いじめなどの線も考えたが、この1年余四六時中一緒にいてた私が、断言するが、彼はそういったものとは無縁だった。気さくな性格でクラスメートはもちろん、先輩方にも可愛がられていたはずだ。何故・・・彼はいきなり失踪してしまったのだろうか・・・・？

空8

その晩私は必死に彼と話した事、行ったところを思いつくまま、紙にしたためていった。何か彼の失踪について手がかりは無いのか・・・何枚にも及ぶ紙を見つめ考える。幸い明日から3連休だ。心辺りをしらみつぶしに探してみようか・・・。

次の日、朝から僕は彼と一緒に訪れた店、食堂、よく遊びに行った場所などに足を向ける。昼を過ぎた頃、近くのハンバーガーショップで一息つく。

やはり、闇雲に探しても見つかる訳じゃないか・・・やはりもう一度考えてから探した方が良さそうだ。私は手帳を片手につらつらと考える。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーー

ーーなあ、お前さ、小笠原の父島って行った事ある？東京都にあるのにすっげー綺麗なんだぜ。あ〜、あの海もっかい見たいな〜。

ーー海ですか？伊豆や小笠原の方はあまり行った事がないですね。そんなに綺麗なんですか？

ーーああ・・幼い頃、一度行っただけだけどな・・・・・一番奥にあるジニービーチってのが、秘境とでも言うのかな・・・交通の便が悪くて滅多に人がこねーんだ。お前も一度行って見るといいよ、マジ綺麗だからさ。

ーーそうですね、そのうち機会があれば・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーー

私はその記憶にはっとして立ち上がる。もしかして・・・？私はす

ぐに立ちあがると駅へ向かって走り出した。駅につくと駅員に意気込んで尋ねる。
「すみません！此処から小笠原諸島、いえ、正確には父島まではどうやって行くんですか？」
「え？今から父島に行くんですか？無理ですよ。いくら東京都っていっても小笠原まで行ってからフェリーで２５時間もかかるんですよ？」
「２５時間・・・・？そんなにかかるんですか？」困ったな・・・さすがにそんなに遠くてはちょっと探しに行くという程度ではない。
どうしよう・・・先生に伝えてみるか・・・私は公衆電話から先生の自宅に電話をかける。何か思い出したらすぐに連絡をほしいと言われて番号を教えてもらっていた。
手帳を取り出し、一つ一つ番号を押して行く。
プルルルル　プルルルル　プルルルル　プル
「はい、工藤です。どちら様でしょうか？」
「工藤先生、渡部です。」
「おお、渡部か、どうした、何か気がついた事でもあったのか？」
「僕も今日朝から思いつくところは探してみたんですが、もしかしたらと思うところが１カ所あって・・でもちょっと、いやかなり遠いところなんです。」
「どこだ？！」
「小笠原諸島の父島です。」
「小笠原諸島だって？そりゃ・・・随分と・・よし、わかった。一応俺の方から斉藤のおふくろさんに連絡を入れてみよう。しかし何故父島なんだ？」
「以前、斉藤と話していた事があって・・もう一度父島の海が見たいって、、確かジニービーチとかって言ってたと思うんですが。でも、本当にそこまで行っているかどうかはわからないですよ？」
「そうか・・・わかった。すまんな。まあ、また何かあれば連絡を

くれ」
カチャリと切れた受話器のツー　ツーと鳴る音をしばらく聞いていた。それから3日後、斉藤は無傷で発見されたとの連絡がはいった。本当に小笠原諸島にいたようだ。
私は学校が終わった後、斉藤の家を訪れた。斉藤の母親に出迎えられ、2階の部屋へと案内される。
「隆弘、渡部さんがお見えになっているわよ。」その声に返事はない。
電話がかかって来て母親が慌てて下に降りると同時にカチャリと音がしてドアが開いた。
久しぶりに見るやつの頬は赤黒く変色していた。俺を部屋に引きずり入れるともう一度鍵を閉める。最初の言葉は「吃驚しただろ？」だった。
それは、彼が失踪した事に対してなのか、それともその頬の腫れの事なのか、それとも両方なのか・・私はゆっくりと頷いた。

「まさか、見つかるとは思わなかったなあ・・・。基本俺の親って俺の事まったく知らないし、お前が父島の事を覚えているなんて思いもしなかった。」

「その頬、お父さんに殴られたんですか？」

「まあ、これで済んだのは良かったかもしれないけどな・・」そういって斉藤は痛そうに頬をさすった。口の中まで切れているのは本当に痛そうである。

「何故・・・失踪したんです？」私は斉藤君の目を見据えて聞いてみた。私も少し神経が高ぶって怒っていたのかもしれない。彼が何も言わずに姿を消した事を・・・。

空9

「俺んちさ、おふくろと親父再婚してんだよ。親父がおふくろを見初めて結婚して・・俺はその二人が結婚して間もない頃に妊娠がわかって出来た子供だった。おふくろは親父と結婚する前に付き合ってた男がいて、まあよくある話かもしれないけど、どっちの子供かわからない・・。血液型はマッチしてたらしいけどな。俺、おふくろの方に顔が似てるし。でも親父はそんな不安定な俺を大切に育ててくれたよ。

俺も親父に迷惑をかけないように一生懸命学校でも頑張ってた。学校でも、家でも恥をかかせたくないと思ってたしな。ＤＮＡ鑑定をすれば一発でわかる事なんだろうけど・・親父は頑として検査を拒んだ。俺の息子に間違いないってね・・・。中学ん時にさ、ちょっとした出来心で母親に反発して3日ぐらい家をでた事があったんだけど、その時親父がすぐに警察に連絡してさ、誘拐されたのかと思ったって、あの時もすごい怒られたけど、嬉しかった。

それが・・この間さ、2学期が終わった後だったか、偶然見ちまったんだ。おふくろが知らない男に金を渡しているのを。気になってそいつの後をつけてったんだ。薄々嫌な予感はしていたよ。付けている最中も頭ん中で、もう止めろって何度も思った。焦ってたのか、付けてたのがばれてしまって、その男が言うんだよ。酒臭い息を吐いて笑いながら、お前は俺の息子だって・・・。

親父は、精子の数が圧倒的に少なくて子供ができる可能性は宝くじに当る様なものだって。俺が親父の子だって事はありえない・・・そう言われて俺、何がなんだかわからなくなってしまって気がついたら走り出してた。本当に何も考えられなくて・・・唯一、昔親父

に連れて行ってもらった父島の海が無性に見たくなって、溜めてた貯金全部下ろして行ったんだ。

テントと食料品を買い込んで、何もない砂浜でやっと息をついた。こんな所まできてしまってどうしようと言う気持ちとあと、親父にどんな顔して会えば良いのかわからなかった。おふくろがずっと黙っていた事にも無性に腹が立ってあんなやつが俺の本当の父親だなんて信じたくなかった。さすがに1週間経つ頃には食料や水もつきかけて来てたし、いくら人は少ないと言っても9月の海で人目を避けられない。そろそろ潮時だと思ってた頃に島のおまわりさんに職務質問されて参ったよ・・・。まさかこんな所まで連絡が行ってるなんて思わなかった。

帰ってすぐに親父に殴られた・・。何が不満だ?って真剣な顔で聞かれたよ。でも言える訳が無い・・・。」

斉藤の両目から涙が溢れ出した。しばらく何も言わずに黙って聞いていたが、私は彼に言った。

「済まなかったな・・・お前に辛い話をさせてしまって。でも、お前親父さんに、お前の本当に抱えている気持ちを話した方が良いと思う。お前の話を聞いてる限り良いお父さんじゃないか。血の繋がりだけが親子じゃない・・・血がつながっていたって、他人よりも仰々しい家庭はいくらでもある。本当の親子ってのは、斉藤と親父さんが今まで一緒に積み重ねて来た経験や思い出、関係にあるんだよ。」

「そんな・・・簡単に割り切れるものなのかな・・・?」斉藤が嗚咽まじりに小さく呟いた。

「お前、いままで親父さんの何を見て来たんだ?当ってみろよ!お

前の親父なら絶対にお前の気持ちを受け止めてくれると思う。
あとさ、お前のおふくろさんだけど・・・憎く思う気持ちはわからないでも無い。でも人間は弱い生き物だ。おふくろさんだってきっと苦しんだんだと思う。許してやれよ。さっきも廊下で思い詰めた様な顔をしてた。」そう、実際の所、斉藤よりも私は彼の母親の様子が気になっていた。何日も寝ていない様な・・・目の下のクマは以前見たよりも酷くなって頬も痩けていた。

「なんで・・・俺なんか生んだんだよっ！くそう・・・っ」悲痛な叫びが部屋に木霊した。

「・・・生まれて来た事を後悔してるのか？」

「わからない・・・自分でも、この苛立をどうして良いのかわからないんだっ！」
自分の存在を認めて欲しいという叫びなのか、それとも存在を消したいのか・・？それさえも自分自身わからない。何もかもが投げやりな彼のそんな姿を見たのは初めてだった。
どうすれば良いのだろう・・。彼が本当に、本心から求めているものは何なのか・・私はじっと息を殺しながら考えていた。

空１０

しばらく無言の時が過ぎたが、斉藤がまた口を開いた。
「俺・・・ＤＮＡ鑑定受けようと思ってるんだ。」
「え？」私は聞き返す。
「親父は・・・何も言わないけど、本当は俺が本当の子供じゃないって知ってるんだろうな。俺も・・・こんな中途半端なままじゃあ動く事ができない。本当の子供じゃないなら・・・それでもいい。ちゃんと自分で調べて納得したい。まだその後の事はどうするかどうするか、わからないけど・・・。」
斉藤は自分で納得の行かない事については頑として動かない男だった。もし彼が自分でそう決めたのなら、それが成し遂げられるまでは動かないだろう・・・。
「そうか、わかった。斉藤、君の好きにすればいいと私は思うよ。君が誰の子供であれ、私の大切な友人だという事は変わりない。それは覚えておいて欲しい。」

「ありがとう・・渡部」

私は、彼の部屋をでると階段を降りて玄関先へと向かった。斉藤の事はもちろん心配だったが、やはり気になるのが彼の母親だった。階段の下でずっと二階を気遣うように立ちすくんでいた彼女は私を見送る為に玄関先までついてきた。私は立ち止まると、もう一度お礼を言いつつ言葉を添える。

「おばさん、斉藤は、きっと大丈夫です。今は迷ったり悩んだりしてますが、きっと乗り越える事ができます。お母さんも・・どうか彼と向き合って上げて下さい。色んな事情はあると思いますが・・・自分の息子の事を信じてあげて下さい。」

彼女がはっと目を上げ私の顔を伺うように仰ぐ。「ーーー息子はどうして・・いえ、、何かご存知なのですか？」
「彼が何について悩んでいるのかは、本当はお母さんが一番良く知っているのではないのですか？」私はじっと彼女の目を見つめ返した。
視線を彷徨わせながら彼女は落ち着かないようにエプロンの端をいじくっている。

「できれば、一度親子でちゃんと話し合って見て下さい。」
「・・・でも、、あの子は私とは目も合わさなければ話もしない。父島から帰ってきてからずっとあの部屋に籠ったままでて来ないんです。それなのにどうやってあの子と・・・」

「斉藤にも色々とわだかまりがあるみたいですが・・・、おばさん、ひとつ聞いて良いですか？」
「えっ、ええ」
「斉藤は、一体誰の子供なんです？」
さあっと音を立てるように彼女の顔が真っ青になる。硬直した彼女を見て後悔した。しまった・・赤の他人の私が簡単に突っ込んで良い問題ではない。慌てて言いなおす。
「すみません、余計な事聞いてしまいました。忘れて下さい。本当にすみませんでした。失礼します・・・。」礼をして立ち去ろうとする私を彼女が呼び止めた。

「まって！やはり、あの子は・・隆文は知っていたのね。あの男の事を・・・」
「・・・・。後を付けたと言っていました。」
「そう・・・だから・・・。ごめんなさい、貴方は悪くないの、そんな顔しないで頂戴。只でさえ私の所為で隆文を苦しめているのに、

貴方にまでそんな顔をさせたらきっと隆文は私の事を許してはくれないでしょうね・・。隆文に事情は聞いたのかしら・・・私と斉藤の父親の事？」

「ある程度は・・・」

「実際のところね・・・母親の私にもわからないのよ。おかしいでしょう？自分で生んでおいてこんな事を言うなんて・・。別れた前の旦那は本当に最低な人だった。アルコール中毒で、酔う度に私に手を上げて・・あの日も、彼に殴られて公園で佇んでいる私を助けてくれたのが今の夫だったのよ。とても親身になって面倒を見てくれたわ。そのうちだんだんと私も彼に惹かれて行って・・惹かれて行く度に離婚を考えたけど、そんな事を言えばまた殴られるだけ、怖くて何も言えなかった。

そうこうしてる間にある日いきなり髪をもって部屋中ひきずり回された挙げ句ナイフで脅されたのよ。お前、俺に内緒で浮気をしているだろうって。確かにその時、私は斉藤さんに惹かれていたけどやましい事は何も無かった。必死で違うって否定したわ。でも彼は斉藤さんの事を知っていて、しかも私の事で彼に慰謝料を請求したの。もう情けなくて悲しくて、どうしようもなかった。斉藤さんは私を離婚させることを前提にあいつに大金を支払ったのよ。・・・でも最後にあの男は私をボロ雑巾の様にナイフで脅しながら犯して去って行った・・・。」

空11

「ーーーそれから私は、斉藤さんのお宅に転がり込んだ。前の夫との離婚が成立しても1年は彼と結婚する事ができない。それでも私は幸せだったんです・・・。あの日私の妊娠が分かるまではっ！妊娠が分かってすぐに頭をよぎったのは、あの別れる最後の日の事だった・・・。

私と斉藤さんは一緒に暮らして間もない頃に結ばれて・・だからきっとこれは斉藤さんの・・私の愛する人の子供なんだってずっと思い込もうとした。

生まれてくるまで、怖くて怖くて・・・もしあの男の子供だったらって何度も考えては打ち消してそして臨月を迎えた。

生まれて来た男の子は小さくて・・・誰に似てるなんてわからなくて、でも病院に駆けつけた斉藤さんを見て、看護婦が一言、おめでとうございます！お父さんにそっくりですよって言ったの。嘘でもその言葉が嬉しくて、斉藤さんもこの子は俺の息子だと言って認知してくれました。

それから暫くして彼と結婚しました。これ以上ないぐらい幸せが続いて・・・

でも、ある日、彼が倒れたと連絡があって病院に行った時、そこの病院の先生から信じられない事を聞いたんです。その病院は彼が幼い頃から通っていた病院で、彼がある検査を受けていた事を知りました。精子の検査です。その時、夫が倒れた理由は過労による睡眠不足だったのですが、その医者は私が、彼のその病気の事を知っていると思って話したんです。

ショックでした。頭をトンカチで割られた様な・・・そんなショックで、、でも夫には気付かれないよう、精一杯世話をして、数日後

彼は退院しました。

それから、結局詳しい事を夫に聞く事もできず、月日が流れて、、あの人は相変わらず隆文の事を我が子のように可愛がって、ことあるごとにこいつは俺の子だって嬉しそうに笑っていました。宝くじに当る様な確立・・・そんな確立で本当にあの子が生まれたのか、それともやはり前夫の子なのか・・・大きくなるにつれ顔立ちや仕草など私にそっくりになってきて、それでもどこか夫と似ている部分を探そうと必死でした。

そんな時、、偶然前の夫に会ってしまったんです。すぐに逃げ出しましたが捕まってしまって、根掘り葉掘り今の生活の事について聞かれました。また殴られると思うと怖くて、早く逃げだしたい一心でその時余計な事まで喋ってしまっていた・・・。

私の様子に何か不審な所を感じたのかそれからうちの周りをうろつくようになりました。息子がいる事もばれて、息子に近づかないでって懇願したら、また切れられて髪を引っ張って怒鳴られて外から見えない所を殴られました・・・・。

そのうちどこから調べたのか、隆文は自分の子じゃないのかって言い出して。その後はもう泥沼の様でした。硬直した私をみて軽薄そうに笑って言ったんです。ばらされたくなかったら金を用意しろって。それから、ちょくちょく金が無くなっては私の所にきて金をせびるようになって、こんな姿を息子に見せる訳にはいかない・・・隆文を自分の子だと信じている夫にも言えなくて・・でもだんだんせびるお金の金額がエスカレートしてきました。

もう自分のお小遣いで騙せる範囲じゃない・・そう思って最後にまとまったお金を用意して話をつけに行ったのが、最後・・・その時に隆文に見られていたんですね・・・・。」

話終えると斉藤の母はぐったりとその場にしゃがみ込んだ。慌てて支えようと近づいた所で彼女は意識を手放した。連日の心労と過労、よっぽど疲れていたのだろう。抱き上げて見ると斉藤の母はとても軽かった。

急ぎもう一度家に戻り、斉藤を呼ぶ。倒れた母の姿をみて彼は一瞬悲痛な顔をして顔を強ばらせた。「斉藤！ぼーっとしてないで手伝ってくれ。布団はあるのか？ベット？わかった、そこに寝かせて・・そう、ゆっくり・・。」

彼女を寝かせると私は１１９番に電話して救急車を呼ぶ。どうやら熱もあるようだ。素人判断では怖い。電話をかけ終えると、私は斉藤に言った。

「しっかりしろ！お前がしっかりしなくてどうするんだ！父親が居ない今、彼女を支えてやれるのは息子の君しかいないんだ。」

「・・・・・わかってるっ！」彼は立ち上がって台所へ行き、氷嚢から氷を取り出して持って来た。タオルを湿らせて氷を包みそれを彼女の額におく。

しばらくするとお馴染みの音が近くまで聞こえてきて、救急車が到着した。私は一瞬迷ったが、斉藤を連れて一緒に救急車に乗り込んだ。

病院までの道すがら夕焼けがやけに赤く染まっていたのが印象的だった。

空12

病院につくと私は、斉藤からお父さんの電話番号を聞き出し連絡を入れた。まだ会社をでていなかったので直接病院に来るという。私は手短に状況を説明してから電話を切った。
人様の家庭の事情につい首を突っ込んでしまった形になったが、今更後戻りはできない。病室には斉藤が付き添っていた。
「斉藤、お母さんの様子はどうだ？」
「薬が効いているみたいだ。よく寝ている・・。」確かに病室のベットに寝かされ点滴を受けている斉藤の母親は、さっきよりも呼吸が落ち着いているようだった。

「済まなかったな・・渡部、なんか色々と巻き込んじまって。」

「気にするな。お前の親父さん、会社から病院へ直接来られるそうだ。斉藤、この際だ、君の抱えてる事や、お母さんの抱えている事も含めてちゃんと家族で話し合った方が良いと思うぞ。こんな事、他人の私が言うのもどうかと思うが、君とお母さんの様子を見ているとすれ違いが多そうだ。君の気持ちもわかるが、もう少し、お母さんの気持ちも考えてあげたらどうだ？家族だからこそ、腹を割って話す時も必要なんじゃないかな・・・と思う。」

「そうだな・・確かに俺も自分の事ばっかり考えて今までおふくろの側に立って考えてみた事は無かったな・・おふくろがあの男に金を渡していたのも何か理由があるんだろうか・・・。」

私は先ほど斉藤の母から聞いた話を斉藤に話すべきかどうか迷った・・だが、他人から聞かされるよりは本人の口から詳細を聞いた方が、衝撃も大きいかもしれないが、より真実が見えてくるかもしれない

と思い、私は何も言わなかった。

暫くしてから、斉藤の父親が到着した。簡単に挨拶を済ませ、私は最後に斉藤に目配せをすると病室をでて家へと帰った。

それから2週間後、斉藤が学校へと戻って来た。以前ほど目立った行動をとる事は少なくなったが、表情は随分と穏やかになっていた。放課後、私は斉藤に呼び出されて学校の屋上へとやってきた。

「今日1日、見ていて思ったが、良い表情をするようになったな、斉藤」

「俺、お前に本当に感謝するよ、渡部・・・。お前がいなかったら、俺はきっとおふくろや親父と向き合ってちゃんと話をする事は無かった。

俺な・・・本当に親父の子供だったよ。病院で親父ときちんと話しあって、DNA鑑定を受けたんだ。結果がでて吃驚したのは俺だけじゃなかった。親父は俺とおふくろを抱きしめて子供みたいに泣きじゃくっていた。親父も本当は怖かったんだって、そんときに気付いた。おふくろとも、ちゃんと3人で話し合ったよ。もっと早くにこうしとけば良かったとも思ったけど、俺も今じゃなかったら、もし本当に親父の子供じゃなかった時に、どう対処して良いかわからなかった気がする。まあ、そうはいっても結局は結論がでたから言える台詞だけどな。」そういって斉藤は朗らかに笑った。

「おふくろを脅していた男は警察に捕まったよ・・・。あんな奴にずっとおふくろが苦しめられて来たなんて、俺は気付きもしなかったんだ、最低な息子だよな・・。でも、俺もうちの両親もお前にはすごい感謝してる、今度、おふくろ達が礼をしたいからお前を連れてこいってうるさくてさ、渡部の都合のいい日、教えてくれよな。・

・・・でも、お前ってさ、なんて言うのか、こういう、なんて言うんだっけ？カウンセラー？みたいな仕事向いてると思うぜ。
なんかお前と話しているとリラックスするんだよ。なんか心にある汚いものもわだかまりも全て吐き出してしまうって言うかさ・・まあ、お前には迷惑だったと思うけど、おふくろも似た様な事言ってたぜ？」

それから、高校を卒業した私は医学部に入り、確かに彼の言った道に進む事になったんです。まあ、人間観察は昔からの趣味でしたしね・・・こういう風に言ったら語弊があるかもしれませんが。ですが彼と彼の家族に出会った事が私が心理学という世界に興味を持つきっかけになったのだと思いますよ。え？斉藤君ですか？　両親ともすっかり和解して、今では結婚して子供が二人もいるんです。

話終えると私はもう一度、和田の瞳を捕えてにっこりと微笑んだ。
「私の話は、こんな所ですか・・・。楽しんで頂けましたか？和田さん？」

「・・・・そうだな、まあなんだ、よくありそうな話ってやつ？」
そういいながら笑っているが彼の目は全然笑っていなかった。何を考えているのだろう？

「そうですか、それで、今度はお聞かせ願えるのでしょうか・・？
貴方が仰っていた青少年の悩みと言う物を・・・？」

空13

「・・・次回、話してやるよ。今日は先生の話でほとんど終わっちゃったしな。」確かに時間を見ると1時間を過ぎようとしていた。
「そうですか・・ではお楽しみは次回までとっておきましょう。」
「まあ、楽しいと思うかどうかはわかんねーけどな。でも、先生の同級生が言ってた事、少しだけど分かる気がする・・。確かに妙な雰囲気持ってんだよな～・・・・・」そういって珍獣でも見るようにじろじろと見つめられる。
「妙な雰囲気ですか？そんな事を言われたのははじめてですが・・」
「ん～、よくあるじゃん？フェロモンみたいなもん？なんか変な香水でも付けてる？」
「・・・何か匂いますか・・・？」部屋にはリラックスを促すアロマオイルというものが三村君の趣味により焚かれているが、私は一切香水の類いは付けないのだ。
「いや、別に。何も匂わないけどね・・・例えだってば、まあいいや、俺南口の入り口で女待たせてるからそろそろ行くよ。来週もこの時間で良いんだっけ？」

「え～っと、来週ですか？じゃあ、受付で三村君に確認してもらえますか？」
「分かった。じゃあ、またな、先生、来週も楽しみにしてるよ。」
「はあ・・・」と私は曖昧な返事を返す。通常、カウンセリングでは、まず相手の話を聞いて返答するのが常設だが、彼の言動や態度には確かに興味をそそられる。振り回しているのか、振り回されているのか・・・ともかく興味がつきない。
受付で三村君をからかいながら支払いを済ませる彼を遠目に見ながら考えていた。からかわれて怒ってはいるが、三村君の態度も大分軟化したように見える。やはり先ほどのケーキが功を奏したのだろ

う。侮りがたい・・というかやはり面白い男性だと思う。今度はじっくりと彼の話を聞いて見たいものだ、そうそう、先ほど女性を待たせていると言っていたか・・。
彼と三村君、そして私が出会ってからまだ1週間。元々の事の起こりは彼の女性問題からはじまったのだが、もう新しい女性と付き合っているのか・・。もてると言っていたのは確かなようだ。節操がないのか、興味が無いのか・・？出て行った彼を窓から眺めていると三村君がつかつかと歩いて来て言った。

「センセ、今度の彼との個人カウンセリングは来週の火曜日の午後2時からですよ。一応いつも通りスケジュールに入れときますが、センセも忘れないで下さいね。」
私はちらりと三村君を見やると、笑って聞いてみる。
「そういえば、三村君、随分和田さんと打ち解けたようだね。最初はあんなに嫌がっていたのに。」と、じろりと彼女に睨まれる。
「センセ・・・私はあくまでも業務的に彼に接している訳で打ち解けた訳ではありません。大体私はあーいった軽い男の人は苦手なんです！」

「ふうん、そうなのかあ。でも向こうは君に興味があるようだけどね。」
「無理ですね。」一言で切る。
だが、あの和田という男は中身はともかく、見た目などは今時のもて男というやつではないのだろうか？一般的にあーいったタイプがもてるというのなら、彼女はどんな男性が好みなのか・・聞いてみる事にした。
「三村君はどんな男性が好みなんですか？」いきなり質問したのが悪かったのか、三村君が私の顔を見て目を白黒させている。
「な・・なんなんですか？！センセ、いきなり」
「嫌・・・和田さんのようなタイプがもてるタイプだと聞いたんだ

が、君はまったく惹かれている様子もないし、としたらどういったタイプが好みなのかと思って・・」

「・・またいつもの、何でも知りたがりの癖がでたんですね、センセ。先ほども言った通り、ちゃらちゃらしている男は好きじゃないんです。私が男性に求めるのは・・こう、なんというか1本筋の通った芯の強さの中に垣間見える優しさが・・って何を言わせるんですか！」

「あれ・・説明してくれるんじゃなかったんですか？」
三村はしばらく顔を赤くして私の顔を見ていたが、しばらくするとため息を付いて一言言った。
「もう、いいです！もうまったく違う事ばっかり話してこんなに時間が過ぎちゃったじゃないですか！もうすぐいつものクライアントさんが来られる時間ですよ！応接室に置いてある紅茶とケーキのお皿、片付けますから・・・！」

ふむ・・・なぜだかわからないが怒らせてしまったようだ。どうも最近三村君のご機嫌を損ねる事が多い。だが、女性の心と言う物は男性のそれよりも遥かに複雑で難解なのだから仕方あるまい。私は自分でそう納得すると。彼女を手伝いに応接室へと戻った。

空14

何事もなく1週間が過ぎ、和田との2回目の個人カウンセリングの日を迎えた。
颯爽とオフィスに入って来た和田は片手に大きな花束を抱えている。オフィスの壁のしきりは一部マジックミラーになっており、受付の様子がここからでも伺える。
ピンクと白の薔薇を基調にした花束を三村君に押し付けると彼は応接室の扉を開いた。
「こんちは、先生」
「こんにちは、和田さん、綺麗な花束ですね。三村君にですか？」
「え？ああ、ここから見えるんだ？はは、あれ、今日の撮影で使ったのを貰って来たんだよね。どうせ彼女、持って帰る気も無いみたいだし、良かったらこのオフィスにでも飾っといてよ。」
「へえ、そうなんですか？それにしても今日はなかなかファッショナブルな出で立ちですね。」
和田は、これから高級レストランにでも行くのか、それとも一歩間違えればホストの様な白いスーツに身を包んでいる。
「ああ、だから、そういうコンセプトだったんですよ。今日の撮影。ま、これは俺の自前だけどね。アルマーニのスーツ」といいながら前をひらひらさせている。

「まあ、ともかく座って下さい。前回のお話の続きを始めましょう。」そういって私は彼にソファーに座るように促した。
彼は椅子に座って足を組んだが、私の方をじっと見て口を開く。「先生・・って結構日本人離れした体型してるよね。俺も足長い方だけど目の前でそうやって足組まれるとちょっとむかつくなあ・・。」
「は？」
「ああ、いいのいいの。気にしないで。でさ、先生、俺早速悩みが

あるんだけど聞いてくんない？」和田が身を乗り出して聞いてくる。三村君がコーピーポットを応接室に持って来てくれていたので、今回は私がコーヒーをついで彼に手渡しながら頷いた。
「もちろん、良いですよ。お話になってください。」

「俺さ・・・なにやってもつまんねーんだよ。こうやりがいがないってか、生き甲斐がないっつーか。前にも言ったっけ？俺って小さい頃から頭良かったからさ、大体何でも難なくこなして来た訳よ。別にこれと言った目標もねーし、親父達が望む高校、大学に進んでさ。
ある程度勉強こなしてたら親は何も言わない。別にバイトなんてしなくても金も使いたい放題。やることやってりゃ、うちの親は放任主義だからな～、あ、でもおふくろはちょっとうるさいか・・・口酸っぱく昔から、貴方はこの病院の跡継ぎなんだからって言ってたな・・まあどうでもいいけど・・。

大学受験終わって、大学に入ったら、何か変わるのかと思ったけど、相変わらず何も見えて来ない。ほんと面白くもない毎日で飽き飽きしてんだ。女と付き合っても似たり寄ったりなの多いしさ。俺に近づいてくるのってほとんど、顔か金目当て、でなければ雑誌で見ました～とかって近づいてくるのを適当に食って、うるさくなってきたら即終了。簡潔だろ？
あーでも、三村ちゃんはちょっと反応違うよね～。あれはかなり俺としては面白い物件だと思ってんだけどさ・・。」

「三村ちゃん・・・ですか。まあ、それは今は置いておいて、和田さん、男性の友達はいらっしゃらないのですか？」
「いるぜ？ダチなら、、いっぱい、名前も覚えてないのが多いけど・・」
「それって本当に友達なんですか・・？」私は少し呆れたように聞

き返す。
「ん～、ダチなんじゃねーの？今時青春って訳でもねーし、普通に飲みに行ったりカラオケ行ったりするのは結構いるぜ？」
「でもまあ、そういったものも含めて退屈だと、人生に生き甲斐がないと言う訳ですか？」
「そう、俺って空っぽな訳よ・・此処んとこが・・」といって人差し指で軽く胸を叩く。「今までもさ、女と別れる度に、最低だとか、心が無いとかって言われて来たけど、マジその通りだと思うんだよね～。別れる時とか、別にうざいだけで、悪いとは思わねーし、メンドクサイし、なんの感情も湧いてこね～。こういうのってなんかの病気？」
「一概に・・病気とは判断できませんよ？最近はそう言った無気力な方達も多くなってきましたからね。まずはそういう風に至った原因から考えてみませんか？」
「原因・・？」
「ええ、だって、生まれた時から無気力な子供なんていませんよ。もし子供でそう言った子がいるなら、それはほとんどの場合、親の責任です。もちろんそういう病気の子もいますが、貴方はそういう風には見えませんからね。遡って一緒に考えてみましょう・・・」

空15

「・・・ってもどうすればいい訳？」
「そうですねえ、よく、幼稚園や小学校の低学年で、将来大きくなったら何になりたい？っていうような質問ありませんでしたか？和田さん、小さな頃は、何か夢がありましたか？」

「ああ、確かにあったなあ・・そんなの。でも俺の場合、物心ついた時からばあちゃんや母親にお前は将来父親の跡を継いで医者になるんだって、そればっかり言われてたからな・・他の事は考えなかった。たしかお医者さんになるとかって答えてたと思うぜ。」

「なるほど、つまり幼い頃からもう既に医者になる為のレールを敷かれていたという事ですか・・。」大きな会社や個人病院ではありがちな事だ。子供の為だと表向き理由をつけたとしてもそれは結局自分達の自己満足でしかない。子供に選択を与えないようにコントロールして育てて来た訳だ。

「で、小さい頃は本当に医者になりたかったのですか？」私は重ねて問う。
「ん～、どうだったかな・・・。そんな事も考えもしなかったかも。ただ漠然とああ、自分は医者になるんだって思ってたぐらいで。」和田はじっと考える様子だ。

「本当に幼い頃からマインドコントロールされていたのですね・・・今更言っても仕方ないですが、今の貴方の性格を形作った一因はそこにもありますね。もう少し色々と考えてみましょう。」

「ご両親と、あと祖母と住んでいると言ってましたね？仲はどうな

んですか？夫婦仲や祖母との関係は良好ですか？」
「夫婦仲はどうなんだろうな？昔はしらねーけど、親父も忙しくて外に女なんか囲ってる暇ねーだろうし・・、おふくろもほとんど家にいないしな。ばあちゃんは・・俺や弟には良いけど、おふくろとの仲は最悪だな。まあでも嫁、姑なんてそんなもんじゃねーの？家だけに限った事じゃねーだろうし・・。俺らの目の前でもよく昔から喧嘩してたからな。」
「おばあさんはまだお元気なんですか？」
「じー様は俺らが生まれる前に死んだらしいけど、ばあちゃんは元気だぜ。ありゃ、まだまだくたばりそうにないな。おふくろには残念だろうけどさ。」
私は少し眉をひそめながら彼の話を聞いていた。話を聞く限り、和田さんが幼い頃からいつも家庭の中で争いがあったであろう事が伺える。

「そうですか。家庭内のいざこざを目のあたりにして、どんな感情がありましたか？例えば、悲しい、腹立たしいなどといった感情はありました？」
和田は暫くうつむいて考えていたが、静かに話し出す。「確かに・・・小さい頃はそういうのを見てるのが嫌だったかな・・。でもそのうちそういうのがうざいって思う様になって来て・・それから・・・何も感じなくなった・・・。」一瞬和田自身、自分の言葉に驚いたように息を飲む。（そうだ、俺はいつからあの日常の風景を見て何も感じなくなったのだろう・・）

私は、そんな和田さんの様子を見ながら、ゆっくりと話し出す。「きっと、子供心に両親と祖母のいざこざなどを見ているのが辛かったのではないですか？そういうものを見たくない、聞きたくないと思っている間に、貴方は感情をシャットアウトして行く・・・何も感じなくなれば辛くないですから・・・？」

しばらくの間黙り込んでいた和田がもう一度口を開いた。
「・・・わからない。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない・・・。」
私は彼にコーヒーを勧めながら、少しブレイクを置く事にする。一口、コーヒーを口に含んだ和田は思いっきり不味そうに顔をしかめた。
「何コレ・・・。苦いにもほどがあるだろ。」
「三村君が入れてくれるコーヒーはいつもアメリカンとは程遠いシロモノなんですよ。でも慣れると結構おいしいですよ。」私はにっこりと微笑んで、自分もコーヒーに口をつける。
ぷっと和田が吹きだして私の方を見て言った。「やっぱし、先生って変わってるよな。三村ちゃんもかなりキテルけど、この事務所って先生と三村ちゃんだけでやってんだろ?他の人見た事ねーしな・・・。三村ちゃんと先生ってどーゆー関係なの?」
「ほらほら、話題がずれてますよ、和田さん。私たちの事に興味を持ってくれるのはまあ、良い事ですけど、まずは貴方の心の問題が先でしょう?」
「っちぇ、乗ってくれねーな。じゃあさ、後でまた教えてよ!」
「まあ、機会があれば・・」と私は何気なしに返答したが、それが後々思いも寄らない結果を生み出すとは、その時の私は考えもしなかった。

空16

一服すると、また私たちは話を始めた。「和田さん、趣味は何ですか？」

「・・男に趣味を語って聞かせるってなんかアレだな・・・。趣味ねえ・・ダチと遊びに行ったりする中で大抵の事はできっけど、別に俺自身が自分からしたいとか、やりたいってのは無いなあ・・」

「そうなんですか？例えば、音楽に熱いとか、サーフィンに凝ってるとか、何か、ものを集めているとかそういうものも一切ない訳ですか・・？」

「あんまし興味ねーな。大抵の事はそこそこ出来るし・・ものは必要だったら買えば良いだけの話だろ。」

「でも、和田さんは見た所、服装などにはかなり気を使ってますよね？あと香水なども、それはあなたの興味のうちには入らないのですか？人に見られる事を意識しているからこそそういった洋服を着ているのでしょう？」

「ああ～、まあな。一応モデルとかやってるし、確かに服装とかはまだ気ーつかうか。でも俺の服ってほとんどスタイリストとかが用意したものをそのまま買い取ってる場合が多いからな、別に俺の趣味がどうこうって訳じゃないぜ？あと、こういったスーツなんかも親父に連れられてパーティーに顔出すからおふくろが勝手に仕立てに出してんだよな・・」そういって和田は自分のスーツを見下ろす。

「なんていうかさ、そういう夢中になれるもんがないんだよ。最初にも書いといただろ、空っぽだって。」

その後、しばらく話をしていたが、帰る間際、私は彼にひとつの提案を出した。

「和田さん、今度の日曜日って何してますか？」
「別に・・・これといった予定は入ってないけど・・？」
「じゃあ、私と一緒に来て欲しい所があるんですが、ご一緒して頂けますか？」
「何処に？」
「ふふ、それは当日までの秘密です。そうですね、朝１１時に武蔵野駅前で待ち合わせませんか？」
「武蔵野・・？なんでそんな所に行くんだ？」しばらく和田さんは私の顔をじっと見つめていたが、最後にはため息をついて言った。
「わかったよ、俺、日曜のそんな時間帯普通まだ家で寝てるぜ？しかも何げに遠いし・・・。」

「まあまあ、楽しみにしてきてください。」そういって私はにっこりと彼に微笑んだ。
日曜日にあう約束をして、彼は受付で支払いを済まし、事務所を出て行く。私はそんな彼の様子を窓から見送りながら、ある考えを巡らしていた。

そして、日曜日、私は予定の時間の１５分前に駅につくと、駅のベンチに腰掛け、彼を待つ間趣味の人間観察をしだす。何にも興味が持てない、空っぽだと言い切る彼の顔を思い出しながらゆっくりと煙を曇らす。
「空しいなあ・・・色々な諸事情があろうとも、この世界、いや日本もまだまだ捨てたものじゃない。あれだけの素質を持っていながらそれをちゃんと使わないのはもったいない・・・」小さく呟く。その声に返答するものがあった。
「何がもったいないって？」目を上げるとラフな格好をした和田が立っていた。シンプルだが質の良さそうなＴ－シャツとジーンズ、某有名ブランドのスニーカーが眩しい。

「意外に・・・早かったですね。」私はちらっと腕時計をみてから彼に微笑みかけた。
「ああ、まったく・・。日曜に早起きしたのって何時ぶりだよ・・。で、今日はどこか面白い所に連れてってくれるんだよな？期待してるぜ？」
「そうですねぇ。まあ・・・期待していて下さい。では、そろそろ行きましょうか。タクシーで行っても良いのですが、歩いて２０分程なので、歩いて行きませんか？」

「わかった。」
「そういえば、今日は弟さんはどうされているんですか？」私は歩きながら彼に尋ねる。
「んー、今あいつは高３で大学受験前だからな。勉強でもしてんじゃねーの？最近あんま顔あわせてないし・・」
「弟さんも、医学部に進まれるのですか？」
「さあ・・・どうだろうな。一応親は俺が跡継ぎだと思ってるけど、あいつにも勉強の事ではうるさく言ってたからな、やっぱり医学部に進むんじゃねーか？」
「ふむ・・弟さんの事についてもあまり興味がないんですね。」
「いや、別に嫌ってるとかって訳じゃないぜ？てか、この年で、弟に興味ありありってかなり気持ち悪ぃし、ありえないだろ？」
「まあ、そう言われてみればそうですね。」たわいもない話をしつつ歩いていく。道ですれ違う女性達がちらちらとこちらを見ているのが分かった。
「なるほど、和田さんって、やはり目立ちますね。もてるというのも分かります。」
「はあぁ・・・？」和田は呆れてこちらを振り向いた。
「よく言うぜ、半分は先生に見とれてんじゃねえの？ほら、あそこにいる女なんかも完璧先生の方みてるじゃん。」
「・・そうですか？」

「自分の事わかってないやつってホントいるんだな・・・」暫くすると、お目当ての建物が見えて来た。

空17

見えて来た建物は大きな建物ではあったが、会社のビルと言った様なものではなかった。
「ここです。」と彼が指を指した先には、「ポープ敬老園」と書かれている。
「ここって・・・老人ホーム？」和田は目を剥いて私に尋ねる。
「そうですよ。こういった施設にくるのは初めてですか？」
「・・・てか、期待させといて老人ホームって・・」
「おや、きっと楽しいと思いますよ。まあ、ともかく一緒に入りましょう。」私は和田の背を軽く押しながら建物の中に足を踏み入れた。

最初はぶちぶちと文句を言っていたが、元々彼も気が悪い方ではない。少し立つと興味ありげに行き来する老人達の姿を見ていた。
「さてと、お昼も近いので、ここのカフェテリアに行きましょう。ここのカフェテリアは外来者でも食券を買って食事することの出来るシステムになっているんです。色々なメニューがありますよ。しかも安くておいしいんです。」

私たちはカフェテリアでそれぞれ自分の好みにあった食事をオーダーして、空いている席へと腰を下ろした。
「ねえ、先生、なんで俺をここに連れて来た訳？全然理由が分かんないんだけど・・・」
「そうですか？まあ、そのうち分かりますよ。」そういって私はにっこりと微笑む。しばらくすると、頼んだ特製オムライスと焼き魚とけんちん汁セットが運ばれて来た。
長く祖母と暮らしている為か、彼の選んだ食事には少し驚いたが、彼は黙々と箸を動かしている。「おいしいですか？」と私は聞いて

みた。

「ああ、結構うまい。」そして私の方を見てにやっと笑うと言った。

「意外？俺結構こういう煮物とか焼き魚とかそういったもん好きなんだ。おふくろは昔から外にでてて、食事はばあちゃんが作ってたからな・・。」

「そうなんですか？お母様は、何かお仕事をされているんですか？」

「ん～、服飾デザイナーやってる。ばあちゃんはそれも気に入らないんだよな～。」

「服飾デザイナーですか・・・。それは初耳でしたね。ああ、それで貴方がモデルをされるきっかけになったのですか？」

「いや、それとはまったく関係ねーよ。」

「そうですか・・」私たちが話していると、カフェテリアでひと際大きな声が響いた。

「渡部センセ！うわあ、今日も男前ですやん・・あれ、一緒におる子もかっこええなあ」

やって来たのは７０歳ぐらいのおばあちゃんだった。

「お久しぶりですね、佐藤さん、お元気にされてましたか？」私はにっこりと微笑んで挨拶をかわす。

「いややわあ、先月逢ったばっかりやん、そんな１ヶ月やそこらでかわれへんで～！ははは」

俺はいきなり現れた関西弁を喋るおばあちゃんをあっけに取られて見ていた。白とピンクの花柄のスーツを着こなし、これまたピンクのパンプスを履いててまるで若者のように頬を染めて活発に笑う。老人といえば、うちの祖母もそうだが、着物を着ているか、暗いイメージの洋服を着ている印象しかなかった俺は驚いて彼女を凝視した。

「佐藤さん、紹介しますよ。この方が電話で話した和田さんです。

どうですか？佐藤さん好みの良い男前でしょう？」

「なにいってんの！センセだってまだまだいけてますやん？センセの事務所にいてはるあの子とはどないなってるん？もうセンセもええ年やねんからはよ結婚せななあ。」

「はは、佐藤さん、相変わらずキツいなあ。その辺は勘弁してください。」

「そうなん？まあ、ええわ、今日はこの子に免じてやめといたる。そんで、この子があんたの言ってた子なんやなあ？」そういって老女はじっと俺の目に視線を逢わせて来た。初対面の老婆にいきなり挑まれるように目を射すくめられ俺は一瞬思考が停止する。

「ああ、ええ顔しとるな。まだまだ捨てたもんやあれへんで。坊ちゃん、フルネームはなんていいますのん？」

「え・・ああ、、和田・・健司だけど・・」

「ふうん、健司かあ、ええ名前やな。ほな暫く今日はうちとのデートに付き合ってもらおうか」

そういって老婆はにやっと笑って俺の手をとった。

空18

「え？ちょ、ちょっと！」腕を引っ張られて歩いて行く和田さんを見送りながら私は軽く手を振る。「じゃあ、５時までには戻って来て下さいね！」

引きずられて行く和田の悲鳴を聞きながら私はにんまりと笑った。佐藤さんは私がボストンにいてた頃にお世話になった方だった。アメリカ人の旦那さんと御結婚され、長年をアメリカの地で暮らした彼女の人生は数奇でとても興味深いものだった。彼女は私の患者ではなかったが、ことあるごとに私の事を気にかけてくれていた恩人の一人だ。

昨年、ご主人を亡くされ、一人日本へと戻って来られ、このホープ敬老園に入られたが、彼女のポジティブシンキングと明るさに、随分ここに住んでいる老人達が力付けられていると言う。

実のところ、彼女は本当にすごい人だった。戦時中に出会った元アメリカ人の旦那と結婚し、アメリカに移住し、様々な困難を乗り越えて３人の子供達を育て上げた。そして６０歳になった彼女はなんとアメリカの大学を受験する為の試験を受け、見事パスし、大学生となった。その当時、地元では随分と話題になったものだった。なぜ、６０歳になってから大学へ入学しようと思ったのかと聞かれた時、彼女はこう答えたという。

「あら、新しい事にチャレンジする事に年は関係ないでしょ？子育ても一区切りついて、皆それぞれの生活を始めた。私、高卒ですぐにお嫁に来ちゃったからずっと大学に憧れていたのよ。

これからは学生として、また新たなライフをゲットするわ！」

その言葉通り、彼女は大学でコミュニケーションを専攻し、多くの若者達と友達になって影響を与え、４年後に卒業した。それから暫くの間は地元で様々な活動に携わってきたが、昨年、夫が亡くなら

れた事をきっかけに、日本へ帰ってくる決心をされたそうだ。
とはいっても、彼女の３人の、娘、息子はアメリカで結婚して、孫もいるのだから、ちょくちょく、日本とアメリカを往復しているらしいが、ともかくバイタリティー溢れる魅力的な老女だった。アメリカの大学で若い沢山の友人を作り、人生を楽しんで来た彼女から、きっと何かを得る事ができるのではないかと私は考えたのだ。

案の定、彼はすぐに彼女のペースにはまり、連れ去られて行った。
今頃は楽しいデートをしている事だろうと私は微笑んだ。彼らが帰ってくるまでの間、私は幾人かのおばあさん達の話し相手をする事にしよう・・と立ち上がりカフェテリアを出て行った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

和田は自分の腕を組んで歩く老女を奇異な目で見ていた。今まで沢山の女と付き合ってきたが、さすがに老女に腕を組まれて歩いた事はない。周りからも好奇の目で見られているのが分かる。最初は振りほどこうかとも思ったが、何故か手を振りほどく事ができず、老女に引っ張られたまま、今に至っている自分が信じられなかった。
「ほれ、そこのカフェに入ろうか？なかなかええ感じの店やんなぁ。やっぱりこういう所は兄ちゃんみたいな男前とくるに限るわ。といってもうちの元旦那には負けとるけどなぁ。」

元旦那という言い方に引っかかっておずおずと聞いて見る。「ばあちゃん、佐藤さんっていうんだっけ？旦那さん、どうしたの？」
「死んでもうた・・まあうちより１０も年上やったさかいな、それでも早く死んでしもうて腹立ってんねん。結婚するとき、絶対うちを置いていかへんって言うたのにな・・・それさえ無ければホンマにええ旦那やってんで、ほれ、席に着いたら写真見せたろ。」
二人はこ洒落たカフェに入ると奥の席に腰を落ち着けた。ここでも

周りからじろじろと見られている。あからさまではないが、目が合うとそらす所を見るとやはり見ているのだろう。
「俺だけの所為じゃねーよな・・」低く呟く。なんといっても、このばあちゃん、上から下までピンクの装いだ。地味な服装が多い日本では目立つ事この上ない。注文を取りに来たウェイトレスも奇妙な組み合わせに驚いた様子だったが、俺たちはとりあえず、紅茶とケーキを注文した。

席に座ると、ばあちゃんはもっていたハンドバックの中をごそごそと探して、一枚の写真を取り出した。年代ものの白黒写真だ。
「ほれ、これが亡くなった旦那とうちの結婚式の写真。どうだい、男前だろう？」ばあちゃんはそういって自慢げに写真を手渡した。なるほど、そこには軍服らしき服を着た美男子といっても良いだろう男性と着物を着た綺麗な女性が並んでうつっていた。
「これがばあちゃん？すっげー綺麗じゃん。俺旦那よりばあちゃんの方が吃驚かも・・てかばあちゃん、外人と結婚してたんだな・・」
「あんまりばあちゃん、ばあちゃんって連呼しないどくれ。うちはまだまだ若いんだからね！」
「じゃあ、なんて呼べばいいんだよ？佐藤さん？」
「ふんっ、うちのフルネームは美津子　佐藤　バトラーってんだよ。まあ、美津子さんって呼んでもらおうかね。」
「美津子ばあちゃん？」
「ばあちゃんは要らんゆーとるやろうが・・」
「分かった。じゃあ、美津子さん。国際結婚かあ・・旦那さん何人？」
「アメリカ人だった。戦争が終わった後の日本に滞在しててなあ、大恋愛したもんじゃった。まあ案の定親からは猛反対されて駆け落ち同然でアメリカまで渡っていったんや」
「へえ・・大変だったんだね。」

空19

「まあなあ・・、あの時代に両親と日本を捨ててアメリカに渡るっていうのはほんまに覚悟が必要やった。今と違ってもっと日本人に対する風当たりも強かったしなあ。もちろん旦那も必死で守ってくれとったけど、言葉もようわからん、旦那がおらんかったら一歩も外に出られへん状況でな。毎日家とポストの往復だけの日が続いとった。」

「よくそれで我慢できたんだな？」俺が吃驚したように聞き返す。

「自分で決めた事やったからな。うちはうちの意思でアメリカ人の旦那に嫁いだんやから、文句は言われん。それでも子供ができてからは随分子供達に慰められた。昔、私みたいに戦中や戦後にアメリカさんに嫁いだ日本人はみんな多かれ少なかれ色んな経験してきてるんよ。今の若い子らは、なんかあったらすぐ離婚しはるけどな。昔はそういう訳には行かんかった。」そう言って美津子は紅茶を一口飲んだ。

「うん、うまいなあ、この紅茶、オレンジピールの香りがようしてるわ。」

「美津子さん・・はあの先生とはどういった関係？」俺は聞きたかった事を口に出す。

「ああ、センセとはな、うちの旦那がまだ生きてた頃にボストンであったんや。そりゃあ、昔からええ男でなぁ、一人で留学してはって、たまたま大学のクラスで同じクラスをとったのが知り合った初めや。あの先生は聴講生やったけどな。」

「へえ、あの先生、留学なんかしてたんだ・・・。てか同じクラスってどういう意味？！」

「ああ、うちは６０歳から４年間大学に通ってたからな。若い子ら

にまじってよう勉強したで？あんたも今大学生なんやろ？大切にしいや、今の時間を・・・せっかく親からお金だしてもらって勉強できるんや、やっとかんと損やろ？」

「６０から大学って・・・ありえね～！」和田は大げさに上を仰いでそれから、おいしそうにケーキを口のに運ぶ美津子の姿を見ていた。

「・・・なんで、先生は俺と美津子さんを逢わしたんだろうな・・？」

美津子は小さく呟いた和田の独り言とも思える言葉に耳を傾け、それからゆっくりと言った。

「ああ、先生は、あんたに足りないものを私が持っているから、それをあんたとシェアしてほしいと電話で言っていたよ。」

「俺に足りないもの？」

「そうや、でも、うちが思うにあんたは本当はそれを持ってるんやけど、今は鏡が曇っとるみたいにそれが見えてない。あんた自身、本当はそれに気がついているけど目をそらしてるんや・・・違うか？」

「・・・・。」

「まあ、でも今日はこうして色々、付き合ってくれたんも感謝してるんやで？健司、あんたは本当にええ子やな。」

何故か心が苦しくなった。こういう風に人に褒められた事は今まで一度もない。頭が良いとか、かっこいいとかそういった上辺の事でなく、初めて自分の中身を評価された様な・・くすぐったいようで何故か温かい、不思議な気持ちだった。最初は嫌々、引っ張られついて来たが、最初の嫌悪感は全て消え去り、今は純粋にこの目の前にいるばあちゃんとの話が面白いと感じている自分がいることに驚きを隠せない。先生はこんな自分を見越してこのばあちゃんと出会わせたのか、それとも他にもっと意味があるのか・・俺は淡々と考

えていた。

その後も、アメリカの大学の話や、俺が今まで聞いた事のないような話をいっぱいしてくれた。自分の周りにいる女達とはまったく質の違う話。アメリカでコミュニケーションを専門としていたと言っていたが、それこそ、話に引きずられるように魅力的な会話が続いた。

確かにこの人は自分に無いもの・・？を持っているのかもしれない。70を過ぎようとする彼女がこんなにも輝いている秘密を俺はもっと知りたくなっていた。

5時に言われた通り、カフェテリアで待っている先生の元に戻った。

「先生、今日は本当にこの子をつれてきてくれてありがとうな。ほんまに楽しい1日やったわ。」

「佐藤さん、今日はありがとうございました。楽しんでもらえて良かったです。」そういって先生は俺のほうをちらっと見やった。俺は何か言いたいのに言葉がでてこなくて、じっと黙り込んだまま二人を見ていた。

「健司、今日はばあちゃんの我が侭に付き合ってくれてありがとう。」そういってばあちゃんがぎゅっと俺を抱きしめた。何故だかわからないが俺の目から涙が溢れた。

「和田さん、もしまた、機会があれば、是非佐藤さんと逢ってあげて下さい。」先生はにっこりと笑ってそう言った。佐藤さんと別れて、老人ホームを出ると、駅へと続く20分の道のりを二人で黙って歩いた。駅へつくと、先生がもう一度言った。

「和田さん、今日は本当にありがとう。あんなに喜んでいる佐藤さんを見たのは久しぶりです。ここ日本では、若者と接する機会が少ないですしね。」

「俺に足りないもの・・・埋められるのかな？」
「ええ、きっと・・・。大丈夫ですよ。」
俺は何かちょっと清々しい気分で家へと帰った。その時には家であんな事が起っているなんて露にも思っていなかったのだ。

空２０

少し晴れやかな気分で家に辿り着いた俺は予想だにしてなかった事態を目の当たりにする事となった。いつものように玄関の鍵を開け、中に入った俺の目に飛び込んで来たものは、階段の踊り場で倒れている祖母の姿と、階段の上でしゃがみ込んで青くなっている弟の姿だった。

一瞬で何が起きたのか理解すると、俺は祖母の近くにより、脈を取る。これでも一応大学で一通りの救命活動を学んでいる。

「貴史！ぼーっとしてないでさっさと救急車を呼べ！」俺は階段の上でしゃがみ込む弟に怒鳴りつけた。その声に弾かれたように弟が顔をあげ走って電話をとるのを確かめると、今度は祖母の身体をゆっくりと仰向けに寝かせた。

不味いな・・・頭を打っているかもしれない。脈も弱々しい。一体何故祖母が階段から落ちたのかは後で貴史に問いつめるとして、とりあえずは教科書を思い出しながら応急処置を施す。

まもなく、弟が側にやってきた。青い顔のままだ。

「救急車は呼んだか？それより貴史、何があった・・・？」

「僕は・・・僕は悪くない！悪くない！」錯乱状態に陥った弟の頬を一発殴りつける。

「しっかりしろ！まさかお前がやったのか？お前が突き落としたのか？」

「ちが・・う、違うんだ、まさかあんな事になるなんて、僕は・・・」そういって貴史はうな垂れる。俺はイライラと腕時計を確認しながら弟に詳細を聞く。

「別にお前を攻めている訳じゃない、ともかくばあちゃんがこうなった理由を説明しろ！」

そうすると、ぽつり、ぽつりと弟が話だした。「今日も、いつもの通り、兄ちゃんが出て行った後で、母さんとばあちゃんが喧嘩を始めたんだ・・・。聞かないようにしようと思って、僕はすぐに部屋に戻ろうとしたけど・・・ばあちゃんが、怖い顔で僕に話があるからリビングに残れって言ったら、母さんがばあちゃんの話は聞く必要がないからさっさと部屋に戻って勉強しろって言われて、二人がまたそれで口論を始めたのを見て僕は部屋に戻ったんだ。

それからしばらくして母さんは怒ったまま、家をでていって、ばあちゃんが僕の部屋にやってきた。」

「それで？」

「部屋に入ってくるなり、ばあちゃんに詰られたんだ。お前万引きをしてるのかって。」

「万引き？お前、本当にやってたのか？」自分と違い品行方正な息子として知られる弟の告白に俺はびっくりする。

「う、うん。僕・・色々な事でストレスが溜まってるときに、友達にすっきりするからって誘われて万引きしたのが初めだったんだけど、だんだん止まらなくなってしまって・・。やっちゃいけないって分かってるけど、物をとるスリル感を味わってからどうしても、イライラした時にやってしまいたくなって・・盗ったものは全部見つからないように机の引き出しに鍵をかけて入れておいた。それが、ばあちゃん、たまたまデパートで僕が万引きしているのを目撃したらしいんだ。」

「・・・それで詰め寄られて逆上して突き落としたのか？」

「ち、違うよ！見られてたって知って、色々と怖くなって、何か理由をつけてごまかそうとしたんだけど、ばあちゃんが、俺が机の中に隠していた品物を何故か持っていて、これは何処で手に入れたって詰め寄られて、僕、頭の中が真っ白になって、ついばあちゃんを振り切って逃げようと思ったんだ。そしたらばあちゃんが僕の後を

追いかけて来て袖を掴んだからつい振りほどいたら、ばあちゃんがバランスを崩して階段から転げ落ちた・・。あっという間で、僕もしまったと思って手を差し伸べたけど間に合わなかったんだ・・・・」そういって弟は感極まったのか泣き出した。それと同時に救急車の音が近くなってきた。

救急車が到着すると俺は簡単に説明しながら、弟と一緒に救急車に乗り込んだ。救急車の中で、弟は一言も口をきかず、ずっと黙ったままだったので、俺が手短に経緯を説明する。

病院につくまでのさして長くもない距離が永遠のように感じられた。救急車に揺られながら俺は先生が以前話してくれた同級生の話を思い出していた。

状況は違えど、先生もこんな風に救急車に乗って病院へと行ったのだろうかと・・

病院に着くと、救急車から連絡が行っていたのか警察の人が待っていた。びくりとする弟に対し、その人は「大丈夫です。とりあえず、状況を聞きたいだけですから・・」といって脅える弟を別室へと連れて行った。

俺は携帯から親父に連絡を入れる。すぐにこちらに向かってくるそうだ。母親の携帯番号は知らないが多分親父から連絡するだろう。

祖母の容態が分かるまでの間、俺は病院のベンチに腰掛けると、大きく長いため息を吐いた。

空21

以外な事に親父はおふくろをつれて一緒に病院までやってきた。心無しか二人の表情は暗く青ざめている。
「母さんの様子は？」俺の顔をみると親父がすぐに尋ねて来た。
「まだわかんねぇ、集中治療室に入ったままだ。」
「そうか・・・それで貴史は？」
俺はくいっと顎で病院の待合室の方を指す。「あそこで任意の事情聴取されてるよ。」
「・・警察がきてるのか？」
「そんな・・貴史、貴史ちゃん！」おふくろは青ざめた顔で弟の名を呼びながら待合室の方へ向かって行こうとしたが、丁度それと同時に刑事と弟が連れ立って部屋からでてきた。
おふくろは刑事らしき男を睨みつけながら弟をかばうように抱きかかえた。
「いったい貴史が何をしたと言うんです！」
すると刑事が意外だという顔で言った。「デパートの防犯カメラに彼が万引きしている所が移ってたんですよ。制服から某有名進学校のものだとわかって、調べてお宅の息子さんだと分かったので、お宅に伺おうと思っていた矢先に、おばあさんが倒れられて救急車に乗って行かれたので、私もそのまま後を追ってきたんです。」

「貴史が万引き・・・？そんな馬鹿な・・」親父の唖然とした顔にいらつく。確かに俺も今日の今さっきまでは貴史が万引きの常習犯だったなんて思いもしていなかった。今までも俺だったら今日のこんな事件にも無関心でいただろう、だが・・・
「和田さん？和田さんのご家族はいらっしゃいますか？」看護士の呼ぶ声が聞こえはっとする。
俺たちはあわてて、看護士の元へ言った。

「あ、和田さんのご家族ですね。こちらの部屋に入って下さい。先生からお話があります。」
とりあえず仕方がないので、おふくろと貴史、そして警察は外に居たまま、俺と親父が先生の話を聞く為に小さな部屋に入った。

「和田さんですね？外科の大橋といいます。初めまして。ええと、和田和子さんの状態なのですが、階段から落ちたときの衝撃による、尾てい骨骨折、あと、腕の骨も折れています。一番心配だった頭は、CTスキャンをとりましたが、今の所異常は見られません。もう少ししたら目を覚まされるでしょう。どちらにしろ高齢なので、しばらく入院が必要です。」
俺は話を聞きながら、祖母が死ななかった事、そして弟が過失致死という罪を負わないで済んだ事にほっとする。だが、これからうちの中はしばらくもめるのだろう、その事にどっと疲れを覚えた。今日あった出来事が遥か昔の事のように思える。

先生に挨拶して、部屋を出て、険悪な雰囲気のおふくろ達と逢う。
「兄ちゃん・・・ばあちゃんは？ばあちゃんはどうだって？」出て来た俺に縋り付くように貴史が言った。
「大丈夫だよ。ばあちゃん、骨が折れたりしたけど、頭は打っていなかったみたいだし、時期に目覚めるだろうって」
「そう・・、よかった。ばあちゃん・・・」そういって貴史は力が抜けたようにその場にしゃがみ込んだ。「大丈夫か、貴史？」俺は弟を支えながら、目の前で気まずそうに立つ刑事と顔を合わせた。俺は意を決して刑事に問いかける。
「あのっ」
すると刑事が口を開いて俺が話しだす前に言った。「今日は、ご家族で色々と話し合う事もあるでしょうから、おいとまします。デパートからは一応被害届けが出ていますので、それについてはまた後日、本署の方まで来て下さい。」そう言って名刺を渡し、一礼して

去って行った。
個室に移された祖母の病室で親父がおふくろを怒鳴りつける。
「お前はいったいどういう教育をしてるんだ？！どうして貴史が万引きしていたのに気がつかない？こんな恥さらし！」最後の方はほとんど吐き捨てるように言った。
「あ、あなたこそ！いつも仕事で忙しいってほとんど家に帰ってこないで、私とお義母様が喧嘩しても知らんぷりなさってたじゃありませんか！」

「二人ともやめろよ！」俺は怒鳴った。
「ばあちゃんが寝てるんだ、こんな病室で言い争うなんて最低だよ。大体貴史がこんな風になったのだって、親父やおふくろ達の責任だぜ？確かに俺も今まで兄として貴史の事をちゃんと見て来なかったのは、認めるよ、だけど、親父やおふくろのそういった争いごとがどれだけ幼い頃から俺たちを傷つけてきたかわかってんのかよ？！

貴史が万引きを始めたのだって、そういうところから来てんだよ！いい加減分かれよ！」
二人は吃驚したように俺の顔を見つめた。俺は今まで親父やお袋に逆らったり何かを言ったりした事はこれまで一度も無かった。ずっとのらりくらりと波風を立てないように、感情を殺して・・そうだ、感情を殺していままで生きて来たんだ。

空２２

俺が面と向かって親父やおふくろに文句を言ったのはこれが初めてだった。今まではずっと本当は心の奥底では納得していないくせに物わかりの良い子供を演じて来たんだ。

だけど、このままではずっと俺たちは変われない。本当は何も感じていない訳はなかった。ずっと心の奥底に蓋をして知らないフリをしてきただけ。俺も、そして多分貴史も・・。

物わかりの良いフリをして一生を生きて行く事はそんなに難しい事じゃない。俺も、あの事件をきっかけに先生や佐藤のばあちゃんに出会わなければきっと何も考えずに退屈で空っぽな一生を送っていっただろう。

(俺もちょっとは変われるのだろうか・・・) 俺は親父とおふくろを促して病室を出る。貴史はじっとベットで眠るばあちゃんを見つめたまま動こうとしない。俺は貴史をそのままにして静かに病室のドアを閉めた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「・・・貴史・・」

「ばあちゃん、目が覚めたのか？！」

「ああ・・本当はちょっと前に目が覚めとった。」ばあちゃんはゆっくりと身体をおこそうとしたが、痛いのか低い悲鳴を上げた。

「じっ、じっとしてて！ばあちゃん、今看護婦さん呼んでくるから！」

「ちょっと待ちなさい！」慌てて看護婦を呼びにいこうとした僕をばあちゃんが吃驚するぐらいの強い力で腕をひっぱり引き止めた。

「大丈夫だから・・ちょっと座ってばあちゃんの話を聞きなさい。」

「う、うん・・・。」僕はばあちゃんを突き落としてしまった事を

攻められるのだろうと視線を落として次の言葉をまった。だが、祖母が話した言葉が僕が想像していたものとはまったく違ったものだった。

「貴史・・本当にすまんかったな。健司の言う通り、お前を追いつめてしまったのは私達のせいかもしれん。」

「ばあちゃん・・・兄ちゃんの話、聞いていたの？」

「ああ、聞いていた。確かに健司のゆうとおり、お前達は昔から、私と美代子さんが喧嘩をする度に泣きそうな顔をしておった。何度も私に聞いておったな・・お母さんが嫌いなのかって。その答えをお前に話したことはなかったが、今思えば多分、美代子さんでなくとも、どんな嫁でも気に食わんかったかもしれん。お前達の父親の正隆を私が女手一人で育ててきた事は貴史も知ってるな・・。お前達にはずっと、正隆の父親はお前達が生まれる前に死んだといってきたが、それは本当は嘘なんだ・・。若い頃の過ちでな、ある男と恋愛してお前のお父さんが生まれたと同時に、その男は失踪してしまって結局私が一人であの子を育て上げた。親や親戚に片親だと馬鹿にされへんようにと思って、一生懸命やって来た・・・。

あれが一流大学に受かって、医者になった時はこれでやっと親類の者達を見返せると思って・・そんな矢先に正隆がいきなり結婚すると連れて来たのが美代子さんだった。

最初は彼女も一生懸命、私の世話をしたりしてくれてたけど、息子をとられたと思った私は素直に彼女の好意を受け取る事ができんかった。そうこうしてるうちに、向こうも私の事が疎ましくなってきたんやろう、お前達が生まれてからは毎日のように喧嘩してた。

お前が万引きをしてる事はちょっと前から気がついてた。実際に現場を見るまでは、それでも嘘だと思いたかった・・。いつの間にか

正隆の代わりをお前や健司で埋めようとしてたんだ。
今日うちに刑事さん来はりやったか？あの刑事さんはばあちゃんの知り合いでな本当はもっと大事になる前にお前に話してもらおうと思って私がうちに呼んだんだ。

お前が過ちを犯したのも、私に責任がある。でも、まだ今なら修正できる・・・」
「ごめん・・・ばあちゃん、僕、駄目だとはわかってたけど、イライラしたり物事が上手く行かない時に万引きしたらスッとした感じがして止められなくなって・・・」
「わかっとる。もういわんでええ。お前の気持ちはよう分かっとるからな・・・。私が退院したら一緒に謝りにいこうな？貴史・・」
「うん・・・ばあちゃん・・・ばあちゃんをこんな目に遭わせてしまってごめんなさい。」
「それもええ、命があったら、また新しい関係を作る事もできる。美代子さんにも謝らないとな？」そういってばあちゃんは悪戯ッ子のように笑った。笑いが少し引きつっている所をみるとやっぱり傷や打ち身が痛むのだろう。
いっぱい喋って喉が渇いたらしいばあちゃんに飲み物を買って来ようと戸を開けると、其処には兄ちゃんと父さん達が立っていた。

空23

「兄さん・・・」
「ばあちゃん喉乾いてるんだろ、これで何か買って来てやれよ。」
そういって５００円玉を僕に手渡す。いつからここにいたのだろう、いや、いつから話を聞いていたのか・・。
「うん」僕は５００円玉を握りしめてその場を立ち去った。いままで万引きを繰り返して来た時は爽快感はあったが、今心の中に満たされているこんな温かな感情は得る事ができなかった。
ばあちゃんが自分を許して受け入れてくれた事がこんなに涙がでるほど嬉しい物だとは思わなかった。無条件に愛されて許される、それがどんなにかけがえのないものか僕は今まで知らなかったんだ。
ーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
先ほどまで俺は両親を病院の外に連れ出し、自分自身知らぬフリをして隠し続けて来た本心をぶちまけた。親父とおふくろは意外にもそれをずっと黙って聞いていた。そして俺が話し終えた時、親父がたった一言こう言った。
「それで、お前はどうしたいんだ？」
俺は・・・俺はどうしたいのか。改めてそう聞かれた時、言葉に詰まった。そう俺は自分が空っぽなのを知っている。今までは親父の後を継ぐという大義名分がそれを覆い隠していたが、それを払いのけた俺には何があるのか・・・
親父は何も答えられない俺をしばらく見つめていたが小さく息を吐いてこう言った。
「まあいい、とりあえず一度病室に戻ろう、そろそろおふくろが目覚めているかもしれない。」
出て行ったときとは反対に親父が先頭に立って歩き始め、その後を俺とおふくろが黙ってついていく。以外に親父の背中を見て広いな

と感じた。
病室の前まで来た時、ばあちゃんと貴史の話し声が聞こえてきた。最初ちらっと聞こえてきた話の内容に親父はドアノブを回す事無く立ちすくんだ。

話は途中からだったが、それでもばあちゃんの必死の思いはドアの外で立つ俺たちにも届いたんだと思う。ふと隣に立つおふくろを見ると唇を噛み締めて泣きそうな表情をしていた。いつもはばあちゃんと喧嘩しても気丈でプライドの高い母親のそんな顔を見たのは初めてだった。

部屋に入った俺は言葉無くベットに横たわる祖母を見据えた。４人の視線が一瞬絡み合う。誰も何も言葉を話さない。おや何と言って良いのかわからないのだ。
沈黙を破ったのは親父だった。そっとばあちゃんの側まで来るとその手を取り言った。
「貴史が済まなかった。」
「・・気にせんでええ、済んだ事だ。それに私もお前達に謝らなくてはいけん事が沢山ある・・・美代子さんにも・・」
「お義母さん・・・・」
俺は不覚にも涙がでてきそうだった。感動したとかそんなもんじゃない。ただ何か心が少し満たされたような気分だった。

弟がポカリスエットや麦茶などを手にもって帰ってきた。それから、１時間ほど、俺たちは色んなことについて話した。家族でこんなに色々な事を話すのは初めてだった。そして今まで自分がどれだけ家族の事について何も知らなかったのか、いや知ろうとしなかったのかという事を思い知った。部屋を巡回に来た看護士から付き添い一人を残し、今日はもうお帰り下さいと言われ、おふくろは、ばあちゃんの世話をすると言って病院に残り、俺たち三人は親父の運転す

る車に乗って家に戻った。こんな色々な事がいっぺんに起るとは思わなかった。

次の日、よほど疲れたのか自然に目が覚めた時には昼を回っていた。大学の講義には間に合わないな・・・。俺は部屋を出ると階下に降りて行く。

台所にはいつ戻ってきたのかおふくろの姿があった。

「遅かったのね、今日の講義は？」

「今からじゃ間に合わない、今日は欠席するよ。」俺は答えながらおふくろを見る。昨日二人残ってばあちゃんと、どんな話をしたのか、気にならないと言えば嘘になる。それに何とはなしだが、おふくろの雰囲気が柔らかくなったような気がした。

「今日、貴史が学校から帰ってきたら、一緒に昨日の刑事さんの所に行ってくるわ。お義母さんからも宜しく頼まれたのよ・・・。私、本当に貴史のこと、なにも分かっていなかったのね。母親失格だわ・・・。あなたにも、辛い思いをさせてたんでしょうね・・・。」自嘲気味に呟く。

おふくろは俺の前に、甘い香りのするカップを置いた。そういえば小さい頃はよく作ってくれてたっけ、おふくろのココア。一口、くちに含むと甘い香りが鼻孔一杯に広がった。なんだかずっと忘れていたような懐かしい味だった。

「俺は・・そうだな、少し前まで空っぽの自分を持て余してたんだ。でも最近面白い奴に出会ってさ、俺自身気がつかなかった色んな物を目の前に提示された。俺は、まだ自分がどうしたいのか分からないけど、これから少しずつ空っぽの中身を埋めて行く事ができると思う。またそいつがすげー、気障な男でさ・・・・」母親にこうして自分の事を話す事など今まで一度もなかった。なんか新鮮な気分だ。そして俺は昨日の去り際に先生が言った言葉を思い出していた。

空２４（前書き）

空、次回で最終話です。次回第３カルテ、籠る、始まります。

空２４

空を見上げて先生が笑った。「綺麗だねえ、見てご覧、この夕焼けの色！」
言われて目を上げると確かに其処には美しい色合いの夕日が目に飛び込んで来た。今まで幾度か付き合って来た女と夜景を見たり、夕日を見たりという事はあったが、別に特別綺麗だとかと思った事はなかった。ましてや、こうして男と二人で夕焼けを眺める日が来るなど今までの自分なら考えもしなかった事だ。おかしさがこみ上げて笑ってしまう。
「あれ、和田さん、良い顔して笑うんですね。最初に事務所に来たときは、目が全然笑ってなかったのに。今日は、楽しんで頂けましたか？」くすくす笑いながら先生が言った。

そんな顔をしていたのだろうか、俺は・・？「ああ、思った以上に楽しかったよ・・。」少し気まずそうに言い返す。

「知っていますか？人間、４方を塞がれて出口がないと諦めているときでも天は必ず開いているんですよ。私は何かに行き詰まった時には空を見上げて思うんです。まだ諦めるには早い、まだ天は私に向かって開いているってね。逃げる事は容易いですが、それでは根本的に何の解決にもなりませんしね・・。今までは意識すらしていなかったかもしれませんが、貴方が自分のしがらみを受け入れた瞬間からそれらは貴方の一部になるんです。

私はね、こう思っているんです。感情をまったくもたない人間などいません。人間は生まれ落ちた瞬間から、誰でも愛されて、色んな感情を得て、親や周りの色んな人達との交流から学び、考えて”選ぶ”権利を与えられているんです。昔親からまったく言葉もなく、

愛情ひとつかけられずに育った少女がいました。その子は身体も弱く、泣きも怒りも、喜びも無い無表情のまま、一切言葉を喋る事無くある病院に収容されました。その少女を担当した医者はどうしたと思います？」

「さあ・・？」

「その子をベットごと、病院のロビーに移して、ベットにこう書いておいたんです。『私の名前は〇〇です。私を見たら、私の名を呼び、話しかけて、抱きしめて下さい。』病院にいる看護士や病人の見舞いに訪れた人々はその子供をみていつも笑って彼女の名を呼び、話しかけ、時には抱きしめる。それから数ヶ月のうちにその子は表情を取り戻し、片言の言葉を話しだすようになりました。私が何を言いたいかわかりますか？」

「・・・・。」

「最初に貴方が私の元を訪れたのは、まあ三村君との出会いもあり、偶然だったのかもしれませんが、あなたは無意識にでも空っぽだと思っていた自分を変えたいと願っていたのかも知れない・・。暇つぶし・・になるかもしれないし、ですがどんな理由にしろ貴方は一歩踏み出しました。留まっている事を良しとせず、一歩前へ。それは小さな事のように見えて実はとても大きな事です。

この少女のように私たち人間というものは、良くも悪くも、周りの人間にとても影響されやすいんです。感情という宝をもって生まれて来たのにそれを無いもののように扱うのはもったいないです。若い世代の子達の中にはわざと表情を無くしてクールというんですか？そういう風に見せかけようとしている人達もいますが、私は、感情をだせるという事はとても素晴らしい事だと思っているのですよ。

そうやって素直に笑う事ができるあなたが空っぽなはずありません。
私はこれだけは断言できますよ。」

「・・・男に正面向かってそんな臭い台詞吐かれるなんて・・・俺も吃驚だよ。」照れ隠しに俺はぶっきらぼうに言い切る。失礼ですね！と言いながら彼は笑っていたが、あれから一晩経ってスポンジが水を吸い込むかのように彼の言葉はしっくりと俺の中に入って来た。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー

甘いココアを飲みつつ、俺はおふくろに言った。
「俺、モデルの仕事辞めるよ。まだ将来どうしたいのかはっきりと決まった訳じゃないけど、ひとつやりたい事見つけたんだ。」

おふくろは吃驚したように俺を見て言った。
「・・・あなたが笑った顔を見たのは何時ぶりかしら・・・。」そして感極まったようにぽろぽろと涙をこぼす。おふくろにも色々と思う事があるのだろう。親父とも、これから少しずつ話をしようと思う。そして俺はある決意を胸に家を出た。

空25

ーー先生、お昼時間空いてますか？お話があるんです。ーーー
そう和田さんから電話がかかって来て私は彼と共にこ洒落たイタリアンレストランに来ている。
「どうぞ、先生、何でも頼んで下さい。ここは俺のおごりですから・・・。」
何故かこの時、私の脳裏に無料(ただ)ほど怖い物はないという格言が思い浮かんだが、咄嗟にそれを振り払い、オーダーを済ませると、彼の様子を観察する。
何があったのか、先日あったときと様子が変わった気がする。様子が変わったといっても服装や外見の話ではない、なんというか雰囲気が違うのだ。

「それで、今日はいったいどうしたんですか？」私はゆっくりと尋ねる。
彼は先日私と別れた後に起った驚愕の話を聞かせてくれた。まさか、この短い間にそんな事が起っていたとは夢にも思わなかった。
「それは・・・、本当に大変でしたね。おばあさんの様子はどうなんですか？」
「ああ、暫くはまだ大事を取って入院しているけど、そのうち退院出来ると思う。弟や家族との関係も随分以前とは違った感じになって来たしな。」
それにしても、彼はこの事を話す為だけに私を呼び出したのだろうか・・何かまだ言いたい事のありそうな・・いやまだ言いだしていない事がある様な感じがする。そう思って顔を上げた時、彼のにやっと笑う表情が目に入った。食べていたラザニアをぐっと飲み込んでしまう。慌てて水を飲んで一息つくと、珍しく控えめな彼のテノールが耳に入って来た。

「先生・・、俺お願いがあるんですけど。」
「・・・どんな事ですか？」なんだか嫌な予感がする。
「俺を、事務所で雇ってもらえませんか？雑用でもなんでもしますから！」
暫くの間私は間抜けな顔をしていただろう。「ええと・・・和田さん・・冗談ですよね？」
「まさか・・。先生、以前言いましたよね？　俺が目的や生き甲斐を見つける為の手伝いをするって。俺、先生のところにいたら、何か見つけられるような気がするんですよ。それに心理カウンセリングって仕事にも興味があるんです。」
「だが、うちは、もう一人雇う程余裕が無いのですが・・・」ただでさえ、いつも三村君に怒られている始末だ。
「じゃあ、ただ働きでもいいです。別に金には困ってないですから。」
「いや、でも仕事といっても・・」
「だから、なんでもやります。雑用でも肩揉みでも！」
先生は俺をじっと見つめ暫く考えているようだったが、ゆっくりと息をはくと言った。
「・・・わかりました。一応三村君にも相談してみマスが、彼女が何と言うか・・。今晩、また電話をかけなおします。」

事務所への道をたどりながら私は考えていた。やはりただほど恐ろしいものはない。さて、この事をどうやって三村君に切り出すか・・・。そう考えながら事務所に辿り着き、おそるおそる三村君に話したところ、思ってもみなかった反応が帰って来た。
「いいですよ。」
「本当に・・・？」
「ええ、だって無料(ただ)なんですよね？」
「いや、まあ、確かにそう言いましたが、さすがにそれでは不味い

でしょう？」
「それじゃあ、これでどうです？」と彼女は電卓を叩いて私に見せる。
「時給５００円ですか・・？」
「無いよりはましでしょう？それに彼は別にお金に困っている訳ではないでしょうし。」
「わかりました。今晩電話をしてみます。」
「はい。よろしくです。あ、そうそう、センセ、彼何でもしてくれるですよね・・一応？」
「え、ええ・・・」
三村君はにっこりと笑って言った。「そうですか。本当に助かります。本当はもう少し人手が欲しいとは思ってたんです。センセは最初は良いんですが、半分はほとんどボランディア活動になってしまって毎月黒字になる方が珍しいですからね・・。」
「・・・すみません・・・。」
「いいえ。でも、先生、彼のカウンセリングはまだ済んでないんですよね？」
「ああ、はい。これからこの事務所に通いつつも、カウンセリングはしばらく続ける事になってます。」
「わかりました。では、彼ができそうな仕事をいくつか用意しておきます。」そういって、もう一度三村君は私に微笑んだ。本当に意外だ・・・。
その微笑みがいったい何を意味するのかは、その晩連絡を受けた和田本人が後々、身を持って知る事となる。こうして、私の事務所に、新しい事務／何でも屋が誕生したのだ。

第三章、カルテ３：籠る１（前書き）

お待たせ致しました。第三カルテ、籠る始めました。最近カメ更新ですがこれからもよろしくお願い致します。

第三章、カルテ３：籠る１

和田君が、うちの事務所で働くようになって３ヶ月が過ぎようとしていた。最初の出会いの事もあり、三村君との事も少し心配していたのだが、三村君は実に良く彼を使っているようだった。それこそ何でも屋のようだ。ある日はオフィス用品の買い出し、顧客の名簿作成など、オフィスの仕事も教えているみたいだが、先日果ては、トイレ掃除までやらされていた。元雑誌の人気モデルをしていた大病院のお坊ちゃまとは思えない・・。人間変われば変わるものである。

だが、文句ひとつ言う事無く仕事をする彼をみて本当に変わったなと思う。以前の彼であれば、今の様な姿は思いもよらない物だ。

「和田君、今日はお昼からくるんでしたね。どうです？今日は久しぶりに出前でもとりませんか？」私はデスクに座ってＥｘｃｅｌ作業をしている三村君に向かって声をかける。

彼女はちらっと顔を上げると、作業時だけかけている、度の低い眼鏡をくいっと指で上げ聞き返した。

「別に良いですけど・・・。今日は私もお弁当を持って来てませんので。ということはあそこですか？」

「ええ、最近少し寒くなってきましたしねえ。この間店の前を通ったら新メニューがでていたんですよ。その時忙しくなければ是非とも食べたかったんですよ。」

「ほたての甘辛炒めキノコ入り八宝菜ですよね・・？分かりました。和田君へは後でメッセージを残しておきます。今頃授業の真っ最中でしょうから。」そういうと、三村君はパソコン画面へと視線を戻した。

私はというと、クスリと心の中で笑う。なんて事は無い、三村君も

しっかりと新メニューをチェックしていたようだ。それから私はデスクへと戻り、先ほど三村君より手渡された新しい顧客のファイルへと目を通しはじめた。明日この事務所へこられる方なのだが、実は以前にも２～３回、電話でのカウンセリングを行っていたこともある方だった。

顧客の名は、木原美枝子　５６歳、家族構成は息子二人と娘が一人。引きこもりの数が毎年のように増大するばかりの現代。特に最近では、３０代や４０代の引きこもりや鬱の数が増えて来たと言われているが、今回の引きこもりの相談も例に漏れず３０代の息子のものだった。

鬱や引きこもりになる原因は様々だが、もちろん人によってその症状の重さや内容で対応は１８０度違ってくる。今回のケースは何かと複雑が事情も見え隠れしている様なのだが・・・。

私はデスクの下でゆっくりと足を組み替える。

おおまかな彼女の話はこうだった。ありふれたサラリーマン家庭、長男は既に結婚し、１女をもうけている。また末の娘も最近見合いで結婚が決まったそうなのだが、問題は次男の事だ。

もともと次男は長男よりも出来がよく、頭が良く、従順な次男を母親は目に入れても痛くない程可愛がっていたようだ。兄はさっさと家を出て、結婚しほとんど家には寄り付かないようだが、娘の方は、結婚するまでまだ一緒に市内のアパートに住んでいる。

次男は国立の大学を卒業した後、しばらくは銀行員として就職していたが、ある時期を境に自宅の部屋へと引きこもるようになったのだという。引きこもりのきっかけについて私は幾度か彼女に尋ねてみたのだが、まったく心当たりは無いという。

では、仕事の方で何かトラブルやストレスがあったのかもとも考えたが、その辺の事については、今、和田君が調べてくれている。すべてのクライアントに対してという訳ではないが、こういった心に

関する仕事をしていると、様々なトラブルに巻き込まれる事が少なくはない。
アメリカは訴訟大国ということもあり、もちろんクライアントの情報は機密だが、ある場合においては、徹底的に裏を調べる事も必要な時がある。

今回の場合がそう言う場合だという訳ではないが、引きこもりになった原因を調べる上で彼の生活や会社での事を少し調べているのだ。情報を調べたり、近所や職場での聞き取り調査に和田君は意外な才能を発揮していた。いわゆる世間一般でのモテ顔(というらしい)を駆使して、近所のご婦人方や、果ては銀行の女性社員らからクライアントから聞かされる事がなかった、息子、木原淳一の以外な面が見えて来た。
その一つが、どうやら彼には、両親には秘密で付き合っていた女性がいるらしい事。その女性とはかなり親密で、結婚まで考えていたらしい事、そして破局。

母親の前では従順な息子だったという彼だが、その実、とても神経質で切れやすく、ねちねちした性格であったらしい事、クライアントとの話だけでは見えてこない影の部分もうっすらと見えて来ていた。しばらくいくつかの情報を頭にいれつつ、考えていると、事務所の玄関が開き、和田君の声が聞こえて来た。
いつの間にか、時間は１２時を回っている。私はファイルをデスクの中にしまい込むと、福萬圓の新メニューを思い浮かべながら、扉を開いた。

籠る2（前書き）

長らくお待たせいたしました！アルファポリス様のドリーム小説大賞にあわせて連載を開始しました。３話目、籠るをよろしくお願いします。

籠る2

「あら、思ったより早かったのね。」颯爽と入って来た和田君を見て三村君が声をかける。
「ええ、今日は授業が半ドンだったんで。あ、先生例の頼まれてた件について色々と新しい情報を手に入れたんで後で時間取れますか？」
「そうですか。本当に吃驚するほど仕事が早いですね。では昼食の後に少し時間があるので、その時にどうでしょうか。」
「はい。」
「そうそう、和田君お昼まだでしょう？今日は先生の提案で福萬圓からオーダーを取ってるので皆でいただきましょう。」
「まじっすか？ラッキー！」
「ははは。確かにそろそろお腹がすいてきましたね。そろそろ出前がくる頃でしょうか・・？」
くすりと笑って三村君が椅子から立ち上がった。「そろそろ来ると思いますよ。お茶でも入れて待ってましょうか。」
ふわりとしたお茶の香が鼻孔をくすぐりだす頃、丁度福萬圓からの出前が届いた。ほたての甘辛炒めキノコ入り八宝菜はとてもおいしそうだ。

「そういえば、こうやって3人でお昼を食べるのって初めてですよね。」
私と同じ事を考えていたのか、三村君がぽつりとこぼす。
「そうですね、そういえば和田君が入ってきてから、まだ歓迎会も何もやってませんからねえ・・。」
「え、歓迎会してくれるんですか？」和田の表情につい笑いを誘われてしまう。ご褒美を待つ犬のようだ。
「ええ、もちろんですよ。皆の都合の良い日を決めて歓迎会をしま

しょう。」
「じゃあさ、先生今度駅前に新しくできた焼き肉にいきませんか？ダチがこの間食べに行ってかなり旨かったっていってたからちょっと気になってたんです。」

「焼き肉・・ですか？」
「あ、嫌ですか？」
「いえ、私はかまいませんよ。三村君は如何です？」
「私もそれでかまいません。後で日時を決めましょう・・といっても3人だけですけどね。」そういってクスリと笑う。
「そういや、そうだよな。」ひとしきり笑いながら会話を終える頃に3人ともぺろっと福萬圓の八宝菜を食べてしまい、そそくさと仕事モードに入る。

「先生、2時半から例のクライアントさんがいらっしゃるので、それ迄に和田君との打ち合わせを終わらせておいて下さいね。」そういって三村君がＰＣの前に座ると私たちも隣の部屋へと移動した。

「で、先生さっそく調査内容についてですがクライアント木原美枝子の息子、淳一が以前勤めていた会社で聞き取りをしてきたんですが、今回彼が結婚を前提につきあっていたという女性にコンタクトする事ができました。」
「それは・・。ということはその女性にあってもう話を聞いて来たと言う事ですか？」
「はい。相手の女性は狭山良子27歳、父親を亡くし、母子家庭で育ったようですが、芯のしっかりした女性で正直会社で聞いた隆のつき合っていた女性とのイメージとのギャップが大きくて吃驚したんですよね。」
「なるほど、もう少し君が抱いたイメージを並べてみてくれますか

？」
「えっと、外見はごく普通ですね。取り立てて美人ということでもないが、笑うと片えくぼができてなかなか可愛いイメージはありました。性格は、一度会ったきりなので深い所まではわかりません。だけどまあさっき言った通り温厚、芯が強そうな感じではありました。」
「ふむ」私はそのまま続ける様に相づちを打つ。
「彼女との付き合いは1年半ほどだったようです。つき合っていた当時の彼の様子を聞いた所面白い話が聞けました。」

ーーーーーーーー以下回想

「淳一とはたまたま友達に強引に誘われて出た合コンで知り合ったんです。こんな地味な女相手にしてくれる人も少ない中、彼は結構積極的に声をかけてきてくれて、一応その時にメルアドも交換してたんですが、正直連絡があるとはまったく思っていませんでした。それから数日して彼から食事の誘いがあった時は本当に吃驚して、でもその食事の席でつき合わないかって言われてすごく嬉しかったんです。

デートの場所ですか？
その時々によって違いましたね。ええ、ごく普通のデートです。

彼の両親？
・・・・・。いえ、お会いした事はありません。

彼の性格ですか？
ふふ、確かに少しねちっこい所はありましたね。神経質というか・・・。些細な事で怒りやすいところはありましたね。沸点が低いという

か。たぶん彼自身は自覚してませんでしたけど、少しマザコン気味な気があった感じですね。なんて言えば良いのかな・・・。頭はとても良いんだけど子供っぽいところが結構あって。
そう、二人でいる時は特にそんな感じだったかな。甘えたがり？

ーー最後の質問なんですが、もし彼ともう一度復縁・・できるとしたらどうしますか？
・・・わかりませんーーー。あの、でもどうしてそんな事？彼、今結婚しているんじゃないんですか？その彼のお母様が選んだ女性と・・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「なるほど、彼は彼女と別れて母親の選んだ女性と結婚する予定だったと？」
「はい。彼女はそういってました。それで彼から別れを切り出されたと。」
「木原さんにも、もう少し事情を聞いてみる必要がありますね。わかりました。後で、資料にまとめておいてください。和田君・・・お疲れさまでした。」
そういうと和田君ははにかんだ笑みを浮かべ、そそくさとノートパソコンをもって三村君の元へ歩いていく。

本当に彼は素晴らしい助手に成長しつつある。観察眼、そしてある種の感はこの職業になくてはならないものだ。そしてそれを彼はその才能の鱗片を確かに有している。私は彼の後ろ姿を見ながら感じていた。

籠る3

「センセ、クライアントの木村さんがお見えになりましたよ。」アポイントの時間を分ほど過ぎた頃、三村君が木村さんの来訪を告げにきた。
応接室に入って来た彼女はうつむきがちにソファーに腰掛けた。以前に会った時と比べて今日はいささか態度がおかしい。
「木村さん・・？」
私の声に顔を上げた彼女の目の回りにはくっきりとした黒い痣があった。
「どうなされたのですか？その顔・・」

「なんでもないんです。えっと、その、不注意でこけてしまって。その気にしないでください。」おどおどと彼女が言い募る。
「・・そうですか。いえ、本当に大丈夫ならかまわないのですが・・・。」どうみてもそれは転んでできるような痣ではない。殴られた痕だろう。だが本人が話したくないのであれば今はまだ無理に聞き出すことは避けた。

「早く顔の腫れが引くと良いですね・・お大事にしてください。さて、木村さん、前回の訪問から1週間経ちますが、息子さんの様子はいかがですか？何か進展はありましたか？」

「いえ・・何も。」
「そうですか・・。まあ3年もの間引きこもっていてこの1週間で何か進展があったかと言う方がおかしいですよね。今回私の方からいくつか質問と提案があるのですが、お話しても宜しいでしょうか？」
「え、ええ。」

「以前息子さんの引きこもりになった原因について、木村さんは心当たりがないとおっしゃっていましたが、とある筋から3年前に彼が引きこもる前にお付き合いをされていた女性がいたと聞いたのですが、木村さんは何かご存知ですか？」

「ええ、居ましたよ。本当に申し分のないお嬢さんで、私も夫もいつ結婚するのかとそれはそれは楽しみにしていたんです。それなのに・・何が不満なのか突如引きこもるようになってしまい、そのお嬢さんとの婚約も駄目になってしまったんです。」

「失礼ですが、そのお嬢さんはどういうきっかけで息子さんと婚約する運びとなったのですか？」

「息子が以前勤めていた銀行の頭取のお穣さんで、ある筋を通してお見合いさせたんです。」

「つまり、あなた方がお見合いをセッティングされて婚約されたんですか？」

「そうです。」

「・・息子さんはその婚約には乗り気だったんですか？」

「もちろんですよ！　本当にこれ以上ない良縁でゆくゆくは私たち夫婦とも同居することに賛成してくれていて・・・あああ、もう本当に！何故こんな事になったのかしら？！」

「・・・。つかぬ事をお聞きしますが、息子さんにはその婚約した彼女以外につき合っていた女性が居たという様な事は聞いていませんか？」

「息子の女性関係ですか？そりゃあの子はとてもモテましたからつき合っていた女性の一人や二人は居たかもしれませんけど、全部遊びでしたよ。」そうはっきりと断言する木村に多少呆れつつ、もう

少し深く事情を聞いてみる。
「遊びですか？それは息子さんがおっしゃっていたんですか？時に、狭山良子という女性をご存知ですか？多分、息子さんが婚約される直前迄お付き合いされていた女性らしいのですが。」

「狭山良子・・？ああ、一度だけ聞いた事があるわ、その名前。」
「それはいつ頃？」
「そうね、頭取のお嬢さんとの見合いの少し前だったかしら、その狭山なんとかって子と会って欲しいって言われて写真を見せられたーーー。」
「それでお会いになられたんですか？」
「まさか！頭取のお嬢さんとのお見合いを控えているのに何を言ってるんだって・・・ああ、そうそう思い出したわ。確かその女片親でなんとも地味で見栄えのしない娘だったのよ。あの頭取のお嬢さんとは比べ物にもなりやしない。」そうつぶやくクライアントに私は一瞬頭を抱えたくなった。どう考えても彼が引きこもった原因はそこに端を発しているのだろうが、当の本人はそれにまったく気がつくこともない。

「木村さん、会ってもいない女性の事をそう悪し様に言うのは女性の美学に反すると私は思うのですが・・・？息子さんが引きこもられたのはそれが原因とは考えられませんか？」

「は・・い？どういう事ですの？」

「ですから、はっきり申し上げますと息子さんはその頭取のお嬢さんとではなく別の女性と結婚したかったのではないのですか？」

「そんなっ、いえ・・・でもあの子はあの時婚約に関して何も・・・」

「文句は言わなかった？　いえ、言えなかったのでしょうか・・・。木村さん、もう一度確認しておきたいのですが、貴方は本当に息子さんの引きこもりをなんとかしたいと思っていらっしゃるんですよね？」

「も、もちろんですわ。」

「そうですか。私に良い案があるのですが、それを行うには予め木村さんにもいくつか了承してもらわないといけない件があります。これからその事をお話しましょう」そういって私は静かに微笑む。目前に座る木村美枝子がまるで十代の少女の様に頬を染めて頷いた。

応接室の外からその様子を見ていた和田が「さすが先生・・女たらし」と突っ込んでいた事は知る由もない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1279h/

人間の形

2011年6月8日19時51分発行